

連載専門誌

対人援助学マガジン



第三号

2010/12/15



対人援助学会

別冊付録マンガ
不登校児の琵琶湖一周
サイクリング

対人援助学マガジンの 上手な読み方

先日の第2回対人援助学会WSでのことです。「マガジン」の読み方について、ある人から聞かされた話をしたところ、思いがけない好評を得ましたので、それを書いておきます。

その人は最初、「対人援助学マガジン」一冊をプリントアウトしたそうですが、なかなか読みきれなかったと言いました。クリップで留めて、机の上に置いているうちに、書類の山に埋もれてしまったそうです。

そこであるとき、改めて、今度は関心のある章(特定の執筆者)だけを、プリントアウトしたそうです。こうするとたいてい4, 5頁から多いモノでも10頁。

バッグに入れて出張先に向かいました。電車移動の車中、昼休みなどに目を通していたら夕方には読み終えていました。

そこで、そのとき仕事で一緒になった、隣接市の同職者に、「今これ読み終わったんだけど、面白かったので、良かったらどうぞ!」とペーパーを渡して出典の「対人援助学マガジン」へのアクセス方法も話したと言います。

これはなかなか素敵な読み方であり、PRでもあります。100頁を超す「対マガ」(何でも縮めて言う傾向はお気に召しませんか?)を常時持ち歩いても、なかなか読めません。荷物になるし、鞆の中でだんだんボロボロになりますね。

ところがこの方法だと、読み終えたところで荷物が減ります。受け取った相手が、読むか読まないかは自由ですが、受け取る側には新規情報であるのは確かでしょう。

WEB版マガジンに、こういう読み方、使い方があるのは発見でした。是非皆さんも、お試しいただきたいと思います。

そして、お読みになった章、文章だけの感想で良いので、フィードバックをいただくと筆者達のモチベーションも、いっそう上がると思います。どうぞよろしく。

(編集長)

目次

知的障害者の労働現場 003 たかがガムテープ、されどガムテープ	千葉晃央 04-08
社会臨床の視界 (3) 社会臨床という思考のレッスン	中村正 09-25
ケアマネの会った家族たち(3) 独居老人と娘の物語	木村晃子 21-25
街場の就活論 vol.3 新卒採用に今、何が起きているのかー	団遊 26-28
心理療法が始まるまで(3) ~コミュニティと病院で~	藤信子 29-31
ケースのツボとそこに合わさる言葉(2)	岡田隆介 32-34
映画の中の子どもたち3 「冬の小鳥」 子どもの目線でみるということ	川崎二三彦 35-36
子どもと家族と学校と 不登校は学校が悪い?それとも家族が悪い?	中島弘美 37-40
蠅螂の斧(とうろうのおの)-社会システム変化への介入-part1-第三回	団士郎 41-47
学校臨床の新展開 学校と児童虐待	浦田雅夫 48-50
(3)ポストモダンな学びのスケッチ-繋がりの中で見えてくるもの-	北村真也 51-56
幼稚園の現場から	鶴谷主一 57-63

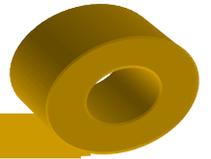


福祉系対人援助職養成の現場から	西川友理 64-67
我流子育て支援論(3) ~乳児期~	河岸由里子 68-73
不妊治療現場の過去・現在・未来 3 ~変化するもの・しないもの~	荒木晃子 74-77
対人援助学の里程標 3	サトウタツヤ 78-79
小さな「怪獣たち」とのドラマセラピー 3. つづく「いじめ」のドラマ	尾上明代 80-89
家族造形法の深度(3)	早瀬一男 90-96
旅は道連れ、世は情け 研究所二十周年を迎える 前夜	村本邦子 97-100
きもちは言葉をさがしている 「紅茶の時間」とその周辺 第2話	水野スウ 101-106
やくしまに暮らして 第二章 特別か個別化	大野 睦 107-109
新連載 お寺の社会性(壱) 生臭坊主のつばやきー	竹中尚文 110-112
執筆者近況&プロフィール一覧	113-115
またまた長い編集後記	編集長&編集員 116-118
付録マンガ 「こども旅 不登校児の琵琶湖一周サイクリング」④	団士郎 別冊 01-41

たかがガムテープ、されどガムテープ

1 工程 @ 1 円 ~ 知的障害者の労働現場 003

千葉 晃央



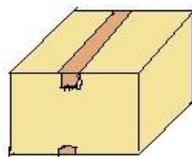
■ガムテープに左右される作業の難しさ

ガムテープなどのテープ類は、下請け作業をするときには、つきものだ。お菓子の仕事、建築資材の仕事、Tシャツの仕事など、どんな仕事にもテープを張る工程は含まれている。そのテープには様々な種類がある。幅、厚み、材質、値段…。下請け作業をする際には、その作業をするときの副資材として、どちらが準備をするかに関して福祉施設と業者の間で話し合われる。基本的には副資材も一式業者持ちで、作業をさせていただくことが多いが、時には福祉施設持ちという場合もある。なので、いかにコストを抑え、先方業者が満足するテープを使うかを知的障害者の労働現場の福祉職は検討をすることになる。

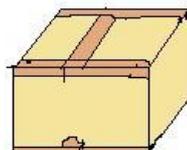
これまで多くの種類のテープを使ってき

た。一番多いのは、よくある茶色の紙製のものだが、テープの幅が先方から指定され、細いものを使う場合もある。時には布テープも用いる。ガムテープは、段ボールを組み立てた時、上下のふたと底に当たる面を閉める際に使う。テープが細いとコントロールが難しく、まっすぐに貼りにくい。まっすぐにならないとかなり目立ってしまう。ガムテープを貼る工程を、知的な障害を持つ利用者がすることも多いが、細いとできる人も限られてしまう。テープも安いとテープの厚みが薄くなる。貼ろうとしてテープの端をめくると、ペラペラ故に、モノに貼る前に伸ばしたテープが引っ付いてしまうこともある。張ったときにシワができやすいのも特徴的だ。そして、少しの切れ目で勝手にどんどん裂けてしまうようなテープもある。このようにテープの幅や厚みか

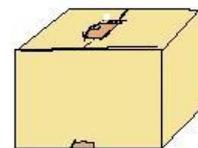
一本貼り



H貼り



一点貼り





ガムテープをあらかじめ、切って、体にゆるく貼って準備しておく。

頭は、髪の毛が入ったら、よくないので、バンダナ等かぶっていることが多い。

ら、その工程を利用者がするのか？職員がするのか？が決まってくることも多い。

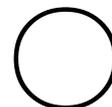
一番良く使うのが段ボール箱を組み立てる時だ。テープの貼り方にもいろいろとある。よくあるのが「一本貼り」と「H貼り」だ。段ボールのふたと底の面を止めるところに一本、これが「一本貼り」。そして、その一本に直角になるよう両端の2か所に止める（上から見ると「H」の字になるようになる）ふたと側面の段ボールのあわせ目に張るのが「H貼り」。（シップのコマースシャルの「介の字貼り」と同じ、ネーミングの仕方ですね。）当然、「H貼り」になると一箱あたりに使うガムテープの量も多い。よって、ガムテープ代にも注意となる。「H

貼り」になるかどうかは、箱の中身が重いか軽いかで決まる。重い時は「H貼り」に一本加えた強化版もある。（「H貼り」の中央に一本増やして「王の字貼り」とはいわないが、どんなものかもう想像できますね？）お菓子や箱を段ボール箱に入れているときは「一本貼り」が多い。また、「すぐにはがす」と決まっているところに貼る時もある。そんな、ただふたを止めるだけの時は「一点貼り」といってふたの真ん中を止めるだけの時もある。納品後すぐに開けたり、半端をメモで仮に箱に貼ったりとかの場合である。その時には、先方への配慮がこちらに求められる。業者の方がガムテープをはがしやすいように、めくりやすく

普通に貼るとはがしにくい！
はがし始めのところめくれない！



内側に折り込んでおくと、
はがしやすい！！



端を折り返しておく。施設と取引きをする会社への顧客満足度といわれるようなところで、そういう配慮をしているかどうか相手との印象が大きく違って来る。

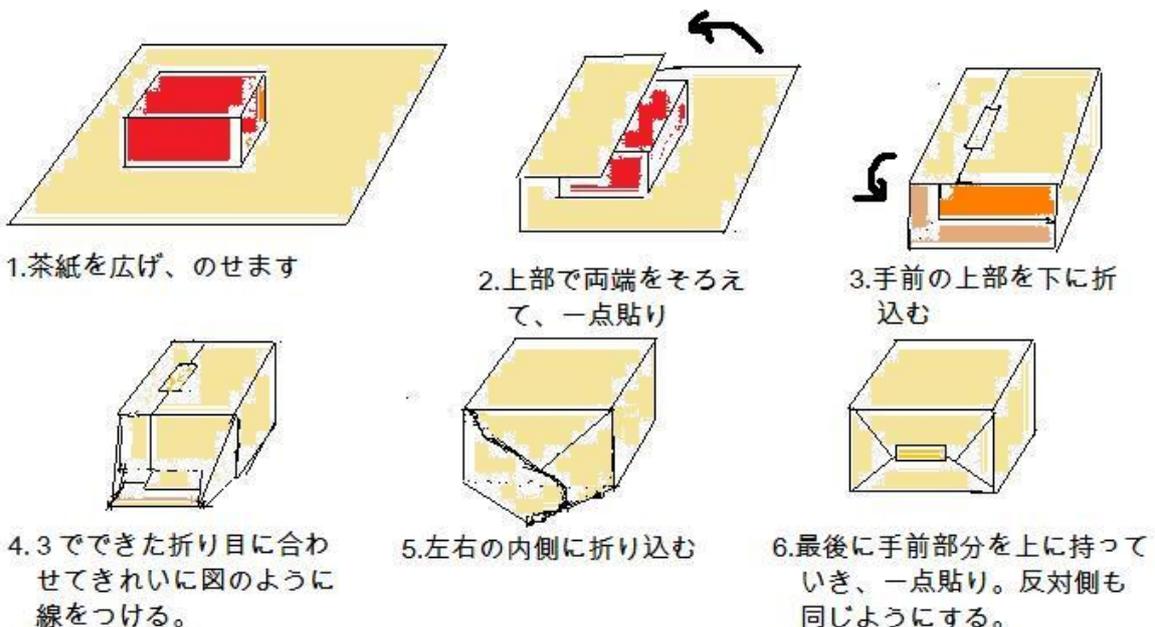
ガムテープを切るときには、アルミ製のテープに巻きつける（テープ自体にはめる）刃をつけて使う。（※前号の挿絵参照）たくさんガムテープを買ったとタダでついてきたりもするが、普段は有料だ。一度に50箱とか短い距離をガムテープで貼るときは、あらかじめその距離を目測で何枚も切り、作業をしている体に貼っておくと、何度も貼る対象物とガムテープをもちかえる時間が減り、作業がはやくなるというテクニックもある。

このように単にガムテープを貼るという作業だけでも、かなりの方法と難しさが付きまとう。以上のような点を踏まえて、その作業を職員がするのか、利用者がするのかを検討する。一番の外箱のガムテープがきれいに貼ってあることは、大事なファースト・インプレッションであり、当然きれいな方がいい。なので、ガムテープを貼る

というのは利用者の誰もができる作業ではない。そんななかで、利用者のなかでも上手な人は、「キャラメル包み」も任されている。「キャラメル包み」は、箱の組み立てをしたときに運搬時に汚れない、傷がつかないように茶紙で包む時によく使う包み方で、それはキャラメルが包まれている包まれ方と似ているところからのネーミングだと思われる。

■ガムテープ底値情報をキャッチ！

そんなガムテープもどこで仕入れるかは、ガムテープが施設持ちの場合はかなり試行錯誤する。よくあるホームセンター（特にそのホームセンターのオリジナル商品）、包装用品専門店、文房具店などが主な購入先で、単純に安いとよいかといわれるとそういうわけではない。前述のように、裂けやすかったり、薄すぎて貼りにくかったり、粘着力が少なかったりなどが、あるので要注意である。よく、この業界の人は業者の方も福祉施設の職員も、「あそこが安かった



でえ」と情報交換をしていたりする。私が住む地域では、市場の近くに複数包装用品専門店がある。ガムテープ、ビニール袋など、作業に用いる多くの副資材がここで調達する。大きさ、厚み、材質などの違いによる多くの品ぞろえの中から、的確なものを選ぶ。そんな店の情報も、知的障害者の労働にまつわる現場のスタッフには重要になってくる。

「ガムテープ代などは、そちらで仕入れていただいて、コスト押さえて、利益を上げることができるし、そちらの力の見せ所ですよ」と業者の方に言われることもある。ただ、こちらで仕入れるとなると、自分たちで買いに行き、出金伝票を書いて、どれを使うか決めて、とすることが多くなることも当然ながら含めて判断しなければならない。利用者が来ている時間に職員が施設外に出るということは、利用者への職員の目も減るし、利用者とも接する時間が減る。かといって、利用者とともに、車で買い物にいつていると、もし事故にあったとしたら、なぜその利用者の方と一緒にいき、なぜこの方の危険にあうリスクだけ増やしていたのかと問題にもなりかねない。本人の判断、家族の判断が…となるが、ガムテープなど買いにいくたびに、了解を得るというのも非現実的であるし、40名以上いる施設の利用者のうち少数しか車に乗れないのに、なぜ、うちばかり行くのか？なぜうちは選ばれていないのか？となると、これまた更に難しい判断が求められる。

■利潤動機ではない、福祉職の動機づけ

「福祉の人は、職員の給料が実績で伸び

たりしないし、やりにくいわ」と言われたりもする。実績というのものがわかりにくいのが福祉であったりする。成果主義的な人事考課を日常的に行っているところも少数だ。そして、ステップアップ、出世という動機もなかなかつくりにくいように思う。職員の肩書もヒラの次に、園長という2段階のところも多い。職員数が少ないので、あっても主任ぐらいである。このごろはそれとともに、非常勤や、契約の職員がいるというところが福祉職の職員構成だ。一般企業と同じような雇用形態の構成が人を対象とする職場で起きている。人に対し、「このような援助をすべき」論はいくらでもあったが、そんなことよりも、そこで働く人自身の労働条件、労働環境が援助を受けたいぐらいという状況もある。非常勤→契約→常勤→主任という仕事の集中と、特に常勤スタッフ以外の働く動機形成の難しさは、福祉現場でも同じである。

福祉職を選んだ人は、基本的に「利用者のために何かできるなら…」というのが、第1優先の価値観であることが多い。たくさんのお金が欲しければ、この業界には踏み入れない。仕事一つ一つも、利用者にとって意味があるかどうか？で判断するので、他の業界とは違う行動の動機があるのは事実だろう。先ほどの職員組織での役職のなさも、このごろのビジネスのところでは、社長がいないという会社も時折取り上げられているので、単純な批判はできないだろう。ただ、自分が頑張ればみんなの給料が上がるということが福祉現場ではないので、やっぱり異なるのだろう。マイケル・ムーア監督の最新作、映画「キャピタリズム」（資本主義）では「国民は利潤動機が第1で動く」ということを取り上げた場

面が何度も描かれている。知的障害者の労働現場は、そのキャピタリズムのもとで、相反するともいえる価値観を持つ象徴的な現場である。

利潤動機で動く「一般」とそうではない「福祉」。それがやっぱりのみこめないと感じて、援助と作業を並行してすることはできない！とって辞める新人もいた。企業の人から「福祉職はやる気がない」と過剰に思われてしまう場面にもあった。その背景には、その独特の取り巻く状況が福祉領域における就労現場にはあることが大前提となる。それを包含しながら、施設という場は日々を重ねていく。その日々にかかる出来事は異なった価値観が共存した結果という、「複雑な日常」といってもいいだろう。
(全ての画:ちばあきお)

■ガムテープには、ガムテープを■

作業をしていると、作業のやり直しはつきもの。段ボールにマジックで字を書いたものを修正したいときは修正テープがわりにガムテープを貼ります。茶色の修正テープはありません。(チバ調べ)表がつるつるではないタイプなら、字も書けます。

あと、よくあるのは、はがした跡がなかなか取れない、はがす時にきれいにはがしたいという時。基本、ドライヤーなどで温めて、粘着部分を柔らかくして取りまです。他に、貼った面が丈夫な場合は、ガムテープの粘着跡に、ガムテープ短く切って、粘着面を粘着跡に何度も、貼ってはがしを繰り返して、ペタペタとしていると粘着面が粘着跡を取ってくれます。「目には目を」ハンムラビ法典的テクです。はがし液、油系でもはがせますが、汚れるので作業ではあまり使いません。

社会臨床の視界

(3) 社会臨床という思考のレッスン

- メビウスの輪のようにねじれてつながる関係性を理解する -

中村 正 (立命館大学大学院応用人間科学研究科)

1. メビウスの輪のように

何らかの臨床上の課題をもつ人とそれを取りまく人の「あいだ」に関心があるという話しをしてきた。その「あいだ」は「ねじれて・つながる」ようだ。しかしこれは、循環と再生を意味するメビウスの輪のようなつながりでもあると思う。何故なら、「私」はそうした臨床問題を持つ人と同じこの時代と環境を生きているからだ。このつながりを意識できるようにしたいと考え、「臨床社会学」という演習や講義で教えている。このマガジンで連載しているような視点から、臨床問題やその背景にある社会病理、あるいは逸脱行動やその背後にある日常性について学生たちとともに考えるようにしている。

学生たちのものの見方は社会の意識、態度、認識の縮図としての自然発生的なものなので、それを省察的な方向性へと変えていくことには意味があると考えている。とりわけ、いじめ、ドメスティック・バイオレンス(DV)や虐待という家庭内暴力、ひきこもり、リストカット、自殺、非行、犯罪、各種の依存症などへの関心は高いが、その見方は一面的であることも多い。くわえて、メディアによって影響された関心と知識は強固でさえある。ステレオタイプ化されたものの見方が柔軟な学びを邪魔している。

知的で冷静な省察にとって、まずはそうした構築物を取り除くことが重要となる。これは「脱学習 unlearn」そのものである。焦点としているのは、心理化する社会では臨床問題や逸脱行動が「個人化された問題」として観念される点である。その背景を成している社会病理とそれらが生成する関係性を視野に入れることへと意識を脱構築すべきだと思う。個別性のなかに社会性を読み取る視点とでもいえようか。自己責任や自立を強調してきたゼロ年代の意識と感性を反映しているので、「脱学習」は心理化、個人化、医療化などという類型的で型にはまった思考の傾向を対象にしていくこととなる。

さらに、感情までもがステレオタイプ化されていると思えることもある。何故なら、学生たちはよく「感動」するからだ。ドラマやニュースなどをとおして飼い慣らされた「感動」がある。あるコンテキストがつけられているようにも思えるので、「脱感作」を試みる。心理療法的な意味での脱感作法は不安、恐怖、緊張、葛藤を生起させる事柄を想定し、徐々にそうした感情を受け入れていくという技法であるが、ここでは比喩的な意味で用いている。慣らされた感情表出を置き換えていくことの大切さを考えるために使っている。エモーショナル・リテラシーといった方がいいかもしれない。

臨床問題への関心や逸脱行動への興味を

動機づけるのは身近な体験や個人の経験、喧噪のなかの報道、不条理への憤り、ヒーローな物語への共感など多様であるが、いずれも感情が駆動している。理性よりも感情はパワフルである。であるがゆえにクールダウンが要る。そのための「脱感作」である。非合理な方へと若者を捕捉する感動の意味づけを相対化することは社会臨床の観点から必要である。最近の体験では、『告白』という小説とその映画作品について多くの学生が「感動」したということに驚いた。原作がエイズウィルスを凶器として扱っていることに違和感以上の問題性を覚えたこともあり、批判的なものの見方が衰退していると思った。

以下に紹介するのは断片でしかないが、常識的な思考の枠付けを可視化させ、脱構築していくためのレッスンである。1) 社会のもつ支配的な物語(意味づけの体系)の相対化、2) 医療化などのパワーをもつ言説と政策に傾斜しがちなことの気づき、3) リスク論的なものの見方の前景化、つまり保険統計的な思考が支配するリスク社会の理解、4) 異なる視点からみると同じ事態の別の相が見えてくるダブルスタンダードに気づくことの大切さ、5) 二分法的思考による選択肢の喪失に敏感になること、6) 相互作用という視点を会得すること、7) 関係の非対称性に配慮すること、8) 認識の地と図の関係を理解し、問いと応答を反転させてみて相対化を試みること、9) 自己へと再帰する個性発揚社会の負荷があること、10) 絆とつながりのかたちが独立変数となることの意味という諸点である。知の解毒とでもいえようか。

こうした「脱学習」と「脱感作」は「認知 - 行動 - 感情」のつながりを意識したも

のである。学校で勉強していた頃、補助線を引くと数学の問題が解けたように、「思考の補助線」のようにしてこのレッスンが効果を発揮すると、ある種の凝り固まった頭が揉みほぐされていくようなこととして機能するとよいと思っている。くわえて、対象となる臨床問題や逸脱行動に関心がむかう「自己=私」との関連をつけて欲しいと願ってもある。そこに関心をむける「私」とそれら諸現象の「あいだ」にはなお溝があり、第三者的な好奇心が支配している(これは臨床問題や社会病理へのメディア的関心でしかない)。しかしその溝は「ねじれて・つながる」ひと続きの社会現象なので、せめてその「つながり方」については意識をもつことが大切だと考える。複眼的なものの見方、微視的(ミクロ)な見方と巨視的(マクロ)な見方の会得、関係性を理解するための俯瞰的な知識、相互作用の形式に関しての理解、認知的な枠組みの再構築、こうした事項に関心をもつ自己の立ち位置の明確化をねらいとして臨床社会学・社会臨床学の学習をまずはすすめていく。

同時に、これらを学ぶ他者とコミュニケーションする<場>の形成にも努力している。インターネット上にある授業のサイトでコミュニケーションする。演習で発表が終わるとそれに私がコメントをする。学生たちもそれに応えるようになっている。

こうした作業は、「臨床問題を関係性の病理として思考するためのレッスン」である。もちろん、たまたま大学にいたので演習などの場面を強調しているが、メディアも含めて社会のなかでも必要な作業だと考えている。

2. 関係性の病理として思考するためのレ

ッスン

1) 社会のもつ支配的な物語(ドミナントストーリー)の相対化 - ひきこもりのその後からはじまることへの想像力 -

たとえば、7年間にわたってひきこもっていた兄を映画学校に通う弟が撮影し、卒業制作とした映画『home』を観て、ひきこもりについて考えることとした。その兄弟を大学に招いて対話をしたことがある。この映画のラストで兄は家を出たのだが、出たあとの空っぽのガレージが映されている。そのことをどう感じたのかと兄は参加者に問いかけた。長い間のひきこもりから脱出して安堵したと多くの人が感想を漏らした。しかし、兄は、「この映画をみてよかったと思う人はひきこもりの現実を理解していない。いままでそこで苦しく生きた場所が空っぽになるということの、家を出たあとにはじまるその人の苦闘にこそ想像力を働かせるべきだ」と一喝したのだ。「私が家をでたから安堵したと思うその意識をこそ相対化して欲しい」、「ひきこもりから抜け出すことだけの過程に関心を寄せることは世間のみんなにとって安心できる物語でしかない意識」だと心情を吐露した。参加者にとってこの問題提起の衝撃は大きかった。さしあたりひきこもらずに生活してきた人の持つ「常識」=物語化、つまり支配的な物語(ドミナントストーリー)に鋭い刃がむけられたともいえる。

2) パワーをもつ言説への傾斜に気づくこと - 医療化言説は関係性を一面化する

人工内耳の埋め込み手術をめぐる家族の

葛藤と逡巡を描いたドキュメントをみる。この映像は、聞こえるようになるための医療に希望を託す家族の思い、言語機能の臨界期までに手術しなければならないことをめぐる逡巡、その手術で聞こえる音の具合(医療技術の現段階に関して、ドキュメンタリー映像では実際にどのように聞こえているのかについての音のシミュレーションがなされていて、ノイズのある音であることがわかる)などをめぐって悩みが深まる日々を追っていた。さらに手話の問題も紹介する。その環境に手話を理解する人たちがいる状態であれば家族や当事者たちの葛藤の内容は変化する。実際に手話を使って暮らす地域の人たちの取り組みが紹介されている。もちろん日本語手話とろう者の手話の違いも学習する。

これらの関連する諸事項を考慮にいれて、人工内耳による医療化というベクトルのもつ課題の多さを理解し、考える。聞こえるようになればいいのではないかという見地は健聴者の視点から医療化された仮定なのでそれを溶いていく。

そのために、いったん、ろう者として生きる環境の整備の方向性を対置して検討を加え、周囲の環境によって障害性が変化することを考える「社会モデル的な思考」を検討してみる。性急な判断ではなくこうした思考をとおして、医療化という志向性はどんな問題を内包させているのか、さらに別の問題を引き起こす可能性はないかなどについて考えてみる。

こうして、医療化という志向性は健常者中心社会の意識によって支えられていること、ある方向性へと問題解決を導く動力として作用すること、しかし医療化には功罪があることが視野に入ってくる。問題解決

の幹としての医療化は日常生活において極めてパワーのある志向性であることがわかっていく。もちろん、人工内耳以外にも、医療化による自己決定の問題群は、不妊治療、出生前診断、臓器移植など数多い。

3) リスク論的なものの見方の前景化 - 保険統計的な思考とリスク社会 -

エイズ感染拡大予防のために「カレシの元カノの元カレを、知っていますか」というコピーを公共広告機構が作成し、大規模な宣伝をおこなったことがある(2006年)。この言い方は一人ひとりの行動と意識に関して不安を喚起し、それを駆動力にする構図である。かき立てるようにして、安易な性行動の自粛とエイズ検査受診を促進させようとする脅迫的なメッセージとなっている。学生たちにこのアプローチは有効なのかと問いかけた。そのことを確認するためには若者の性行動についての理解が要る。「若者の性行動と性感染症予防対策」(木原雅子・木原正博著、『日医雑誌』第125号第9号、2001年11月)などで調べることを指示した。この研究は「首都圏の10代カップルのセクシャルネットワークパターン」の調査の報告である。男女ともに複数の相手と性行為をしているキーパーソンにつながると感染のリスクが増すことはわかる。互いに複数の性的関係をもつ者同士が結びつくカップルの組み合わせが12.3%であるという。また、このコピーは男性が奔放な性行為をしていることが前提になっている。そうした複数の相手と性関係もつ男性とそうではない女性という組み合わせは10%であるという。逆に、女性もまた複数の男性を相手にしていることが数字で示されて

いる(女性を起点に考えると多様なパターンで合計14.3%)。こうしたパターンの組み合わせがあり、それに対しての呼びかけが重要となることがわかる。

そしてそもそも現在つき合っている相手と過去の恋愛遍歴について話をしないだろう。つまり、解決不可能な不安が喚起されるだけだ。不安を駆動力にして何かをさせようと指示し、煽る言説はリスク社会の反映である。それを保険的思考といい、そうした生き方を脅迫する社会の証左だといえる。「他人をみたらリスクだと思え」といえば極端かもしれないが、関係阻害的なコミュニケーションにいたることは必至であろう。現に、「他人を見たら原告と思え」とリスクマネジメントセミナーで語る弁護士がいた。法化社会はそうのように進展しており、ハラスメント、クレームなどをはじめとしたリスク対応が必至となるような「安全安心社会」が進行している。すでに訴訟社会の米国はそうになっており、日本では起こりにくい裁判が提起される。

同じ呼びかけるなら、セーフターセックスについてのコンドーム使用などポジティブな方がいい。この素材を用いながら、リスク、予防や防止、保険的行動と意識、結果責任や社会的費用としてのコストなどが前景化している社会を理解する。こうした脅迫的指示を受け入れてしまう心性が構築されていることがわかってくる。一見すると素直に受け入れてしまいそうな健康と病気をめぐるレトリックにつきまとう陰画像を見逃さないために、「健康化(健康社会化)」というベクトルが構築する副産物について他の事例で調べてみることをすすめる。あわせて「肥満と飢餓」が同時存在するグローバルイゼーションにも言及し、健康を

めぐる言説と政策の陥穽への気づきを促す。

4) 異なる視点からみてみること - ダブルスタンダードにまみれた記号に敏感になる -

大学の近くの狭い路地に「暗い夜道、痴漢に気をつけましょう」という立て看板がある。デジカメで撮影し、学生にみせる。これをそのまま受け取れるかと問う。大阪市営地下鉄の「ちかん、あかん！」というポスターも紹介した。この両者には決定的な違いがあることに気づいて欲しいと話しを続ける。前者は被害者に呼びかけており、後者は加害者に呼びかけている。前者は被害者非難につながる言説であり、性犯罪、虐待、DVなどの暴力被害者自身の落ち度を責めることになる。これは「二次加害問題」になることを説明する。他にもこうしたダブルスタンダードを身近に探してみようと宿題をだす。たとえば、厚生省時代の1999年、「育児をしない男を、父とは呼ばない」という宣伝がなされたが、これはどういう効果をもつのかなど。私はこれも同じく脅迫による指示なので、男性の育児参加を促進させる目的にとってはよくないと考えている。

何気なく見るたて看板やコピーではあるが、そこには、ジェンダーのバイアスなどが埋め込まれている。脅迫型コミュニケーションの解釈をとおして何かの価値や規範が再生産されていく様子が理解できる。

5) 二分法的思考による選択肢の喪失 - 本当に必要なことを考える -

また別の日には、薬物依存症者が回復す

るための生活共同体である「ダルク」のことを紹介した。医療と刑罰の「あいだ」を考えることがねらいである。薬物を保持し、使用すると、各種の取り締まり法令で処罰されるが、彼ら/彼女らの実際は依存症者である。適切な医療が要るが、依存症は慢性的な病なので生活のなかで治療するリハビリ的な場所が要る。その「あいだ」に長期にわたる回復のための中間施設があり、それを「治療共同体」という。それへの参加を促す司法を「治療的司法」という。それは処罰だけではない、あるいは処罰の一環として参加を指示する制度である。前回に記したような加害者臨床への理解を深めていく(この『対人援助学マガジン』はこうして授業に活かされている)。処罰だけでも、また医療だけでもない、二分法的思考の「あいだ」に真のニーズが潜んでいる。

6) 相互作用の視点を身につける - 親密な関係性だからおこる家庭内暴力 -

家庭内暴力への関心が高い。それが生成する関係性を把握するには「親密な関係性」という相互作用の場の特性理解が鍵となる。私的領域、公私関係、親密圏などの言葉でとらえるとよいのではないかと提案する。公共圏と対をなして用いられている。もちろん家族関係も含むがそれをこえて広がりのある関係性を示す言葉である。たとえば恋人同士の暴力はDVに近い特性を帯びるので、親密な関係性における暴力として広く把握する。親密な関係性には、愛情を交わすことや無償のケア行為が含まれ、その相互行為は他者との境界(バウンダリー)を越え、プライベートな領域と交わることで成り立つ。親密な関係性を特徴づけるケ

ア行為に内在して感情的相互作用が生成する。ケアする者とされる者の関係なので、そこには感情や情動の交歓を含んだ微視的環境が構築されている。愛着、安全・安心、信頼などの肯定的な特性がそこに由来する。しかし、であるからこそ、葛藤、紛争、揉め事が距離感の喪失においてあらわれる。暴力や虐待の温床になる関係性といえる。暴力と愛情は両義的に親密な関係性において結びつき、メビウスの輪のようにねじれてつながる。

こうした相互作用を特徴づけるいくつかの理論を紹介した。そのひとつは、たとえば「正義とケア」問題である。その論者であるキャロル・ギリガンの『もうひとつの声—男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』(川島書店)をとりあげた。ギリガンは従来の道徳の発達心理学の根源的な批判を試みている。「子供の心理的成熟は自立性の獲得、個人主義的な権利主張の能力、抽象的基準に基づく正義の判断の能力などの指標に照らして判断されてきた。しかし、そのような指標とは別に、人間関係への文脈的理解、他者への配慮(ケア)などの資質もまた重要な成熟の指標たりうる。後者が従来見落とされてきたのは、それが女性と結びつけられていたからであり、ここには男性中心の発想のバイアスがある。」という。これまでの道徳の発達心理学は女性というもうひとつの声やケア役割を無視して正義の話ばかりをしてきたと批判しているのだ。「正義とケア」という視点からすると、親密な関係性において正義はいかにして成り立つのか、ケア行為に内在して脱暴力はいかにありうるのかという課題が認識できる。家庭内暴力の背後にある相互作用の特性を把握する枠組みとしての親密

な関係性論とそれを正義とケアの視点から把握することをおして、家庭内暴力についてのセンセーショナルなメディア的な関心を乗り越える。

7) 関係の非対称性という視点でみる - 親とは誰かについて根本から考えてみる -

激しい家庭内暴力のようなことだけではなく、心理的な緊張感や窮屈感、意志疎通の困難さ、依存と自立の葛藤など総体として家族関係に注目が集まる。そうした関心を問い詰めていくと、親とはどんな存在なのかという根本的な問いにたどり着く。

親は子どもの存在がないと成り立たない。しかし、子どもは親がなくてもありえる(なんらかの理由で親がいない場合はありうるし、社会的養護の仕組みがあれば生きていける)。親子関係とひとくちにいうが、そのなかには、影響力を行使するという意味での権力関係があり、親の絶対性がある。これを関係の非対称性という(親子、夫婦、師弟、国際社会の北と南などたくさんある)。しかし逆に、親は子どもがいないと成り立たないという意味で、存在としては子どもに依存しているともいえる。親の持つ力は強いけれどもその根拠は脆弱だということになる。そこから事態は複雑になり、それを覆い隠すかのようにあるパワーが創出される。たとえば親権である。それを根拠に「あなたのためを思っているんな指示をし、規制を加え、干渉する」というパターンリズムが生成する。親の特権である。しかもそれがあなたの安全のため、幸福のため、将来のためというのだ。パターンリズムという概念を理解し、親子関係を社会的に理

解し、親とはいかなる存在なのかについて家族体験をもとに考えていく。家庭内暴力の多くは親子関係の病理としてあらわれる。多様な事件や事例が愛着の歪みを含む関係性の病理としてあることを理解するためにも心理的な言葉とともに社会的な言葉も加味させて整理しておくことをすすめる。家族は誰もが体験していることなので分かったような気になる。それを的確な言葉で理解していくことは、私的体験を公的問題へと抽象化する格好の素材となるので思考のレッスンになると伝えている。

8) 認識の「地と図」の関係を理解する - 説明する側と説明される側の問いを反転させてみる -

今の学生たちは不登校やいじめが日常的な現実となっていた世代である。もちろん、何らかの事情で学校に通えない子どもは以前からもいた。しかしそれはたとえば「長欠不就学」と呼称されていた。また、「登校拒否」という言葉も登場した。今は不登校だ。ラベルが変化した。見方が変わったので、逆に問かけるといい。不登校とは何かという問いを考える際に、「どうして自分は学校にいったのか」と自問自答してみる。また、「どうして大学のこの演習クラスにいじめはないのか」とも（これは臨床問題が生成する環境や生態を把握しようとするアプローチである。とくに逸脱行動の発生を環境要因に探るための「日常活動理論」として注目されているものである）。不登校やいじめを理解する際に、どうしてそうならない現実が他方であるのかについて吟味してみるということである。自分はどうして学校にいったのか、大学の演習

クラスにはどうしていじめはないのか、というこれらの問いは、常に臨床問題が「説明される側」として対象化され、観察し、理解し、解釈する側、つまり「説明する側」とのあいだの溝をもって問かけられてきたことを相対化したいからである。

この問いの構図は関係性において思考することの阻害要因になっている。医学のように因果関係を特定できない社会病理はその〈場〉の成り立ち具合に関連する変数において考える。相互作用というコミュニケーションを独立変数にするということでもある。そこには、関係の非対称性というパワーとコントロールの関係があるだろうし、愛着関係やその歪みがあるだろう。仲間関係が昂じていく思春期青春期に特有のピア関係とその負の側面としての「友だち地獄」現象もある。

さらに、個人として尊重され、個性発揚を扇動され、何かにむけた業績達成(学業、スポーツなど)が価値をもつ空間となっているので、子どもたちはかつての時代とは異なる程に脆弱さ(ヴァルネラビリティ vulnerability=虐待誘発的とも訳される、傷つき易さのことを意味する言葉)のなかを生きていることも見逃せない。

こうした特性をもつ時空間としての学校にいくことができた自己の理解をすすめることは、何かが肯定されていたり、関係性が一定水準で保てていたり、業績的な達成が見られたりなどという面があったからであるし、逆に、何かを抑止したり、規範として意識したり、苦勞を乗り越えたりしてきたからでもある。その一方で学校に来にくい心理社会的な事態になる同級生がいたということになる。その時空間のもつ意味の磁場が異なるものであったということに

センシティブであるべきだろう。

いじめの発生はさらに先鋭的に自己の存在の形式を問うだろう。いじめのある時空間にいた自己は、傍観、無視、代弁、加担、逃避などの何かの関係性の一端を占めることになる。

しかしその問いは厳しくもあるので、大学の演習にいじめはどうしてないのかと問うことでそうではない環境＝空間のあり方を確認し、そうした緩い環境＝空間にするにはどうすればいいのかという問いへと変換し、自己の立ち位置が必ずしも先鋭化しない問いを迂回路のようにしてみることも発想を切り替えていくことになる。どうしてこの生徒はいじめられたのか、どうして学校にいけないのかという問いは被害者非難に陥ることもある。単純な学校非難でもない、また、登校することに目標をおく学校心理的支援だけでもない方向性を理解するためにも「私」との「あいだ」を架橋する問いは重要ではないかと示唆し、臨床問題が生成する空間や環境の特性を理解し、そこに作用している相互作用とコミュニケーションの特徴を把握し、個人化しない方策を導出してはどうかと発問する。環境の多様性の幅を広げることの必要性を理解するための問いである。

ここからいえることは、認識が成り立つ「地と図」の関係を反転させることでみえてくることは多いということだ。常に脆弱さのなかにある人々は説明されるべき存在として非対称的な関係のなかで置かれている。マイノリティ（少数派）は常に説明を要請されるという点において不公平である。どうして同性が好きなのかと同性愛者は質問されてきたが、どうしてあなたは異性が好きなのかと異性愛者が質問されることは

あまりないだろう。それと同じである。

9) 自己へと再帰する個性発揚社会の負荷 - 当事者研究風に「シューカツ(就職活動)」をながめてみる -

個人化し、心理化する社会における問題を端的に表現するテーマのひとつが働くこと、とりわけ就職活動である。「シューカツ」といわれている。ニートやフリーター、不安定就労問題、若年者の就職ミスマッチ(三年以内にやめる新卒者が多い)などということによって世間が関心をもつからだが、やはり学生たちは「私」の問題として直面している。

就職活動は景気の波に翻弄されていつの時代にも悩ましいことである。しかし、昨今の「シューカツ」は事情が変化しつつある。職を得る過程において、じつに「あいまいな規準」にむかっていくことがもたらすストレスが高いのである。技術系は別にしても、社会が複雑になっているので文系にはそれ相応の高度な力が求められている。それは人間的な対人関係とコミュニケーションに関する諸力能だとされる。しかし、それはなかなか明示しにくい。とりあえず、「コミュニケーション力」、「対人関係力」、「社会人基礎力」などと一般化されている。だから、企業研究にくわえて、適性理解と自己分析を入念に行うことを奨励される。こうした自己分析は大事だとされるが、その内実は内側をみてもでてこない。相互作用と関係性のなかでしか先述の諸力は磨かれない。「シューカツ」が内面のみを対象として心理化されているので、就職活動の過程が自己をめぐるって旋回し、負荷になる。

「シューカツ」のバイブルといわれてい

る『絶対内定』(杉村太郎氏らによる一連のシリーズ本。ダイヤモンド社)を読んだ学生が「なんだか迷宮に入っていくような感覚をもった」という。けだし名言であろう。「コミュニケーション力」、「対人関係力」という定義できないものにむかって終わりのない旅を求められているようだとしてゼミで発表をおこなった。得体の知れないことに向かって努力するという「カフカの状況」に置かれる。これは立派な当事者研究である。

もちろん、社会病理学的には非正規雇用、格差社会、派遣労働問題、偽装請負、意欲の搾取、若年失業等というハードな領域にかかわる課題もあるのだが、こうした社会的な主題と重なる方向性への問いではなく、もっぱら「自分探しに向かうこと」は精神を追い詰めていく。当事者研究風にいるんな分析のための概念と理論を身につけていく機会だと思う。「個人的なことは政治的なことだ」という女性運動のテーマは応用範囲が広い。そこまでいかなくても「個人的なことは社会的なことだ」くらいはいえるだろう。自己責任と自立を称揚された「ゼ口年代」は、自己へと再帰する個性発揚社会を青年期として生きてきたことになる。その生きづらさが臨床問題につながる。

10) つながりのかたちの抽出 - 絆とつながり方(関係性)こそが独立変数 -

社会臨床の肝は「関係性の病理」にあると伝えている。絆の病理とは「つながり」の問題である。たとえば「トラウマティック・ボンディング traumatic bonding」という言葉がある。愛着関係のあるなかで受けた心の傷をもつ者の両価的な絆形成のこ

とである。たとえば DV 関係にありながらも今度こそは立ち直るということを期待してその関係を続けるという事例もある。子ども虐待に関しては、殴る親でも親なので愛着を感じる姿勢を示すことがある。歪んだ愛着が母子関係に沈着し、ひとつの「共生体」として観念されるとその絆の病理は「代理ミュンヒハウゼン症候群」のような事態にも至る。

また、「共依存 co-dependency」という言葉も絆の病理の一例ともいえる。アルコール依存症の夫とそれの世話をしつつ支えている妻という関係だ。もっと俗には「だめんずとだめんずウォーカー」も同じようなことを意味する。

さらに、スウェーデンの銀行に強盗に入って籠城した犯人とそこに人質となって監禁されていた女子行員が後に結婚したという事例があった。これを「ストックホルム症候群」という。理論的には「攻撃者との同一化」という。カルト集団にはまってしまうことも「絆のもつ病理」の応用問題である。「いじめが発生する集団の問題(関係性の問題)」も同じである。同調性の高い仲間集団や空気を読むという表現で閉じた関係性となると「友だち地獄」の様相も呈することになる(たとえば、[土井隆義](#)『友だち地獄 - 「空気を読む」世代のサバイバル』ちくま新書、[森真一](#)『ほんとはこわい「やさしさ社会」』ちくまプリマー新書などで指摘されているような同調志向型関係のこと)。

逃げられない事態に心理的に追い込まれていくことになる監禁事件、DV・虐待のある関係で「どうして逃げなかったのか」という質問は被害者を責めてしまう場合がある。「学習性無力感 learned helplessness」

という言葉がこれを説明してくれる。

3. 羅生門的現実という複眼的思考と社会臨床の視界

こうして具体的な事例を取り上げながら社会臨床の視界を広げていく。「木を見て森を見る」という思考が身につくことをめざしている。しかし、事例やケースの見方は難しい。事件の「原因」探しに陥ることがある。直線的な因果関係があるわけではなく、そこで作用している相互作用を可能なかぎり見る。たとえば、家族関係、母子関係、愛着関係、コミュニケーション行為、メディアの影響などだ。これらをまとめて「相互作用の視点」、「関係性の病理」としてまとめていく手法を身につける。逸脱行動、問題行動の研究では医療化、心理化した説明と語彙が多い。その典型は、原因あるいは遠因となるかもしれない「人格障害(パーソナリティ障害)」の指摘である。関係性や相互作用を取り出すと、そこには変数が多いので、「偏りのある性格や人格」として、あるいは「コミュニケーション不全」として見るとその複雑な変数の縮減ができ、因果関係もわかりやすくなるということだろう。とはいえ、それでは関係性の病理としての特性が見えてこない。医療化、心理化、福祉化、司法化(厳罰化)などとして作用する関係性の「圧縮の仕方」を解凍するように、相互作用を丁寧にみることをすすめ、わかったようなつもりになることや断定的な物言いをする研究や発言には注意をするようにもいっている。

人格障害という言葉がこうした「圧縮の仕方」をひきおこしているとする、周囲の人々のつきあい方への示唆も含めて、境

界域の垣根を高くしないような社会全体の生き方 a way of life の課題としてもそうした「圧縮」ではないような関係性を創出したいところである。

その第一歩としてすすめる「脱学習」「脱感作」である。その延長線上に「深い洞察」が成り立つ。関係性がねじれて・つながることで発現する社会病理現象を読み解くレッスンである。関係性と相互作用による微視的環境の解釈ともいえる。

学生たちとの思考のレッスンのおしまいは、黒澤明監督の映画『羅生門』(1950年)である。原作である芥川龍之介の短編作品「藪の中」を読み、映画の一部を見る。平安時代末期の混乱する京都が舞台である。悪名高き盗賊、多襄丸(三船敏郎)が山科の山中で引きおこした不思議な殺人事件の真相について複数の関係者がまったく異なる話をはじめ。それぞれリアルな物語がでてくる。同じひとつの現実でも複数の解釈が成り立つ。社会的な視点から臨床で生起している事項を考える際にはこの複眼的思考は至極当然のことだと思う。当事者の視点、複数の異なる援助職者の視点、周囲の人々の視点などが錯綜していく。

対人援助の実践と理論は個別性を大事にする。その悩める個人や家族を尊重する。同じ不登校、家庭内暴力、ひきこもり、依存症でも、その様相は全部異なる。家族関係という相互作用を対象にすれば、さらに複雑な事態となる。

しかし、何らかの問題現象、行動、心理の状態を特徴づける名前は多様ではない。名付けのその瞬間、リアルで豊かな個別性は消えていく。もちろんそうした行動はひとそれぞれに多様であるというだけでは、その悩み、不具合あるいは症状が一定の広

がりをもって存在しているという意味での社会性水準が消えていくことにも配慮がいる。個別性と社会性の折り合いをつける柔軟なまなざしを養うためにも社会臨床といういい方をしている。そのために、ここで記してきたような思考のレッスンをして「脱学習」をしておくことが大事だと思っている。述べてきたこと以外にも素材は無限にあるし、私も不断の「脱学習」をしなければならぬと思っている。ちなみにこうした「羅生門的現実」からみて面白いのは伊坂幸太郎の作品である。また、宮部みゆきの『理由』や大林宣彦監督の同映画化作品も紹介する。

しかしそんなに難しいことではなく、すでに私たちは日々、羅生門的現実を生活している。日常はすべてそうしたことの繰り返しであるし、葛藤、紛争、暴力はそこを起源とする。家庭内や親密な関係性にはつきものの揉め事である。ひとつの現実をみているが、他者はすでに私のものの見方と同じではない。さらに、私のなかにも複数の見方がある。広角レンズと顕微鏡レンズの視野、鳥の目と虫の目、俯瞰する知性と個別をみる知性、地と図の関係や木と森の図柄で物事の成り立ち具合をとおして理解すると立体的な思考となるし、みえにくいところがみえてくるようになる。

つながりのなかで自分を位置づけ、社会と世界をみて欲しいと思い、しばらく前、娘が通った中学校で保護者を代表して卒業生に一言のスピーチをしたことがある。

20世紀から21世紀へと、大きく時代が転換する時期に生をうけ、小中学生として生きてきたみんなです。1991年、生まれた時、戦争がありました。「湾岸戦争」といいます。1995

年、小学校に入学する前、阪神淡路大地震がありました。その同じ年、オウム真理教事件もありました。2001年、小学4年の頃、アメリカで大規模なテロ事件がおきました。2004年、中学入学の時、イラクではまだ戦争が続いていました。この間に、神戸児童殺傷事件（いわゆる少年Aの事件）など子どもをめぐる事件もいくつかありました。一言で言えば、「不安の時代」でした。その間に、一生懸命に見守り続けてきた母や父や先生たちでした。必死でみんなを大きくしてきたのです。だから、考え続けて欲しいのは「いのち」のことです。そのために、まずは、自分のことを大事にしてください。それが自分の「いのち」を大切にすることにつながります。そのためには「ほめること」です。今日一日の生活の中で、自分をほめてあげたいなあ、今日の自分のよかったことはこれだなあと思うことを考えてください。1年たつと365個の自分のいいところができます。毎日それをノートに書いたり、自分あての携帯メールに入れておいたりしてみてください。「宝物ノート」が出来るでしょう。苦しくなった時に読み返すと励みになります。そして、自分のいいところがみえると他人のいいところが見えてきます。ここから「自己肯定感」と「他者の尊重」が繋がっていきます。自分を大切にできる人は「他人」を大切にします。大切な人には「ありがとう」といえるはずですが、あまりにも身近すぎて、いつもそこにいるので忘れがちですが、まずは、家族、友人、育ててくれた人です。いま、心のなかでそっと「ありがとう」と母や父や育ててくれた人についてみてください。そして、今度は声にだして、「ありがとう」です。この一言でいままでの苦労が報われたと思うのが親や保護者です。生きてて良かったなと思うのです。そして今日の

別れ際に、友だちにも「ありがとう」です。最後の教室では先生に「ありがとう」です。「不安の時代」だからこそ、こうしたことを大事にしたいと思います。そして自分に対して「ありがとう」です。ここまで自分であってくれた自分の身体とところに「ありがとう」です。

圧倒されるかもしれない社会の非対称性のなかを生きていくことになる若者たちである。そのことについて諦めでもなく、リスク論的な人間関係でもなく、他者の肯定と自己の肯定が双方可能なような志向性を得て欲しいと思いながらのメッセージであった。ここに書き連ねた社会臨床のための思考のレッスンはその延長戦上にある「脱学習・脱感作」のためのものである。

この試みは常に自己に再帰してくる。臨床問題に関心をもつ学徒であるならば、自己理解や自己覚知の一環として、「自己」を関係性において理解する試みをしているはずである。とくに思春期青春期は変調するので、自己の履歴においてそれを客観視しておくことは有益であろう。長い人生のなかで変調する時期は何度か訪れるので未来にむかっても必要な作業となる。こころとからだの「あいだ」は、ねじれて・つながることの連続である。それは身体化や行動化、時には症状化となる。そこに社会性を読み込んでいく思考のレッスンである。だから、自己にフィードバックしてくる。同時に、背景となる社会病理を問うので、それは社会自身の再帰性と重なりあう。単に自己の反省的省察に向かうだけでは一面的である。

その「あいだ」のつながりの端緒はすでに自己の履歴の中にある。このことの自覚

がまずは大事だ。こうして、自分のなかの他者性、逸脱を抑圧してきた規範性、その逆の子ども性、弱い自分と強い自分、見ている自分と見られている自分という具合の「内なる羅生門的現実」を直視することをおしてこのレッスンの幅は広がる。

ゼロ年代の若者たちはヴァルネラブル(傷つきやすさ)な感性をもっているので、「脱学習・脱感作」の作業はすすめやすい。最近ある学生が『17才のカルテ』(1999年、アメリカ、原作の邦訳は『思春期病棟の少女たち』草思社)と『精神』(2008年、日本、想田和弘監督、岡山市のある精神科診療所の日常誌)という映画をみんなにすすめていた。

若い学生たちとの知的格闘は、すでに凝り固まった思考や感動のかたちを「脱学習・脱感作」するのではなく、いまだかたちをなしていない状態にある未定型な意識、態度、感性を対象にしているので、徐々にレッスンは効果をみせ、その視界は広がっていく。思考を柔らかくすると未知の事柄を吸収する力が伸びていくことは希望のひとつであるのだろう。心理化する社会は「個人をセンシティブにする社会」でもあるので、その点を活かすことも可能であるような両義性をもつ。「脱学習・脱感作」の努力のやり甲斐があるともいえる。そう考えると、こうした作業から得る私の学びが多いことに気づく。

なかむら ただし
(臨床社会学、社会病理学、社会臨床学)

ケアマネの出会った 家族たち

3

～ 家族理解と 家族支援 ～

木村晃子

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

～ 独居老人と娘の物語 ～

三年間の歩み

「あの人は、本当に変わらない頑固な人ね。きっとあの性格は死ななきゃ治らないわね。」「いや、あの人のあの性格は死んでも治らないかもね。」などという会話をしたことはありませんか。私たちの日常の会話で、誰かとこんなやり取りをした経験を、一度や二度お持ちではないでしょうか。

本当に、人には変わらない、治らない性格や生き方というのはあるのでしょうか。私たちは、生きている間、個人の事情だけではなく、様々な社会情勢や、社会の仕組み、価値観などに影響されて生きています。「時代が変わった。」と、嘆きながらも世の中の変化に対応しようと、生きるスタイルや考え方に変化を受け入れ生活している人もいれば、「そんなわけのわからないことは、自分には関係ない。」と世の中の変化に背を

向け、自分の歩んできた歴史や価値観を必死に守って生きている人もいます。

変化を受け入れる、受け入れない、一見相対していますが、自分を取り巻く状況に、身の置き方を考え決定しているのだから、その人のこれまでの生き方にはない変化が、他人には見えない所で起こっているのではないのでしょうか。

私は日々の生活の中で、あるいは対人援助の場面を通して多くの人に出会い、人は日々変化を続けているのではないかと感じます。「あの人は変わらない」のではなく、変わったことに、周囲の人が気づいていないのだと思うのです。または、周囲の人は他者に対して大きな変化を求め過ぎているのではないかと思うのです。

人はそんなに簡単には変化しないかもしれませんが、生きているということは周りの様々な状況に対応している必要があり、必然的に変化を迫られている、だか

ら人は変わるのだということ、小さな変化を見逃さないこと、その小さな変化の意味をしっかりと捉えることが、対人援助の場面では大切な、と感じます。

人は変わる

援助開始一年目・親子の葛藤

(*以下に登場するのは、当マガジン2号の連載に登場する一子さんと同一人物です。ご覧になっていない方は、ぜひ2号もお読みください。)

一子さんは、30年前にご主人を亡くして以来一人暮らしです。一人娘が隣町にいますが、長年娘を頼ることなく生活しています。そんな一子さんが、最近、立て続けに体調を崩しました。近隣住民は、一子さんの暮らしを心配しています。介護保険サービスを利用すれば、もう少し安心な生活になるのでは、という周囲の心配の気持ちから、相談はケアマネへ繋がりました。支援開始にあたり、契約や今後のことも含め、娘の意向も確認したく初回訪問の前に、娘へ連絡をしました。娘は電話口で、「体調が悪く母親のところには行けない。契約やサービスのことはお任せします。」と言葉があります。体調が悪いという言葉に、無理強いしてもという思いもあって、初回訪問には娘の同席を強くは求めませんでした。ケアマネが一子さんを訪問しましたが、本人は独居生活への不便も不安も感じていません。室内の散らかりや、ため込んだゴミの不衛生な状況から、なんとか説得して介護保険サービスの利用を始めることになりました。

訪問後、本人と話し合った内容や、今後利用する予定のサービスなどの報告も兼ねて娘へ電話し内容を伝えました。「わかりました。宜しくお願いします。ご迷惑をおか

けします。本当は施設にでも入ってもらいたいのですが・・・」と言葉がありました。この時ケアマネは、一子さん自身の希望や、誰かの見守りがあれば在宅生活の継続も可能な時期だと判断していたこともあり、娘の言葉の奥にある気持ちを察することが不足していました。

それから一年ほど、一子さんは介護サービスの利用や、近隣住民の手助けにより生活が続きました。けれども、一子さんの認知機能低下がもたらす、物忘れや近所の人に対する被害妄想などが周囲との不協和音となっていました。そして、母親の元を訪れることのない娘に対しても周囲の人は不満を覚えます。ケアマネは、娘へ連絡し最近の生活状況について伝え、可能であればと一子さんへの協力を要請しました。娘は、電話口で以前と同じように、自身の体調不良を訴えます。

支援開始二年目の壁

ここで、一子さんと娘への支援が難航します。一子さんの周囲では心配や不満の声が聞こえますが、状況を打開する変化がありません。ケアマネは、支援の困難さからスーパービジョンを受けました。その中で、援助者としてのケアマネがしていなかった事に気づきました。それは、援助を展開する上で非常に重要なことでした。

一子さんの娘にとって、ケアマネは何をする人なのでしょう。ケアマネの事を「母の生活を支援する人」という認識はあったかもしれません。でも自分(娘)にとって、ケアマネは何をしてくれる人と理解していたでしょうか。ケアマネの役割をしっかりと娘に伝えていなかったのです。援助者として大失敗です。ケアマネが何をしてくれる人かも分からずに自身の抱える悩みや心を開けるわけがありません。言葉で相手が

理解できるように伝えることは重要です。

「私には、娘さんの思いや悩みも一緒に考えていく役割があります。」ケアマネが改めてこの言葉を伝えた時に、娘の対応に変化が見られました。その後娘宅に訪問した時、「離れて暮らす母の事は心配していたけれど、長年の母との関係性に葛藤があり、どうすることもできず悩んでいた。」という思いを聞きました。そして、直接的な関わりは無理でも陰ながらできることはします、と言葉があったのです。それから、一子さんの妹への連絡をとってくれることになりました。妹は、電話で頻繁に一子さんの様子を気に掛けるようになりました。娘、妹、ケアマネの三者間の連携が取れるようになったのです。一子さんを取り巻くシステムに変化が起こりました。家族システム論では、家族のどこに変化が起こってもいいのです。どこか（誰か）に変化があると結果も変化します。

その後、娘や妹の存在も確認しながら、一子さんへ今後どのように一人暮らしをしていきたいかを確認しました。一子さんは、「年寄りだから皆に心配されるけれど、なるべく迷惑をかけないで暮らしたい。近所の優子さんは、良くしてくれるから何でも相談できるし、優子さんの言うことは聞いて行きたい。」と答えました。

そして、一子さんは近所の優子さんや介護サービスに支えられ、生活できています。一子さんの気が付かないところで、母を心配する娘の存在もあります。長年、一子さんと娘には親子の葛藤がありました。多少の一人暮らしに困難が出てきたからと言って、急に娘に難題を押し付ける事は娘の生活にも悪影響です。世代間の境界を意識して、親世代、子世代のそれぞれの生活が守られるような援助が必要だったのです。

支援開始三年目の変化、新たな親子関係さて、一子さんの生活も、近所の優子さんや隣町に住む妹の支援により継続できていました。しかし、一子さんのもの忘れや生活上の困難さは以前より悪化してきているようです。再び、周囲の人に対する被害妄想（物を盗まれた、ゴミを玄関に入れられる）が増してきます。そんな中、時折支援をしてくれていた妹の体調不良により、今後の支援が難しくなったという状況が発生。今後の本人への支援にはやはり娘の協力が必要となりました。

ケアマネは、娘と一子さんの今後の生活について話をしました。一子さんの今後の生活に対して、娘としては直接的な支援は難しいという主張は以前と変わりありません。では今後の一子さんの生活について、本人の権利が守られるようにしていくにはどうしたらよいか考えました。今後、一子さんの生活上の判断や決定が必要な場合のサポートとして、成年後見制度の利用について考えられました。重要な決定は後見人にサポートしてもらおう、ということです。そして娘は、できるだけ一子さんとは距離をおいていきたいという意向です。

成年後見制度の利用にあたっては、本人の了解を得る必要があります。そこで娘に、本人へ成年後見制度の手続きを進めることについて了解を得ることを課題としました。これまで、母親と直接的な関わりを絶っていた娘には、厄介な課題でもあります。一子さんが制度利用に同意するか、手続きに協力的になってくれるか、等々まだ始まっていない今後についての不安が次々に思い浮かんで母親との関わりに躊躇します。考えあぐねて、状況を固定させてしまうか、まずは最初の一步を踏み出して次につなげるかの選択です。娘は迷いながらも、やはり最初の一步を踏み出す決意をします。早

速、母親の元を訪ねる日を決めケアマネも一緒に同行することとしました。娘が一子さんの元へ来るのは2年ぶりです。

「これから、行くから家で待っていてね。」そんな電話連絡の後、娘とケアマネは一子さんの元へ訪ねました。玄関でインターフォンを鳴らすと、「洋子（娘の名前）かい。ちょっと待ってね。」と、足早に玄関に迎えに出る一子さんの姿がありました。それは、久しぶりの娘の訪問を喜んでいる母親の姿です。一子さんが、玄関のドアから顔を出しました。普段見たこともないような、ござっぱりしたワンピース姿でした。きっと、娘の訪問が楽しみだったのでしょう。横にいるケアマネの姿を目にし、「あれ、一緒に来たのかい。何か用事があるのかい。」と声のトーンは少し低くなりました。玄関先でのあいさつを終え、部屋の中に入りました。

娘は、一子さんの今後の生活について、妹の支援が難しくなった現時点では、娘の支援も困難であることを伝えました。今後、財産管理や様々なサービス利用などの契約に関しては、成年後見制度の利用によって、娘の手助けがなくても生活できるようにしてほしいと訴えます。また、今後の生活についても、いつまでも一人暮らしは難しいのだから、入所施設のような所に入って安心した生活を送ってはどうか、と提案します。

久しぶりの対面の後、娘の口から出た言葉に一子さんは伏し目がちです。しかし、長年一人暮らしを続けてきた一子さんらしい毅然とした様子で話し始めます。「そうだね。洋子に迷惑かけるわけにもいかないし、年寄り一人で生活していたら、みんなに迷惑かけるからね。私なら、施設に入って生活したほうが、返って気楽だし、安心だね。そうしなさい、って言うなら、そうするよ。」あっさりした返答です。そして、成年後見

制度についても、「洋子に迷惑かけないようにできるなら、なんでも（制度の）お世話になるよ。手続きのことはよくわからないから、やってくれるのなら、私は構わないよ。」潔い言葉です。

そこで、今後について、成年後見制度の利用手続き、施設入所手続きの進行について本人の同意を確認しました。

なるべく、早くに母親のもとから離れたい娘は用件を確認すると「じゃあまたね。」と話を切り上げました。一子さんは、少しさみしげな表情もありましたが、玄関で娘の姿を見送りました。

本人の意思の確認が取れたところで、娘は、ケアマネや地域包括支援センターの社会福祉士の助言により、成年後見制度の手続きや施設入所に必要な手続きを進めます。これらの手続きが完了すると、娘と一子さんの関わりは少なくなることも予想できたので、手続きの段階ではできるだけ、娘と一子さんがやり取りしながら準備が進められるように、ケアマネの関与は必要最小限に努めました。

制度利用の申請に必要な書類が揃い、いよいよ申し立て、という段階に入った時のことです。娘からケアマネに一本の電話が入りました。

「必要な書類はだいたい揃いました。でも、今回の事で母とのやり取りをしているうちに、これまで私のことを信用してくれていなかったのが、お金の管理も私にさせてくれるようになりました。施設入所の手続きも進められたことや、入所が決まるまでは、ショートステイ（短期間の施設入所利用）の利用に同意してくれたことなど考えると、成年後見制度の利用をしなくても良いかなと思えるようになりました。施設に入るまでは私が金銭管理を手伝えれば良いし、成年後見制度を利用しても、日常の支援は私が

しなければならぬことも出てくるでしょうから、制度利用の申し立てはせずに様子をみようと思います。」そんな言葉が娘の口から出ました。

成年後見制度の手続きに必要なやり取りが、今まで疎遠だった二人の関係に変化をもたらし、双方の気持ちにも今までとは違う思いが湧いてきたのでしょうか。それは、それで結果オーライです。成年後見制度の申請はしないまま、手続きは中断しました。そして、施設入所できるまでの期間は、娘が一子さんの金銭管理をすることになり、これまで行き来の無かった二人に電話や訪問のやり取りが始まりました。

そして、施設入所が決まるまでの間、繰り返しショートステイの利用を始めました。初めて利用したショートステイでしたが、施設の中には、昔ながらの知人の姿があり、三食が提供され、なんの不安もなく過ごせる快適さに「こんな良いところはない。」とショートステイを楽しんでいます。

今、一子さんは施設入所が決まるのを待っています。認知機能低下は徐々に進んできており、金銭管理ができなくなり、物忘れも進んでいます。話す内容も首尾一貫できず、何度も同じ話を繰り返し、時には、近所の人や娘に対して泥棒呼ばわりすることもあります。それでも、そんな母親を娘は、「仕方のないこと。」と自分に言い聞かせながら娘としてできることをしています。そのことが、一子さんの口からは「洋子がしてくれるから、何も心配はない。」という言葉で表現されています。最も娘に対する感謝の言葉の直後に娘に対する被害妄想発言も出たりするのですが・・・

一子さんと娘には長年の親子の確執がありました。疎遠になってしまった親子関係の急な修復は難しいとの判断をし、それぞ

れの道を選択できるようにと支援をしていく中で、これまでにない一時的な変化（成年後見制度の利用に関する手続きのためのやり取り）が二人の関係に新たな絆を生みました。

人は変わる、長い年月という時が人を変化させる、そしてこれまでにない状況が人を変化させるのだと思いました。

長い間母親との関係に悩んでいた娘が、自分自身を少し変化させることができ、今後の母親に対する関わり方に背負っていた重たい荷物をほんの少し下ろすことができたようです。

そして、母親のことに対して動き始めた娘の支えになっていたのが、娘の夫でした。母親のことを考えると憂鬱な気分になってしまい、家庭内にも暗い雰囲気が漂っていた娘の家庭でしたが、この件を通して（当初の夫婦の目的は、制度利用につなげ母親との関係に距離を置きたいというものだった）娘夫婦が力を合わせて諸手続の進行をしました。その夫婦の協力関係が夫婦の絆を強くしたようです。当初の目的とは違う形で親子の関係も再開しましたが、今では母親の困った発言も、夫婦で話題にしながら対処していくことができています。

人は変わる。そして、変わった人の目に映る新しい景色が、それぞれの人生の未来への希望の光となっていくのではないでしょう。

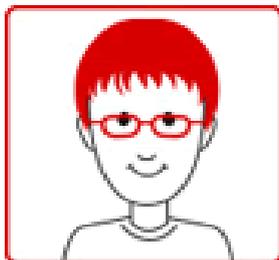
* プライバシー保護の観点から、事例は事実情報を加工しています。

街場の就活論

Vol. 3

—新卒採用に今、何が起きているのか—

団遊 (だん あそぶ)



私が採用活動を支援するある会社の人事担当者は、11月初旬、日本を旅立ちました。
米国・英国を中心に、年内は帰国せず新卒採用説明会行脚をします。
まっさらな新卒学生にこそ、グローバル採用の荒波が押し寄せています。

アルバイト同然

この夏インターンシップに行った学生が、悲しそうな顔で帰ってきました。聞けば「扱いがアルバイト同然だった」そうなのです。彼女は東京で1か月のインターンシップに参加しましたが、毎日のように人の出入りがあり、シフト制で仕事が組まれていたと言いました。

企業の姿勢にもよりますが、大半の場合インターンシップは無給です。遠方から参加の場合、宿泊費、移動費も個人持ちですから、結構な出費になります。彼女は朝から晩まで、他の多くのインターンシップ生らとともに、アルバイト的な学ばない業務を、特に誰から指導されることもなく続けたのだと訴えたそうです。

確かにひどい話です。けれどこれを「悲劇同情話」としか語れない彼女には、弱さがあります。

なぜなら、そんなことは生きていれば良くあることだからです。「思っていた内容と違う」ことにいちいち悲しんでいては、自らキャリアを切り開いていくことなど不可能です。

「皆さん聞いてください。私はこんなひどい目にあいました。世の中ってうっかりしているとエライ目に遭いますよ。私は就活前に、インターンシップでこんな経験ができて良かった。就活では絶対ひっかかりません！」

こう言える心持ちを育てるのが、今日的なキャリア教育に求められていることではないか。間接的にですが、彼女の話聞きながらそんなことを思いました。

「よく分かりません」

私は大学の授業でキャリアという、あってないようなモノを教えています。その中にインター

ンシップ体験が組み入れられているのは悪くないと思っています。それは「鼻を折られる」経験を早目しておくチャンスだからです。夏と冬、それぞれ学生がインターンシップから帰ってくると、まずは、「どうだった？ 甘くなかったや。行く前は『キミは最高だ！卒業したらうちにきてくれ』と内定をもらったらどうしようとか、『大学ですごい勉強しているね！』と褒められたら照れるなあ」とか、いらぬ心配をしていたんちゃう？」と声をかけます。

すると、学生はみな一様に「へへへ…」と静かな笑いで答えます。それがいいのです。だから逆にプログラムされ過ぎているインターンシップに行く場合は、また違ったメッセージを入れなければいけません。

私が代表をつとめるアソブロックにも、この夏、H政大学から二名のインターンシップ生がやって来ました。ひとりは一か月、もうひとは三か月、週に二回程度ですが、それでもよく食らいついたと思います。一応それぞれに担当社員をつけましたが、彼女らに出した指示は「聞かれたことには丁寧に答えるように」のみです。

最後の日、近くの美味しい魚を食べさせる店で打ち上げをしました。その席で「インターンシップはどうだった？」と聞くと「よく分かりません」と返事が返ってきました。それがいいんだと思います。

距離が伸びない大学生

今年もまた、10月1日にリクナビを始めとした大手就活メディアがOPENし、新卒採用活動が本格的にスタートしました。と同時に「就活内定講座」や「SPI対策講座」「面接必勝法」から「内定に近づく写真撮ります」まで、様々な広告が学生に向け大量に発信されています。人気講座はすぐに満席になると聞きますが、これらを有効に活用できる学生が、果たしてどれだけいるのでしょうか。

幼少期の教育分野で「距離が伸びる」という言

葉があります。これは自分でできること、行ける場所、理解できる範囲が広がることで、その子自身のフィールドが広がっていくことを意味します。いまどきの大学生は、社会人デビューを前に、この距離がとても短いと思います。昔は距離が長かった、などと言う気はありませんが、少なくとも今よりは距離があったのではないのでしょうか。

その距離を育んだもの、それが「思い通りにならない」ことではないかと思います。また、新卒社会人を受け入れる会社や社会にも、その子の距離が伸びるのを楽しみに待つ土壌が今よりはありました。

「だいたい思い通り」で来た学生が、冒頭に書いた講座に期待するのは、思い通りの結果です。「就活内定講座」に期待するのは、文字通り「理想の内定獲得のためのノウハウ」です。ところが、事はそう上手くいきません。多くの場合、理想（だと信じる）の内定獲得に失敗し、その原因探しの結果、ほこ先は「あの講座、意味がなかった」と辿り着きます。内省という名の犯人探しです。

何事も疑え、ではありませんが、例えば「絶対美味しいラーメン！」と掲げた看板を見て、看板に偽りありと声高に訴える人は少ないでしょう。たとえ不味かったとしても「僕には合わなかったな」や「看板にやられたな」と思うのが通常です。

ところが就活に関しては、学生は愚直なまでに「頑張れば思い通りの結果が手に入る」と思いがちです。もしくは「絶対思い通りにならないだろう」と行動する前に悲嘆にくれているかのどちらかです。この中間あたりの心持ちがちょうどいいのですが、距離が短いために、思考が伸びません。

もちろん、ビジネスを作るために、煽り立て、悲嘆させ、勇気づける社会の問題も多少はありますが、そんなものはどのフィールドでも同じです。

先の読めない10年後に思いを馳せることで、近場の1年～3年の選択肢が見えてきます。これがキャリアを考えるということであって、就活はキャリアを考えるスタートイベントのひとつに過ぎません。就活をやったかやらなかったかの結

果は残りますが、この時点では成功も失敗もないのです。

昨年話題になった「内定切り」も、確かに気の毒です。企業の姿勢としてはペナルティものでしょう。しかし、それが人生に及ぼす影響は微々たるものでしょう。大事なのは起きた事実をどう受け取り次の行動を取るかです。

あの事件が起こった直後、来るぞ!とっていたら案の定、2~3 か月も経たないうちに「内定で切られた私」という本が出版されました。この凶太さが生きる力です。

某就活サイト責任者と

11月某日、某就活サイト責任者の友人と意見交換をしました。その中で、彼が面白いことを言っていました。「就活は山を下りる活動なのに、それを指導する人がいない」というのがそれです。

彼の就活サイトにも、毎年何千という企業が掲載され、何万という学生が登録をします。その中で「知っていた企業」に入社するのは2~3割、裏を返せば、7~8割は「存在すら知らなかった」企業に入社します。ただ、その7~8割も、就活開始当初は、物産なり伊藤忠なりトヨタなり東京三菱UFJなりに入りたいと思って活動を始めます。しかしやがて、書類すら通過しない現実を知り、他の可能性を探り始めます。なかなか頭を切り替えられず、結局終盤になって「内定もらえるのならどこでもOK!」とシフトチェンジする学生も少なくありません。

彼は「だからこそ、ほとんどの学生には山の下り方を示してあげなければならないのに、すべては登り坂かのように、あるいは頂上から平野を見渡すかのごとく指し示している。それは決していいことではない」と言いました。

山も、うまく下りれば自分の居場所にスムーズに辿り着けます。ところが、この指導は一見「夢を諦めて現実を見る」的な要素を含むので厄介です。

学生を相手にビジネスをしている人たちは、学

生に嫌われることを恐れます。結果、彼の言うような指導が躊躇われてしまう背景もあるのでしょう。そして、その中に、大学の就職課も入っていると私は思います。

恋に破れた友人に「明美は悪くない。悪いのは大輔の方。明美はとても可愛いし、すぐに新しい恋に出会えるって!」と、取り繕うアドバイスをする友人。周囲は「明美にも問題がある」と思っているのに、そうと言わない、決して長続きしない友人たち。こういう図式はどの世界にもお決まりであります。せめて大学の就職課は、本気の友人にならないと、多額の献金をする学生も浮かばれないと思いますがどんなものでしょう。

その原因のひとつが、就職課の職員自身が学生を取り巻く環境の変化に気付いていないことだと思います。就職課の職員は対人援助職である。「昔からそうだった」と言われればその通りですが、その色合いは、確実に変化してきていると僕は思います。

届けるメッセージは不変でも、届け方は変化させないと、やがて届かなくなります。相変わらず学内説明会を開催し、就職サイトに登録をさせ「みんなの目の前にはたくさんの可能性がある。挑戦して来い!」と送り出す大学側。決して間違っているとは言いませんが、大学(学生)によっては、草野球の選手をプロのセレクションに送り込むようなものです。その結果は、果たして?

心理療法が始まるまで

—コミュニティと病院で—

(3)

藤 信子

私は時々、個人心理療法（カウンセリング）について考える場合、うさんくささとはまではいかないけれど、ちょっとためらいを感じないわけではない。目の前に悩んでいる CI がいる場合にそんなことを考える訳ではなく、あくまでも「個人心理療法」について考える時にである。それは、問題を個人の責任にしすぎているのではないか、という疑問を感じるときがあるからだ。ある意味で行き過ぎた「自己責任」論に眉をひそめる感じでもあるけれど、ずっと以前から感じていることではある。大分前の話だけれど、ニューヨークに留学していた臨床心理士の H さんが、勤務の前後に精神分析を受けに来る CI に対して、ここにくる時間に友人を作ったらよいのに、と思ったと言っていた。米国の競争の激しい社会では、友人ができにくくその分心理療法を受けることで、自分の問題を解決していこ

うとすることになるのだろうか、と半分よその文化のようにその時は聞いていた。

私はもちろん他の職業の人たちより、自分の悩みを心理学的に考えることは大事だと思っているし、心理学的に問題を考えることは好きである。そしてそうして考えたい人と一緒にその人の問題を考えることを大切な仕事だと思っている。心理療法ではないが、ずっと以前、夫から離婚したいと言われた妻が、理由が無いのにそんなことを言うなんて夫は病気に違いないと、病院の精神神経科へ夫を受診させた、ということを知った時には何が起きているのだろう、とふと思った。自分にとっては理解できない家族の行動や言動に出会った時に「病気ではないか」と直接病院を受診するという行為に驚く一方、家族やコミュニティで相談したり支えたりする機能が弱

っているのだろうと考えた。

AC (adult children)、PTSD(心的外傷性ストレス障害)やうつ等がメディアで取り上げられると精神神経科の診療所は「私は AC (あるいは PTSD あるいはうつ) なのですが」と受診する人が増える。自らにおきる不調を外在化(医療化)して、対処しようとすることは適切なことだと言えるだろう。しかしそこには家族や友人にあまり相談することなく、診療所等の専門機関を尋ねるということも多いように思える。周りの人に自分の悩みを相談することをしないのはなぜだろう、と考えている時に、支援者の二次的外傷の問題を連想した。災害や惨事の支援者に対する集団精神療法(以下グループ)のワークショップを時々行っているが、二次的外傷に特徴的なことの一つに、援助職であるために、自らの傷つきをことばにしにくくなっていることがある。消防士は「男らしい職業」のために弱音を吐きにくいし、看護師が患者から暴力を受けると、それはその看護師の専門家としての技能が足りないためだ、と言われることはよくあるようだ。「男らしい」という発想は随分ジェンダーにとらわれているような印象を受ける。こういうとらわれ方は自分を不自由にするだけではないだろうか、と考えてしまうけれどどうだろう。専門家であるから技能を高めることは当然のことだとしても、身体も心も傷ついていることを、突き放され

るような視点のように思える。こういう個人に対して極めて「強い人」であることを望む社会の風潮があると、当然「弱音」を吐くことは、自分を専門家として十分でないと認めることにつながる可能性がある。

二次的外傷の問題はまた別の機会に取り上げたいと思う。ここで思い出すのは、周りの人に悩みを打ち明けないということでは、1号にも書いた虐待(ということばは abuse の訳としては、適当ではないのではないかとと言われる、私もそう思うが一応ここではこうしておく)をしていたという親は、「この子を育てるのがしんどい、難しい、不安だ」とどうして身近な誰かに言わなかったのか、という思いに戻る。確かに近隣等の交流の希薄さもあると思うけれど、もしかしたら「弱音を吐けない」文化というものも関係しているのではないかと思う。「虐待」をしている親が「しつけ」だと言って叩いた、ということをよく聞く。これは全て嘘だとは言いきれないのではないだろうか。「良い母親でありたい」と思うあまりに、自分の子育てに対して人の意見を聞かずに、一生懸命になる人がいる。人の意見を聞くと自分のしていることに自信がもてなくなるのではないだろうか。しかし、そんなに初めから間違いのないような子育てができるのだろうか。人に教えてもらいながら、ちょっと失敗しながら育て方を学んでいくのだろう。

なぜこんなに初めから「強い人」や「よい親」でなければならないと思込んでしまうことが起きるのだろうかと考えてみたほうがいいかも知れない。ただ、「強い人」や「良い親」でなければならないと思込みすぎると、なかなか周りの人に相談できにくいかもしれない。強くないからと思い、直接に専門家のところに行って相談することを選ぶ人がいる一方、誰にも相談できずに親子とも追い詰められる場合もあるような気がする。私たち一人ひとりはそのそんなに強くもないし、上手に子どもを育てているわけではない、介護も一人で上手に出来るわけではない、もう少し皆で相談したり話し合ったりできたら良いと思っている、というメッセージを伝える方法を考えることも必要だろうと思う。それは一人で頑張るためではなく、皆と相談しあう環境を見つけたいと思うからである。

ケースのツボとそこに 合わさる言葉（２）

岡田 隆介

児童精神科医

今回も、「ケースのツボとそこに合わさる言葉」がテーマです。体験をヒントに創作した事例をもとに話を進めたいと思います。

1. 初診時の情報

初診のカルテには、家族が記入した相談カードがはさまれています。私は、それに目を通す前に簡単な家族関係図を描いて眺めます。その年齢と家族構成から、いろいろ思いを巡らすのです。

まず、来談者について考えます。通常、登場するのは家族でいちばん困っている人です。「大方のように母親が一人で来ているだろうか。小学生までなら子どもも一緒だろうな。相談内容によっては父親も一緒かも」と想像します。そして主訴です。「母親だけなら、学校での不適應だろう。子どもが一緒なら、発達障害とか知的障害の相談かな。父親が来ていたら、たとえば金銭持ち出しとか徘徊のような育てにくさの相談ではないだろうか」。最後は家族関係です。来談のメンバー構成から、主訴となっている問題の大きさ、家族のつながりがおおまかに推測できます。

こういったことは、家族が書いた用紙を見ればすむことです。それをせずに想像するのは、自分の中で家族への関心がたかまっていくからです。それによって、面接の中で尋ねたいこともはっきりしてきます。これは、家族と会う前の頭の柔軟体操です。

2. 診察室で

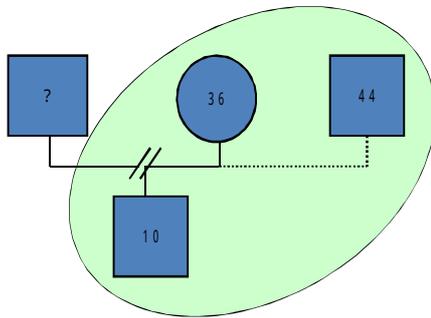
ですが、今回のケースはちょっと違う形でスタートしました。「次の人、どうぞ」と呼びかけると、顔見知りのケー

スワーカーがふてくされた様子の男の子の手をひいて入室してきたのです。後ろを見ても家族は見えません。「えっ、どういうこと？」。ケースワーカーの説明は、次のようでした。「彼は、早朝に 署の署員につれられて一時保護所にきました。原付盗および無免許運転で補導されたんです。小学生だと思われませんが、いくら名前とか住所を聞いても一切返事をしないんです。朝のラジオ体操が始まる前に無断外出を試み、どうしても家に帰ると言って大暴れしまして、そのとき腕のところをちょっとケガしたので診てもらえませんか？」「それだけ？ほんとに？」「いや、できたら名前とか聞き出してもらえたら」「やっぱり。ケガは診るけど…。どこ？ちょっと見せてね」。白衣の人間が痛いところを触るのだから、返事などするわけがありません。

「いや、精神科医ならなんでも聞き出してくれるかなと思って」、「キミらワーカーくらいだよ、やたらと精神科に来て話を聴いて欲しがるのは、不覚にも補導され、有無を言わず連れてこられて、しゃべる気にならないよねえ。それで、痛むのはどこ？」。と、そこにノックがありました。「話を聞いて、ひょっとしたら自分の関わっている子どもかもしれないと思って」と、別の児童福祉司が入ってきます。「どうぞ」、「おっ、B男くんじゃないか」、「あっ、先生！」、「彼は、半年くらい前に、学校から相談を受けて家庭訪問をした生徒です。間違いありません。ねえ、どうしたの？」。そして、誰もいなくなりました。

「乗り損ねた舟」みたいな気分になって、1週間後、件の福祉司をつかまえその後の様子を聞きました。彼と会ってからというもの、Bくんはすっかり一時保護所に馴染んで生活しているとのことでした。そのときに知らされたのが、次のジェノグラムです。

家族関係図



これを見ると想像癖にスイッチが入ります。「母子と内縁の男性というのは、よくある組み合わせだな。母親の結婚から離婚、そして男性と付き合う時期と経緯はどうなんだろ。20代半ばでの出産だから、経済的な理由よりも夫婦間の問題かな。親権を母親が取ったのは、どんな話し合いの結果だろ。それぞれの、とりわけ母方の実家はどのような動きをしたかな。なんとなく、Bくんはずっと父親とは会っていない気がするけど、どんな思い出が残っているだろう」。さらに想像は続きます。「いまは男性と一緒に住んでいるのかな、それとも通ってきて泊まっていくのか、あるいは母親が子どもを置いて出かけるのか。知り合ったのは、子どもが何歳の頃だろう。男性と付き合っていることを、子どもはどうみているのかな。その人について、子どもは何かを言えるのだろうか」。こういったことは、相談内容と深く関連しているはずですが、母親の家族観とか将来像についても、知りたいところです。

こうして家族への関心が高まると、いろいろ確かめたくなります。とそこに、児童福祉司の声が割り込んできました。「あの、ちょっといいですか?」、「いいけど」、「実は、彼、学校で対教師暴力や器物破壊を繰り返している子どもとで、クラス担任が家族に相談を持ちかけるも連携できず困っていました。そのあたりから、自分がかかわるようになったんです。Bくんの家庭は、夜間にスーパーでパートをしている母親と、数年前から一緒に住

むようになった内縁の男性との三人家族なんですが、実は夕べ、Bくんの口から1年くらい前よりその男性から乱暴されているという話がでたんです。そしたら、これは虐待ケースだってことになって…」

虐待という単語が飛び交い出すと、俄然、児童相談所の動きが変わってきます。それ以前は、学校からは「問題の多い困った生徒」と見られ、児相は「監護不適の教護ケース」とみていました。そして、家族はずっと学校・児相に対し距離を置いていました。ところが「虐待ケース」となって家族は一転して強硬になり、連日、引き取りを求めて児童相談所に押しかけて来ました。

子どもの心は揺れていました。当初は無断外出をしても帰ろうとしていたのに、いまは家には帰りたがらず、施設にも行かないと言い張ります。児相も揺れました。子ども言動の受け止め方が、非行チームと虐待チームでずれてきたのです。その狭間で担当の児童福祉司は、「問題は彼じゃない、大人の身勝手さだ」と一人で苛立っていました。思わず「問題って?」と彼に尋ねると、彼は「上司は虐待だから帰すわけにはいかないと言うし、家族は学校や児相への意地で手放さないとと言うし、学校はどこかに行けばそれでいいという感じで、当のBくんの気持ちはどっかに行っちゃってます」と言います。

こうなると、もう乗りかかった舟です。そこで担当福祉司を空いた部屋に誘い、二人で関係者をつなぐ糸をたどってみることにしました。

3. 糸のつながり

「Bくんが学校で暴れるよね、するとどうなる?」

「困った学校が、母親に協力を求めます」

「何とかしてと迫られて、今度は母親が困るよね」

「はい。口では反発しても、実際は困っていたでしょう」

「で、同居の男性にすぎる」

「それしかないでしょう」

「男性は、彼なりのやり方で、つまり暴力でBくんを叱る」

「そうです。Bくんは男性には歯が立ちません」

「そこで彼は、怒りの矛先を家族にチクった担任に向け

る」
「そして、教室で荒れます」
「すると学校は、あれほど頼んだのにあの家族は、と苛立ちを込めてまた連絡する」
「母親はいっそう追いつめられ、ますます男性に頼るでしょうね」
「男性は、期待に応えようとさらに力を込めてBクンを殴る。そして、Bクンは母親からの見捨てられ感を強めながらますます学校で暴れる」
「つまり、みんなが苛立って、怒りを膨らませながら回り続けてるってことですか？」
「これって、やっぱり誰かが悪いのかな？この連鎖が続けば続くほどは、母親は男性を必要とし、男性は意気を感じて力でねじ伏せようとする。外圧が強くなればなるほど、男性と母は排他的に結びつきを強め、その分だけBクンは疎外感を増していく。この連鎖の一翼を、自分もしっかり担っていることにB君はぜんぜん気付いていないよね」
「むしろ、彼自身が連鎖のエネルギー源ですよ」
「Bクンには母親が必要だけど、Bクンが荒れる限り母親は男性のほうが必要になる。男性は、この家にいるためにBクンが荒れていることが必要だ。さてこの糸だけど、どこかが切れたらグルグル回らなくなるだろう？」
「いままで、親子関係を調整するために男性と母親の間になんとかくさびを、とばかり思っていました。ですけど、もっと扱いやすい糸がほかにありそうな気がしてきました」

担当福祉司は処遇協議の場で糸のつながりを誼い、その結果、児童福祉司指導となりました。そして彼は学校に対し、「今後、学校内で生じた問題は児相と一緒に取り組みます。学校での処遇協議にも出向きます。ですから、家族に学校で起きた問題のすべてを伝えるのは控えてもらえないでしょうか」と提案しました。学校と母親とをつなぐ糸に介入したのです。

やがて徐々に、変化がはじまりました。私は、勝手に次のような想像をしました。学校からの苦情(連絡)が減ったことで、母親の心に余裕が生まれ 男性は悪役か

ら解放され 母親の中で男性に依存する部分が減り 男性の存在価値がやや低下し 母親のゆとりがBクンにむけられ Bクンの問題が減少し 母親は学校と児相に感謝して協力的になり Bクンは学校と家に居場所ができて …。

4. ケースのツボ

このケースのツボは、Bクンと母親と男性と学校と児相をつなぐ糸です。誰もが当初、母と男性のつながりを「腐れ縁」、男性とBクンのつながりを「虐待」、母とBクンのつながりを「拒否」、学校と家族のつながりを「不信」としていました。いずれも、救い難いネガティブな糸です。担当福祉司と私は、の糸に男性への「依頼・傾斜」、の糸に男性の「見せ場・悪役」、の糸に「混乱・困惑」、の糸に「情報過多」という言葉をあてました。

最初の方は、問題とか弱みとかリスクという糸でつながっている人間関係です。後の方だと、関係そのものよりも糸のシステムに目がいきます。それが見えた(気がした)のは、一貫して離れたところに立っていたからでした。「遠くからしれっとケースを見るのも悪くないな」、本気でそう思いました。



第3回「冬の小鳥」

—子どもの目線でみるということ—

川崎 二三彦

この11月、新刊2冊をほぼ同時に上梓しました（次ページの最後に宣伝させて貰っています）。というのはよいとして、合計800ページのゲラを繰り返し読んで校正する作業に追われ、映画もほとんど観ることができませんでした。今回紹介する「冬の小鳥」も、東京であった某会議のあと、まさに一瞬の隙を突いて駆けつけたようなものです。でも、無理して行ってよかったですね。観てしまえば、「あの時間があったいなかった」と後悔することなんて、殆どないですから。

「最後に一時保護所で子どもたち2人と面接した。置かれている状況がまだ飲み込めない5歳の弟と違って、小2の兄は覚悟し、けなげに話を聞くのでこちらも辛くなる。が、そんな感傷に浸っている余裕はない」

「こうして兄弟は児童養護施設に向かった。あらためて施設の職員に事情を説明し、いよいよ彼らと別れる時が来た。

『じゃあ、お部屋に行こうか』

と、声を掛けた瞬間。兄が急にうずくまる。ふと見ると小さな顔は涙でくしゃくしゃ……。それまで必死に抑えていたものが一挙にあふれ出たのであろう」

というような、児童相談所時代に何度も経験した出来事が思わず知らず浮かんできて、胸が苦しくなってしまうのが「冬

の小鳥」の冒頭シーンだ。

映画を観にいくとき、あらかじめ多少の予備知識は持っている。だから9歳の少女ジニが、施設に預けられて生活するというストーリーであることぐらいは知っていた。私にすれば、自らこうした子どもたちにかかわってきたわけだから、決して珍しい話ではない。のだが父と二人、大きなケーキをかかえ、無邪気な様子でカトリック系施設の門をくぐるジニの姿にある種の予感が走り、私の心には早くもかげりが生じてくる。

「あっ、やはり」

「中を案内してもらいなさい」と院長が声を掛け、ジニがシスターに連れられていった隙に、父が黙って立ち去ってしまうのだ。1975年の韓国。

とその時、こんな声が耳の奥で囁いてきた。

「長く働いた児童相談所で、こんなことはなかったと、おまえは本当に言えるか？」

彼らの前に児童福祉機関やソーシャルワーカーは登場せず、父が直接ジニを施設に連れて行き、預けた後は全くの行方



知れずになるのだが、そのような事情に至った理由を、映画はなんら説明しない。あとはもう駄目だ。

「なぜ彼女はここにいるのか、あの優しそうだった父は、どうして彼女を置き去りにしたのか」

ソーシャルワーカーだった身が忘れられず、つつい事態を把握しようとし、いつまでもそんな疑問に拘泥するので、ともすれば映画の世界から取り残されそうになってしまう。

一方、突然ここで暮らすことを余儀なくされたジニは、すべてを拒絶する。

自分が持ってきたケーキを食べようもしないジニ。「パパはウソつかないもん」と言い張るジニ。ジニを指して「お客さんじゃない、私たちの家族よ」と囁きあう子どもたちの声を聞き、泣き出すジニ。ついに門柱に上り、飛び出そうとして立ちすくむジニ。そしてそして……。

預けられた施設の職員やそこで暮らす子どもたちが、存外にジニを暖かく迎えてくれているのは、観ていて本当に救われる思いがしたのだが、それにしても、次々と映し出される彼女の行動、彼女の姿を見ているうちに、鈍感な私ではあったが、はっと気づくことがあった。

ジニの絶望は、単に父と離ればなれになってしまったという事実にあるのではない。なぜ裏切られたのかということすらわからないという点にある、つまり、自分がこの施設で生きていく意味を、必然性を誰にも知らされなかったがゆえに絶望するのである。

そう考えて、私には初めてこの映画が何を言いたかったのかがわかった、よう

な気がする。映画を観た多くの人が、「子どもの身の丈の高さから描いた作品」だとか、「カメラはジニの目の高さと同じ位置にある」として高く評価しているのだけれど、私にとってそれは、ソーシャルワーカーの立場からではなく、常に子ども自身の気持ちになって考えよというメッセージだったのである。

理不尽な大人の仕打ちを甘んじて受け入れるしかないジニが、懸命に生きていこうとする姿。そのジニを寡黙に、しかし見事に演じたキム・セロン。それらが一体となって、本作を今年の秀作に仕上げたのであろう。

(鑑賞データ：2010/10/17 岩波ホール)

「日本の児童相談

－先達に学ぶ援助の技」

川崎二三彦・鈴木崇之編（明石書店）

2,400円＋税

7人のプロに聞く幼少時の生活史から対人援助の神髄まで。

「子ども虐待ソーシャルワーク

－転換点に立ち会う」

川崎二三彦著（明石書店）

2,800円＋税

生きづらさをかかえる現代の家族、児童福祉世界の激変。私が自ら体験し、生きてきたこの時代をまるごと捉え、形として示したいと考えて編んだ480ページ。

著者はできばえに納得。皆様、是非ともご一読下さい。

子どもと家族と学校と

③

『不登校は、学校が悪い？ それとも、家族が悪い？』

CON カウンセリングオフィス中島

中島 弘美



学校生活のなかで、いじめ、暴力など気がかりな問題は後を絶たない。そして、あいかわらず、長期欠席をしている子どもたちも多い。

その不登校の支援をされていて目にすることは、学校側と家族がうまく協力できていないことだ。

学校は、家庭教育をもっとしっかりしてほしいと考え、家族は学校にさまざまな思いや要望をもっている。

今回は学校と家族との関係調整の中で考えた不登校支援について記してみる。



派手な家族？！

「遊び人風のお父ちゃんですわ～髪の毛を茶色くして、ラフな格好です～お母ちゃんはいつもミニスカートです。生徒さんは中学二年生ですが、大人っぽく見えます。母親と二人で歩いていると姉妹みたいですよ。まあとにかく目立つ両親ですね」

リナの家族は、学校の先生方からすると、派手に映っていたようだ。

リナが抱える問題は不登校。二学期が始まった九月上旬から、長期欠席をしている。すでに四カ月を経過した。

中学生になってからのリナは、熱心にクラブ活動を続けていたが、レギュラーに選ばれなかった頃から、だんだん元気がなくなっていった。定期試験の成績もトップクラスから、まん中よりも下に低下し、思い通りに進まないことが重なっていた。

家のごたごたも同じ時期だった。自営業の父の仕事をめぐって意見の食い違いがあり、両親はもめているという。

子どもが不登校になっているのは、家族に問題があるから再登校できないのではないか。家族関係を修復して再登校に向かうには家族療法が適しているということで、学校から当オフィスを紹介された。

家族療法は『問題がある家族』を治療する。そう誤解されて捉えられているが、実際は、『家族が協力をする』ことで問題解決をするので家族療法という名称なのだ。

学校が家族療法をすすめたわけは、母が、家からいなくなったことにあった。実際、リナの母は、しばらく実家に戻っていた。夫婦の対立から体調を崩し、実家で養生していたのだ。

子どもが不登校の時に、母が自宅を空けて実家に帰っている。よっぽどの事情

があったのだろうと受け止める人があるだろうし、一方、やっぱり家族に問題があると受け止める人もあるだろう。



初回面接

さて、そのような事前情報の中で、カウンセリングの当日、初回面接には、親子三人でやってきた。三人とも髪の毛が金髪に近い茶色だ。

学校に行かないのだからと、リナも髪の毛を染めている。しかもきちっと髪型がきまっている。整えるのに三十分以上かかるというのも、うなずける。手にはマニキュア、眉毛を細く整え、メイクをしている。身長は母より高い、大人っぽく見えるが、時折見せる表情はまだまだあどけない。

確かに見た目は派手だが、三人そろって面接にやってきているところからすると、まとまって行動できているのではないか。良いスタートが切れている。

「いますぐに学校に行くことは望んでいないけれど、いつか、もどることができれば良いなと思っています」父も母も同じような考えを持っていることもわかった。

カウンセリングに来たのは初めてというリナは、口数は多くないが、日記を書くのが好きだという話がでたので

「良かったら、その日に思ったことを、ノートに書いてみませんか」と、すすめるとニコリとうなずいて、書いてくると返事が返ってきた。

リナとの関係も少しずつ築くことができた。



もっと学校がかかわってほしい

リナの家族が学校に対して、感じていたことは、成績優秀だったリナが、成績が低下し、元気がなくなっていったにもかかわらず、学校側は、あまり手をさしのべてくれなかったと考えていた。もっと早く、学校側が対応してくれていたなら、ここまで欠席が長期化しなかったのではないか、進学指導の勉強が中心で、ついていけない生徒のフォローや困っているときにかかわってくれないのと感じていた。

問題がこじれてしまうと、家族は学校に責任を求めたくなり、学校は家庭に問題ありだという姿勢を強めていく。そのような体制に陥ると物事は進展しない。不登校支援の場合は、学校と家族が子どもの再登校に向けて、いかに協力する体制を築けるかどうかが重要である。

まずは、その体制づくりから調整していくことになった。



学校訪問

CON のカウンセリング支援の特徴の一つに『カウンセラーによる学校訪問』がある。それは、在籍している学校に行き、子どもさんの関係者とお会いして、情報交換し、その後の連絡をとりあう道筋をつくっていく。

もちろん、ご家族にもその目的を説明し、了解を得て、学校訪問をしている。学校の先生方にお会いして、クラブや教室での子どもさんの様子などをおききして、関係者の話を総合的にあわせていくと、子どもさんの理解を深めることになる。

また、学校訪問では、学校の内規を把握することも目的としている。

それぞれの学校で、教えていただける

範囲で、どのようなルールが存在しているのかの情報収集をする。それは、子どもさんやご家族のモチベーションと、再登校する場合のタイミングをうまくあわせていくために重要な情報となる。

リナの学校の制度として、長期欠席であったとしても、三年生に進級することができる。つまりこのまま学期末まで欠席をしていても、問題はなく、本人と家族が望むのならば三年生に進級できるという内規を提示してもらうことができた。

高校生の不登校のように、あと、何日休んだら単位がとれない、留年になるかもしれないなどのしぼりがないので、あせらずに再登校にむけて準備をする環境下にある。

学校側がなかなか手をさしのべてくれないと母が言っていたが、その事情は担任と話をすることでわかってきた。

特にトラブルがあったわけではないが家庭訪問をしても、リナは話さずにずっとだまっているし、電話口にも出ない。訪問することがかえってリナへのプレッシャーになるのではないかと判断し、訪問を控えているためだった。もちろん、家族の希望があればできるだけ取り入れたいと考えていることも伝えられた。

本人の特徴としてわかったこともある。リナは、授業ノートをかなり几帳面に書いていることだった。相当時間をかけて書いているようだ。教科担任の先生もその様子を知っていた。

学校側の情報やご家族の話をもとめていくと、少しずつ全体像がつかめていく。

その後の面接では、過去にどのようなことがあったのかの話よりもこれからどうなっていきたいのか、どんな家族だと

いいなと思うのかなどのお話を取りいれながら、面接が進んでいく。

両親のこれまでのことにはあまり触れずに、「これからどんな家族でありたいですか。今どんなことができますか」

今後焦点を当てた話題が中心になった。



修学旅行に参加したい

面接の時に、語られたことは、家においても仕方がないので、気分転換するために父が職場にリナを連れて行き、パソコンで数字を入力する仕事を手伝わせたという。

「正確に入力するので助かります」と話す。リナの几帳面さが頭に思い浮かんだ。

母は犬の散歩をリナといっしょに出かけ買い物に行き、夕食の用意やお菓子をつくったりしてゆったり、過ごしているという。

父が話す。

「これまで、この子は毎日夜中の3時ぐらいまで予習などの勉強をしていて、もうちょっとゆっくりしたら良いのにとおもっていたのです」

家族は、できるだけ休養をとること、リフレッシュできるような環境作りをしていることがとてもよくわかった。

しばらくすると、家族でスキーに行っているうちに、リナが「修学旅行は行きたいなあ」と口に始めた。

彼女のノートにも、修学旅行のスキーには、行ってみたいと書かれていた。

学校に行きたいとは言わないが、修学旅行には、行けたらいいと話したのだ。

そのころ、クラスのともだちから、電話があり、自宅に来てもらって、いっしょにゲームをして過ごすことも増えていった。

春に予定されている修学旅行に参加するためには、中学三年生の新年度からの登校できていれば良いのになあというのが、家族が意識し始めていることだった。

「新年度までにどのようになっていたら良いと思いますか」

と家族にたずねると、

「規則正しい生活と、遅れている学習をかたづけていくこと、それに、髪の毛も黒くしないとイケないしね」

と、母がリナの髪の毛をさわりながら、話した。



新学期

中学三年生の新学期になった。

新しい学年の担任は女性の先生が担当することになり、出席しやすいとリナが考える授業からすこしずつ教室に入ることになった。出席できない授業科目の時間は学校側が準備した別室で自主勉強を続けながら、学校にいる時間を増やしていった。

自然な流れで再登校につながっているのは、リナがこの春休みに、ひとりで新幹線に乗って親戚の家まで行き、テレビ局の見学もして帰ってきたという経験が自信になっているのではないかと母は話した。行動力もついてきているようだ。

学校の各授業の連絡や調整は、担任の先生がリナと話し合いをする、そして学校と家族の間の調整を当オフィスが担当する、そのような役割分担もうまくなされるようになっていた。

その後リナは、念願の修学旅行に参加したものの、クラスの友達とけんかをしたのでそれほど楽しくなかったと話したが、修学旅行以降はすべての授業に出席するようになっていた。

朝起きてから、学校に行くまでの支度は、以前は三時間ぐらいかかっていたが、今では、一時間ほどで準備ができる。髪型のこだわりも以前のようなことはなくなった。生活の中でもこれまでと違うリナの様子を確認できるようになり、安定してすべて登校できているために面接終了を迎えた。



子どもが続けて学校を欠席し始めると、親の育て方や家庭環境、学校の協力姿勢、ここぞ問題だ！というものを見つけ出しなくなる。

だが、家族、学校は、それぞれがせいっぱいやれることをしてかかわっている。その前提に立ったうえで、関係者がお互いに協力をする。その時点から何ができるのか、何をやめておいた方が良いのか、何をはじめたら良いかに着目すること、それらの視点を持って支援を続けていきたいと考えている。



螻蛄の斧 (とうろうのおの)

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第三回

団 士郎

仕事場D・A・N / 立命館大学大学院

ここに書いているのは児童相談所(昨今は国民の誰もがその存在を知ることになった)が、まだまだ「児童相談所」の説明からしなければならなかった頃の仕事の話である。十年一昔と言うが、1990年といえば二十年前。今、大学生の人達はやっと生まれた頃だ。

そこで行われていた子どもの福祉や健全育成に向けた仕事が、今では考えられない古臭いものであったら、課題はあるにせよ現在は、進歩したものだという結論になるだろう。しかし世の中というのは概ね、そんな風に進化するものではない。仕事、中でも業務の枠組みというのはなかなか変化しない。職場の悩みを聞いてみたら、昔も同じじゃないかなんて話はよくあることだ。中味は変わっても実は堂々巡り、こんな事もよくある話だ。そして、注意を怠ると世の中は進歩しているはずなのに、仕事は稚拙化、劣化する。名人、職人がいる業界ではよく聞く話だ。

この二十年を振り返ると、児童相談所の仕事はそれまでがそうだったように、やはり時代の風にあおられて、業務の様相を変化させてきた。計画的構築性などなかなか持てないまま、目前の課題に翻弄されてきたのではないかと思う。

近年ずっと騒ぎの中心にある児童虐待だが、現在の陣容で児童相談所が危機介入から家族再統合、そして防止・予防まで語るのには世迷い言にさえ見える。そんな難題をふっかけられて犠牲になっている後輩職員達を気の毒だと思って見ながら、同時にちょっと彼らにも知恵や勇気が足りないのではないかと思ったりもする。

私は4カ所の児童相談所に合計21年勤務した。当時、このキャリアは殊更珍しくはなかった。もっとベテランの児相職員は全国に沢山いたし、採用から退職まで35年以上、児相一筋という先輩もいた。私自身、二十年余働いてもマンネリしていると思うことなどなかったし、惰性で働いていた記憶もない。そういう意味では特殊な仕事、職場だったかもしれない。

2010年11月、「週刊少年サンデー」で『ちいさいひと～青葉児童相談所物語～』が三週にわたって掲載された。新採の児童福祉司が主人公のコミックスである。設定にも驚いたが、内容にはもっと驚いた。私は浦島太郎だと思った。「人事異動で久しぶりに児相に復帰しました」と語る人が、「様変わりぶりに驚いています!!」というのを何度聞いたことだろう。時代の変化が必ずしも進化だとは言えない。みんな頑張っているのに、事態が良くなっているようには思えない、これが今日ではないかと思う。そんな時には温故知新。少年サンデーに対抗するわけではないが、今回は別冊マンガも用意した。もし届くものがノスタルジーでしかなかったら、私の筆力の未熟だろう。現実には確かに豊かだったのだ。

1990

三月

3/2 FRI

夜、一時保護所に中学生が来ていて宿直当番。一緒に飯を食ってテレビを見る。ほとんど自分から話さない少年。

3/3 SAT

家中に爬虫類を飼っている登校拒否中学3年生の家族との最終面接。就職先が決まって、その給料をあてにして、分割払いで新種のトカゲを50万円で買ったそうだ。頑張れるといいな。

京都府はずいぶん後まで、一時保護中の子どもの夜間対応を、職員が交代でしていた。だから担当ケースの少年・少女と一晩過ごすことがけっこうあった。

勤務としては長時間拘束（三十二時間）であり、他府県の実態は刻々変化している中でのことだった。

自分たちの負担軽減のために、一時保護期間をできるだけ短期に設定しようとする無意識の協同や、簡単には一時保護を開始しない傾向もあった。

いいか悪いかは、おそらく両面である。手段を乱用しないメカニズムは、こういう動機にも支えられているといえる。専任宿直員のいる状況なら、あまり仕事がないのもいかなものかという判断も働こうというものだ。

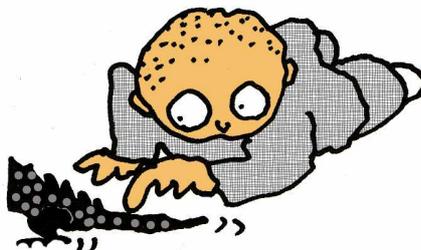
もっとも、近年では都市部も地方もあまり変わりなく、一時保護所はどこも、要保護児童の対応に満杯の大賑わいらしい。

この頃まだ、「登校拒否」という言い方が主流だったのか・・・と、これを読んで思った。「不登校」が常識になって、二〇年にはならないのだな。

そしてここに出てくる、トカゲ五十万円という単位に驚く。やはり世の中全体にバブルの匂いがある時代だったのだ。

たしか既に飼っていた南米産の爬虫類を業者に引き取ってもらって、差額を足して手にいれたトカゲだった。

「の子が
葛中類だ！」



この一家に家庭訪問したときのことも忘れられない。玄関を開けたとたん、家中温室状態だった。爬虫類放し飼いの家など、後にも先にも経験がない。

3/5 MON

重症心身障害児施設「H学園」との話し合いで、T川・N川両課長と出かけた。「児」とつく施設であるにもかかわらず、年長者51歳、十代の方はわずかだという。隣接する養護学校の分校は、数年後には在学対象者がなくなると聞いた。

就学猶予、免除などという言い方で、教育権保障されなかった重度障害者に、さかのぼって教育保障していた養護学校も、ぼつぼつそんな対象者がなくなってきていたのだろう。

重症心身障害児施設というが、入所者は皆、成人してしまうこの時期には、隣接の養護学校分校も入学者がなくなりかけていた。立ち話で分校関係者は私たちに、学齢期の重症心身障害児の入学斡旋を強く求めていた。

3/7 WED

実習生の最終日。午後半日かけて、振り返りをする。彼女達は14日間の驚きの連続の中で、ずいぶん正確にものを言えるようになっている。

3/8 THU

昨日から、京都府心理判定員会議をや

っていて、今日のコメンテーターを依頼されていた。心理職課長がレギュラー参加しなくなって、少しずつ以前とは違ってきている。

3/13 TUE

久しぶりに心理検査をした。食べないで衰弱して、入院をするという小学6年生女子。どう進めていくかは、これから考える。

こんな実習生の中から将来、児童相談所で働くことになる人が何人かあった。仕事が魅力的にみえていたのだろう。働いている人が生き生きと輝いていたと感想を述べた学生もあった。

児相職員の平均在職期間が三年未満と聞く今、外部の人や学生達にはどんな職場に見えているのだろう。

当時、県市によっては、大学と共同して事業を始めたり、スーパーヴァイザーとして大学教員を招いている所も少なくなかった。しかし京都府に関して、我々はそういうスタンスは全くとらなかった。

仕事は児童相談所に属しているが、研究はその個人に属していると思っていた。大学教員の関心でやってこられて、満足したからとほかにいってしまわれる児童相談所として、置き去りにされているような実態を少なからず目にしていた。だから我々のところでは、何でも自分たちでやろうと思っていた。

心理判定員会議では様々な工夫や提案を形にしてきた。「月刊・心理テストカンファレンス」という冊子もその一つだった。この会議とは別に月例実施していた心理テストカンファレンスを、担当者が小冊子にまとめて、百力所あまりの関係者、機関に、守秘お願いのための通しナンバーを入れたものを送っていた。

研究者ではないが、現場もこんな風ががんばっているのだと知らしめたかった。そして上芝功博さん、氏原寛さんなど、何人かの業界先輩の方々から反応や書籍、カンパをいただいて、とて

も嬉しかった記憶がある。

アノレキシア（拒食症）女子との家族面接をすることになる出会だった。それまでも、痩せ症の女子ケースに会ったことはあった。しかしその時は、個人セラピーを実施していた。（効果のほどは何とも言えないが、時間と共に変化した）。

このケースでも初期は相互描画法を用いて個人面接していた。小康状態の保てる半年ほどの期間を過ごした後、母親の強い希望で一家四人の合同家族面接を実施することになった。

ランチセッションなどという面接場面で食事をする方法も、ミニチュチンの本を参考におこなってみた。思いがけない発見や落胆もあったのだが、ここで詳細には述べない。

3/14 WED

秋に京都で開催する「全国児相研セミナー」の現地実行委員会の通知を作成。午後はABC朝日放送ラジオへ。卒業シーズンということで、テーマは自立、旅立ち。旅立たれる側の課題に焦点をあてて話す。

児相研セミナーは2010年（青森大会）に至る今も継続している自主的研究グループである。私もできるだけ参加するようにしている。「研究発表」中心の集まりではなく、児童相談所を取り巻く諸問題について、情報交換や検討することを目的にしている。

この日の記述を読みながら気づいたことだが、相談判定課長の私は当時、相当に優秀な課員に支えられていたようだ。

午前中全国セミナーの文書作りをし、午後は休暇を取って月に一度のラジオ出演をしていたのだから、日常業務は実に順調に進行していたということになる。

私なりにみんなの支え役ではあったと思うのだが、課員にとっては、近接異分野の風をあちこちから持ち込んできてくれる小隊長だったのだろうと思った。この時代の課員とは、この後もずっと、なんやかやと出会う機会がある。

そして私は、二十年も前から、子ども達の自立不全が気になって仕方なかったのだと思ひ出す。このテーマは近年、ますます問題拡大してきているやに思える。そしてこの依存性を、私も含めた心理職、対人援助職者が一貫して助長してきたように感じられて仕方がない。

3/16 FRI

情緒障害児短期治療施設「静岡県立吉原林間学園」に講演に行った。新幹線の新富士駅から霞がかかった富士山が正面に見えた。長男が公立高校に合格したことを、名古屋のプラットホームから公衆電話で聞いた。息子の元気な声がとても嬉しかった。

当時、情短施設は京都府にはなかった。京都市は情短・青葉寮が京都市児相に隣接してあった。

この頃、吉原林間は、生活と治療と教育の三本柱の金食い虫ぶりに、議会で追及されていた。少ない在籍児童に莫大な金をかけて、効果はどうなのだという県議会での質問だった。

確かにこの時代、情緒障害児短期治療施設(ほぼ公立、職員は公務員)は裕福な時代のさらなる一歩という位置づけの施設だった。

今、情短施設は社会福祉法人施設として、虐待児の受け皿として、全国で増えている。



ここで高校入学を喜んでいた長男が、今、本誌で連載もしている団遊である。二十年というのは、そういう時間なのである。

仕事で出会うひきこもり青年。「高校時代の嫌な思い出が・・・」と語るが、どれほど変化の可能性に満ちたその後の時間を無為に過ごしてきたことかと思う。

人が自身の説明(言説)に執着してしまったり成長も変化も拒否できてしまう。抵抗できないのは身体変化と加齢くらいのものだ。それでも一生は過ぎてしまうのだから、無為を助長するような支えにウカウカ一票を投ずるものではない。

我が子や自身の人生がそうやって費されていてもいいと覚悟が決まるなら自由だが、他人の人生の浪費だけに平気というのは酷いのではないか。

3/22 THU

受理判定措置会議 母に急死された男の子二人が家庭内暴力と登校拒否でどうしたらいいのかわからないという父親の相談があった。

それから母子家庭の母親の素行が悪くて、三人姉兄妹それぞれが非行という相談もあった。

離婚、事故、癌、その他、いろいろな原因で核家族が維持できなくなる。みんな辛い。

夕方、徳島県児相の判定員が家族面接の実際を見せて欲しいと訪ねて来訪。

ケースは日々多様に飛び込んで来て、展開していた。対象を特化しない、家族、子育てにまつわるあらゆる相談が寄せられていた。

この日に限らず、児童相談所における家族療法の視察という枠組みで、あちこちの県から訪問があった。この日の判定員は、他用務があって関西に来たついでに、一度見せて欲しいという趣旨の来訪だった。

この時期の視察の特徴の一つは、年度末の予算消化行動であり、せつかくなら京都見物でもし

てくればいいと、職場の合意で出張派遣されている人も少なくなかった。そのため、見に来ているのに、あまり家族面接には関心がないなんて人も含まれていた。



3/23 FRI

来週、療育事業・琵琶湖一周サイクリングに登校拒否小・中学生8人を連れていく。その候補者の一人と面接。この子達はいろいろ小さなことを気にして、すぐ感情を害してしまったりする。グループの一員になって一週間旅をするなんて、なかなかだ。

3/26

サイクリング参加者7人とその第1人が、欠けることなく集合。みんな登校拒否だ。

私は出発三日後の夜、22時前の列車で、米原乗り換えで木之本駅に行って、ピックアップしてもらい、サイクリング部隊に合流した。明日、明後日と伴走車でビデオ撮影担当だ。今夜は賤ヶ岳ユースホステル泊。

3/31

昨日までの走行実績から見て、最終日の予定行程は無理だろうという予想が昨夜のミーティングの大勢をしめた。それでも、朝5時30分起き、6時10分出発。そして結果は予定の膳所公園に12時に着いた。60km近くを昼までに走りぬいた。子どもも大人もみんな顔付きが違っている。いいサイクリングだった。

琵琶湖一周サイクリング

さて、今回のメインメニューである。この手の療育事業はあちこちの児相で、たくさん行って

いた。時代がそんな風向きだったのだろう、様々な療育事業メニューがあって、競い合っていた感覚もある。

京都府でも、集団になじめない子のための合宿(集団指導プログラム)や、非行少年達を四国・四万十川に一週間連れて行って、河をゴムボートで下る事業(スタッフにとってあまりにハードだったので、一回きりになったが思い出深い)など、様々なことをした。

どのような意味があり、どんな成果があったのかと聞かれると、実証的には答えられない。しかし実際に渦中で一緒に行動して、手に入れたモノは限りなくあった。

琵琶湖一周サイクリングは7~8年も(毎年、春と夏)継続したのではないだろうか。不登校を中心に、家族面接、カウンセリング等の経過を持った子達の、区切りイベントとして位置づけられていた。

春休みと夏休み後半に、対象児童がゼロでない限り、参加者一人から出発していた。

閉ざされた面接室の中で、デリケートな心の中だけの援助では、子どもも家族も再生しきれないことは気づいていた。両者を組み合わせた援助プログラムの発想は、我々のオリジナルなどではなく、考え方として諸外国に既にあった。我々のところではメニューを何にするか、そこが独自性のある余地だった。

琵琶湖一周するという達成感の明確さ、一日中、湖を眺めながら疾走する爽快感、湖岸各地の青少年施設の整備充実と、申し分のない条件が整っていた。京都の児童相談所ではあるが、滋賀県琵琶湖を大いに活用させていただいた。そして、参加者の予後は、期待に十分応えてくれていたと思う。

ただ、この事業で私たちが悩ましたのは予算の問題だった。基本的には庶務・会計のところさばいてくれる話である。しかし彼らのルールでは当然、事業計画を立て、予算要求をして、予算の付いた事業を執行する。

ところが臨床家でもある私たちは、「来年の

夏に何名の不登校児をサイクリングに連れて行くことになるかなど、前年に分かるはずがない！」と言っていた。

そして直前になって、「今年は五名になりそうだ」とか、「一人だけかもしれない」とか言っていた。

庶務・会計の人たちには迷惑なことだったろう。だが、何でも予算だけで決めるのは弱いことだ。

他にも予算絡みではこんな事もあった。随行職員もそこそこの人数が必要になる。その職員達の時間外勤務手当がまかなえないという話が会計からあった。サイクリングは業務だから、その勤務に対する手当が当然発生した。二四時間張り付きの一週間分である。伴走職員を減らすとか、滋賀県は近いから職員は日帰りに出来ないかという提案もあった。

しかし私はそういう対応を選択しなかった。皆で話し合っただ手当てを返上した。合宿中の宿泊費や食費をカバーするだけで参加してくれるよう話をつけた。この結果、予算の問題で庶務・会計と、調整しなければならないことは減った。

当時、特に中央児相は、超勤手当の完全支給について、組合との協議が繰り返されていた。役所と言うところは今も、何かを実施しようとする「予算がない！」といわれ、いったん予算が付くと、「何が何でもやってもらわないと困ります！」と実施を迫られる、こんな事態がなくもないだろう。

*

この数年の療育事業をまとめて後年、月刊「少年育成」誌（当時の名称は「少年補導」）に二年（24回）にわたってマンガの連載をした。それを掲載しようと思った。しかし本誌に入れ込むと膨大なページ数になるので、昔懐かしい月刊誌の付録本の感覚で、別冊付録にすることにした。

マンガにはカラー頁も含まれているので、プリントアウトするとコストがかさむと思うので、モニター上でごらんいただくのが合理的かと思う。

㊦巻40頁は完成させたが、問題は㊦巻である。年末年始に作業できればと思っているが…。

（では、別冊マンガを）

そして今、2010.12.12

家庭内暴力をのりこえる
「家族臨床理論」の構築にむけて
虐待を解決する取り組みの
最前線からの問題提起

と長いタイトルの公開シンポジウムに出かけた。同僚の中村正さんと大阪市の久保樹里さんが企画したものだ。大阪を中心に、このエリアで働く様々な機関、組織の人たちが、ちょっと一堂に会しすぎといった趣の、贅沢なイベントだった。

報告は又正式なものがどこかで行われるだろうが、私はちょっと義理もあって、前日東京で6時間のワークショップを行い、東京泊になった翌朝6時50分の新幹線で大阪に向かった。八重洲富士屋ホテルにいたのは前夜11時半チェックインだったので、6時間半だけだった。

しかしこの会は、出席できて本当に良かった。登壇者と参加者で、会場はぎっしりだった。児相とその周辺で問題意識を共有しながら、協力協働しようとする人たちがたくさんあることに触れた。

全国の児相がみなこんな風だと言えないのは重々承知だが、新しい時代の新しい風は起きていて、そこには私の時代に吹かせた風の匂いも少し感じられた。だからこのマガジン連載（20年前の日誌）の中に、普遍が含まれていることも確認できた。

問題を調査することや指摘することは比較的たやすい。手におえる部分を切り取って、限定的に言及すれば、発言はそれほど無意味化しない。

しかしその結果を、具体的に業務デザインにして世に問うのは簡単ではない。現実には刻々結果を見せつけるし、そこで一定の成果を上げるのは容易ではない。

それに新しい試みはいつも、それまでのことを

批判することになる宿命を背負っている。そのため、たいした意味もなく、変化したくないと訴える組織や人が少なくない。

「このままではどうしようもないでしょう！」等と叫んだところで、相手も世の中も変化したりはしない。変化可能な部分から手を付けて、ひたすら働きかけ続けるしか、社会システム変容への道はない。

私はこの会場でしきりに自分がこれまでしてきたことを振り返っていた。そして、「蠅螂の斧」の第二部に書こうとしている継続的地域ネットワークの事を思っていた。（詳細はいずれ）

2010年6月に始まったこのマガジン。今までなかったものが、このように持続的に場を獲得して、様々な現場のコンテンツを運んでくることになった。その場の管理人として3ヶ月に一度、世の中の変化（新たな物が一つ付け加えられる点において変化である）を作り続けることになった。

私は今、自分のやりたいことをやる自由を授けられている。ありがたいことに協力、協働者もたくさんある。ならば、ここに何か一つでも時代の進歩を刻まなければならないのではないかと考えて、今朝も新幹線の車中、編集作業を続けていた。

そして会場で、いろんな取り組みや、論拠に基づいて奮闘する、私よりずっと若い人たちの群れに出会った。

嬉しく、有り難いことだなぁと思って最後部の端の席で、喜びに満ちて座っていた。

学校臨床の新展開

—③学校と児童虐待Ⅱ—

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

対人援助学会で

11月の対人援助学会に参加して、「対人援助マガジン」の何名かの著者とお会いする機会を得ました。なかでも、同じく「学校」をフィールドとして活動されている中島弘美さんと同じグループで日々の活動や「対人援助マガジン」の活用や表現方法などについて話げできたことはとても良かったです。そこで話を聞き、やはり、できるだけエッセイ風に綴っていくほうがよいかなと、思いました。ということで、ますます拙い記述ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

芸大で

最近「それで、芸大で何をしているのですか？」と言われることが多いのです。これまで、かかわった子どもたちのなかには

「浦田さんは芸大で芸術の勉強をしている。」と真剣に思っているものもいるとか。でも、最近、本当はそれが正解なのかもしれないなと思ったりもしています。元来、絵を描くのが大の苦手。その苦手意識はいつの間にか大嫌いになり大きなコンプレックスになっていきました。それが今、縁あって芸大です。

義務教育下での教科教育では、教師の手柄や指導方法、評価方法などによって、子どものモチベーションは少なからず、変化するのではないのでしょうか。私の場合は高校に入ってようやく、学ぶ喜びを知りました。小学校や中学校では、「忘れ物の多い子」「落ち着きのない子」「乱暴な子」として問題視されていたかもしれません。美術の授業も実に苦痛でした。さて、そんな私が芸大へ来ていちばん勉強になったこと。芸大では学生制作物の評価は「合評」といって教員や学生が、その作品について、あれやこれやと語りあうわけです。そこには、自分の表現を何とか伝えようとする学生の

姿と作品を通して学生とコミュニケーションをとる教員の姿があります。心理療法のなかには古くからその中核として芸術療法、表現療法が存在するわけですが、相手が伝えることを何とか理解しようとする姿は、まさに対人援助の「見立て」のトレーニングそのものとなります。これは、表現者（学生）をクライアントとして捉えて、というわけではありません。表現者の「作品」「表現」が何を伝えようとしているかを必死に考えるようになったということです。対人援助場面ではクライアントが表出する現象面はもちろんのこと、その表出の背景を読み解く力が強く求められます。「なぜか」と必死に考えるのです。その行為と「合評」は実に似ているのです。「見立て」「アセスメント」はクライアントを「理解すること」ともいわれますが、人が人を理解することは一見簡単なようで、とてつもなく難しいものです。芸大で「なぜか」の視点のトレーニングを受けるようになって、いままで以上に、あらゆること、世の事件などについても「表現」として解釈、理解しようとする姿勢が身につけてきました。「なぜこのような表現をするのだろうか。」「この表現は何を意味するのか。」と。だからやはり勉強させてもらっているのです芸大で。（実際には、保育士養成課程の教員として「社会的養護」関連の科目を担当しています。）

がっこうのせんせい

さて、話を本題の学校に戻します。スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーが学校という場に入るずいぶん前か

ら、既に学校教員のなかには、カウンセリングやファミリーソーシャルワーク的な活動をごく普通の業務として淡々とされてきた先生方が大勢おられます。日本では教育の専門家である教員が放課後もクラブ活動のコーチであり、あるときは心理カウンセラーであり、あるときはキャリアカウンセラーであり、またあるときはソーシャルワーカーでもあり、事務方もこなすのがあたりまえなのかもしれません（また、それを十分こなせるマルチ先生が大勢おられます）。しかし、近年は、「教育サービス」へのニーズの多様化により、なかには無理難題な要求をされる保護者やしつけと称した児童虐待、ネグレクト、経済的貧困、多様な家族構成など子どもと家族を取り巻く状況、そして学校や教員に対する保護者や子どもたちの意識にこれまでとは異なった大きな変化が起きてきています。そのようななかで、多忙がゆえに、あるいは対人援助のトレーニングを受けていないために先生方が子どもや保護者の現象面に振り回されることが少なくないのではと思います。このとき先生方は「困り感」や「何とかならないのか」という思いを強く持たれます。そのとき、「なぜか」や「理解しよう」の視点が失われがちになります。「なぜか」や「理解しよう」と立ちどまって考える時間やゆとりがありません。

学校に入った

臨床家たちの視点

学校に入ったスクールカウンセラーやソ

ーシャルワーカーは教育のプロの教員とはまた異なった視点で、子どもや保護者の現象面を捉えて「見立て」、「考え」ます。そして、関係機関との橋渡し役も行います。先にも述べましたが、学校にいと「今、ここでおこっていることを何とか打開したい。」と思います。たとえば、児童虐待が疑われる事例等について、学校は「この子どもは保護してもらえない」「施設にいれるべき」と初めから筋書きを通そうとします。それは対応の限界性からの発想です。施設でも同じです。もうこんな子はうちで見るのは難しいと。しかし、ことはそう簡単に動かない。そうすると、児童相談所の動きが実に歯がゆく感じる場合があります。両者の間にいと学校や施設の切羽詰まった臨場感と、児童相談所の客観的対応との温度差を感じるものが少なくありません。学校にしてみると「結局、児童相談所は何もしてくれなかった。」となるわけです。私は学校、児童相談所、施設それぞれの場で勤め機関連携の場面で感じたことは、「援助の局面において、関係機関に対する児童相談所の説明が足りない」ということです。一方、学校は、児童相談所など福祉専門機関とテーブルをひとつにし、ケース会議を行うに際して「子どもや保護者に対する見立てが十分ではない」ということです。これらの課題に、スクールカウンセラーやソーシャルワーカーが果たせる役割は少ないと思います。

ポストモダンな 学びのスケッチ

(3)

繋がりの中で見えてくるもの

北村真也+中村正

これは筆者である北村がたまたま大学院に学び、そこでたまたま指導教員であった中村先生に出会ってしまったことで描き始められた終わることのない学びのスケッチである。論文課題を抱えていた筆者は、毎週のように中村先生と2時間の対話の時間を重ねていた。それはいつの時もほぼ正確なリズムをそれぞれの生活世界の中に刻むかたちで行われた。金曜日の夜、場所は衣笠キャンパスの研究室もしくは朱雀キャンパスのカフェ。そしてこの対話の時間は、いつしかそれぞれの生活世界全体にある特有の意味を構成することになっていった。

この感覚は、実に不思議な感覚だった。そもそもこの対話は、論文指導の一環であるオフィスアワーという名目で始まった。それは学生である筆者が、指導教員である中村先生から何らかのアドバイスを受けるためのものであった。しかしこの対話が「指導」というフレームを超えるのに時間はかからなかった。筆者のための指導が、二人にとっての学びの時間にとって代わったのである。ここで学びは、ライブである。W.ベンヤミン流に言えばまさに「アウラ」なのである。出会い頭に何か生まれ続けていくような世界。この場のこの瞬間にしか生まれ得ない気づき、変容、そして学び。私の学びと中村先生の学びの輪郭が解け始め、共有された学びになり、その学びがこの対話の場を超えてそれぞれの生活世界に溶けだし、そこに変容を生じさせていく。そんな過程が、特有の意味世界を構築するのだ。そんなわけで、今日もまた二人の学びの時間が重ねられていく。それは決して答えの出ない学びであり、予定調和でない学びの世界。しかし、決して閉じることのない開かれた学びの世界。そんな世界を少しでも感じていただければ幸いである。

エピソード

私は京都府主催の講演会で精神科医の斎藤環さんと一緒に話をする機会を持ちました。その中で斎藤さんのコトバを私は取り上げました。今回の先生との対話は、そのテーマから始まりました。

コミュニケーションの機会が増えれば増えるほど、人と人との関係性は薄くなっていく。そして、関係性を築いていくのは 生身性 でしかない

「今、北村さんが言った“コミュニケーションが増えると、関係性が薄くなる”って話だけど、現場のリアリティー、一緒に過ごしている雰囲気とかね、においとかが、身体の表情とか、そんなものを加味していくと「つながりあう」というコトバが、どう見えるかやね。「つながりあう」というコトバは、いろんな多義性を持っているので...、身体

話 ってるでしょう。とても日本語的かもしれないけれど、これってとても共感的ですよ。つながりあう っ てコトバは、これとどう違うのか？こんなのが、次のエピソードの足がかりになるかもね」

「あの私が書いた中に『話がつうじない』ってエピソードがあるでしょ、エピソード 39、これ読んでみてください」

「K君のこれね。北村さんは フレームの違い と表現してますよね。でももっとコトバがほしい。これきっと、K君との関係がこれからも展開していくでしょうから、その中で北村さんのコトバもどんどん変わっていくと思いま すよ。どこかで フレーム というコトバを使わなくなるかもしれない」

「そう言われれば、この フレーム というコトバも最初は使ってなかったように思います。今回書いてきた 5つ のエピソードには、この フレーム というコトバがよく出てくる。きっと私は、今、この フレーム というコト バにフォーカスがあるのでしょうか？」

「何が フレーム として浮上したんですか？」

「アスペルガーのM君のこととか、ひとりであることが好きというY子ちゃんのこととか...、それが私の目の前の こととしてあったんですよ。要するに...」

「そことシンクロしているわけだ」

「そうです。彼らとの対話を通して、“わからない、理解できないから問題だ”って考え方が、とても身勝手なこ とだと思えるようになっていったんです。このY子ちゃんのことでもそうですけれど、私がお子さんを問題の子として見な かったことで、その子が話をはじめますよ。そしてその子が話し始めることで、私は聞こえるようになっていくん ですよ」

「それ書いてある？今の言い方とてもよかったです...」

「書きましたよ。エピソード 36 と 38 ですね。つながってるんですよ」

今回書いたエピソード 35 40、そこに登場する内容は、子どもたちのことであったり、保護者のことであ ったり、アウラの先生のことであったり、その対象、そして内容は全然違うものでしたが、それらを買 くものとして、私がそこにいるのです。この時の私の頭の中には、「フレームとは何か」という省察がメタ レベルで常に機能していたのかもしれませんが。私の視野に立つと、この命題のもと次から次へといろんな 出来事が起こってきたのかもしれませんが。あるいは、私がそれらの出来事をこの命題に基づきながら編集 していったのかもしれませんが。そして私の新たな考察は、再び現場の中に返されていく。そうしてこれら のエピソードは成り立っているのかもしれませんが。

「北村さんは、アウラの卒業生まで面倒みてるんですか？それに、うちの大学の学生まで指導していただけるみたい いで...」

「いや、そんな面倒みているって、そんな感じでもないんです。話していると、歯がゆい部分があって...」

「でもいいよね、そうして卒業生たちとかかわりがあるって」

「彼らは知ってるでしょ、塾長が大学院で研究活動をやってるって」

「ええ、だってよく話しますもん。でもね、エピソードにも書いたんですけど、大学の公務員講座、年間かなりの 時間があるでしょ。大学に入学してまた安直な受験勉強をする。これって何なんですか？大学って何なんですか、 って思うわけですよ」

「確かに...、難しいんですよ、我々も。一応私学は就職の面倒見がいいということになってるからね。就職の面倒 見がいいというのは、本来の意味での キャリア教育 を埋め込まないあかんのですが、まだそのモデルがないので、

どうしても受験ノウハウの獲得のような安直な方向に流れてしまうんだよ。でもね、しばらく 空白の数年 が続くと思うよ。就職状況が厳しいからね。逆にそうして流れてしまう、大学も結果としてそれに加担してしまうその中で魂が入らない。動機が分からないというか、何のために公務員になりたいのか、そういうものが入らないままの状態です。そうなるとうっ面だけになっちゃうからね。結果として社会にとっても良くない」

「絶対そう思うけどなあ...」

「いや、これはひとえに私の責任なんだよ。教学担当としての...」

「だから、何とかしようと思ってるんでしょ？」

「そうですねですよ」

私がエピソードで取り上げたK先生の話、これを元にしてこの対話が始まりました。私はK先生が大学に入学してからも、公務員試験受験のために断片的な知識を習得するような学びの姿勢に強い違和感を感じるとともに、「大学っていったい何なのか」という疑問を抱きます。社会が厳しくなればなるほど学生たちも大学も安直な方向に進んでいこうとする現実を大学の運営者である中村先生につきつきます。先生は、そんな私の指摘を真摯に受け止めながらも、現実の葛藤の断片を対話の中で表現するのです。つまりこの場面においては、アウラと大学という異なる場を運営する立場にある二人が、その当事者として共有された課題を見つめるのです。

「私は、書いてて思うんですけど、エピソードの題材はいっぱいあるんです。いろんな登場人物が入れ替わり立ち替わりそこに登場するんです。でもね、私が考えていることは、とてもシンプルなんです。中村先生もいろんな話をされますけど、その話を通して伝えようとしていること、これもとてもシンプルなように思うんです。たとえば「さっきの話の中にあつた“魂が入ってない”なんて表現、これって先生の中心に近いメッセージだと思うんです。これを聞きとる力、あるいはこれを語る力、そんなものが、今の学生たちに最も必要だと思うんです。でも、今の教育は、その反対。断片化された情報をまだ効率よく習得させることを目指しているように私には思えるんです。これでは、学習者の中にシンプルなメッセージがいつまでたっても構築されないように思うんです」

「北村さんの言う“シンプルなメッセージ”って何だろう？」

「たぶん、階層的な思考の奥にあるものかもしれません。そう、そこには、階層性があるんです。幾層もある階層が...。そしてこの階層は他者との出会い、つながりあいの中で構成されていく、その表面にはコトバであるとか、行動であるとか、具体がある。奥の階層へ行けばいくほど、目に見えなくなる。その目に見えないところにうっすら輪郭のように感じられるもの、それがその人のシンプルなメッセージかもしれない。でもこのシンプルなメッセージも、固定されたものじゃない。その輪郭は、絶えずアメーバのように揺らいでいる、でも揺らぎながらもある形を表現する。そこを理解できないといけないうように思うんです」

「それ書いてくださいね。番外編に...」

「でも、そう思いませんか？これって、とても大事なことだと思うんです。私は フレーム という表現をさっきから使ってきましたが、他者とつながっていくためには、そのフレームをどんどん可変しないとイケない。チューニングです。これ言い表現かも...、チューニングができるだけの階層性があること、可変性があること、これ大事ですね。この条件がそろえば、他者とつながることができる。そしてつながれば、また新しい層が形成される。こうして、どんどん層が増えていくわけですよ。無限に増えていくのかもしれない。でも、それらは決してバラバラじゃない、私の中で、いくつかのフレームを束ねるフレームが新しく構成される。そこには何らかの一貫性がある。用意された一貫性ではなく、そこに一貫性があることに気づく。ひょっとすると、この一貫性が 私自身 なのかもしれない。私が、私に気づく瞬間。そして、この一貫性が、シンプルなメッセージなのかも知れません」

「そうかもしれませんね」

「きっとそうなんです。他者とつながるためフレームを変えていく、チューニングするためには足場がいるんです。そしてこの一貫性が、私の足場になる。だから、どんな人とも、所属している領域が違って対話ができるし、つながれる」

「どこが違うんでしょうね。北村さんのようにできる人とそうでない人...」

「先生は、できるでしょ」

「私は“多動”だから、多動だからできるんですよ。広いから、注意散漫だから...」

「先生は、私も多動だと言ってましたね。仲間ですね」

「まあ、“多動”というメタファーで表現されるもの、“縁（ふち）”、絶えず何かをずらしておかないと...、中心にいて同じ所で凝り固まりたくないんですよ。絶えず斬新な発想がほしい。そのためには“縁（ふち）”に行かないといけない。“縁（ふち）”には“縁（えん）”があるわけだから、なにかつながっていく。中心にいない、“脱中心”。自分を“異化してくれる”ものを絶えず求めている」

「いろいろコトバが出てきましたね。メモしておいてください(笑)」

「何、言ってるんですか(笑)。“多動”は広がりがあるから、その“縁（ふち）”に出会いが生まれるんですね」

「まあ“多動”と言ってるけど、私なりの方針がそこにあるんですよ。“異化”に向かうための方針。むやみやたらと動いているわけじゃない。ピンボールマシンで言うと、500点の場所がわかる。10点ではあまり意味がない。どこに行けば相手とぶつかって火花が出るのか、それをいつも考えている。それは自分を異化してくれるものだから...」

先生との対話は、どんどん深みに向かって進んでいきます。私が投げかけた“シンプルなメッセージ”、それをめぐって、私自身が語りを始めます。その語りにもるで感応するかのように、先生の語りが始まり、それは二人の間のつながりをより太く紡いでいきます。つまりここでは私と先生は、同じ命題についてそれぞれの語りを持って表現しているのです。二人の対話はさらに続きます。

「ということは、中村先生の根底には、自分を異化したい。私の表現で言えば自分を変容させたいという思いがあるんですね」

「いっしょです」

「何で異化したいんですか？」

「山岳部だったからです。山に登るといろんなものが見えてくる...。山岳部は文系なんです。ひたすら哲学クラブなんです。山に登ると“なんで山に登るのか”という問いに答えなくちゃならない。山に登りながら答えの出ないことを考える」

「自分を知りたいということですか？」

「そうとも言える。答えの出ることは、簡単なので、それはただやればいい。ただ身に付くだけなんで。答えの出ないことを考え続けるためにも、基礎体力、基礎学力がいる。でも先人たちはみんな考えてきたわけだから、勉強しなくちゃいけないと思った。こういう知の塊を 命題的知識 っていうんですが、「AはB」であるという知識は内面化するしかない。体系的にたくさんあるからね。ただ、命題的知識だけでなく 手続的知識 いうものもあるんです。その並べ方ね。応用の仕方、あるいは別の問題に転換する方法。やり方を内面化する。これはこれで鍛えないといけないですよ」

「今、私たちがやってみるみたいだね」

「そうそう」

「山岳部で鍛えられた手続的知識はね、まず短波放送を聴いて気象を理解する気象学的知識と草花の知識とか、インターハイに毎年出たので、それに勝つための知識、あるいは部員を獲得するための知識とか、そんなのね」

「そんなことで先生は鍛えられていったわけですね」

「そう、それを応用していくと、大学ではテキストに命題的知識があって、手続的知識としてはゼミだったり、インターンシップだったり、あるいは海外に出て行ったりとかそういう機会があるわけ。でもそれは体験だから、それを手続的知識として収めなければいけない」

「経験化のプロセスですね」

「だから、K先生なんかは、公務員試験をそんな風にしか見えないっていうのは、まだ知の体系が出来上がってないんだろうね。手っ取り早くつまみ食いしていくような、既存の知識の中で処理しようとするから、当然受験勉強のようにしか捉えられない。革命が起こってないんですよ。革命が…。学習革命が起こらないといけない。これを脱学習(Unlearn) っていうんですよ。古い学習の形態が変わっていかないといけない。そうしないと上塗りしていくだけ、自分のフレームの中に収めて公務員試験がやってくるだけ。学習革命が必要なんです。これを大学4年間の中でやっていかないといけない」

「そういう認識と言うのは、大学の教員間の中で共有化されているんですか？」

「されてない…」

「そうですね」

「それは以前もそんななかったんだけど、社会の中にそんな機会があったんですよ」

「学生運動だったり…」

「酒飲んで、人生を語り合ったりね」

「そう、それに以前は大学への進学率も低かったから、それなりの人間が集まってきた。でも今は大学も大衆化してきたしね。そういう社会装置もないしね。それを意識的にやらんといかん。それにまだ大学はおいついてない」

「なるほど、でもそんな状況だったら、教員を教育しないと…」

「それ、私の仕事なんですよ」

「という中で、例の 学習科学 とか 学び学 とか、私なりに理論武装していかないといけないんですよ。私なりに身につけないといけないんですよ。でも言ってることはそんなに難しくなくて、私自身が体現してきたことですからね」

「それは私も同じです」

「そうですね、だからアウラの森もきっとそういう側面ができあがっているんでしょうね。意図して作ったんですからね。何かそれは既存の学校に対するオルタナティブであったりするんでしょうね。学校でもなく家庭でもない、そういう場がそこにある。環境 と言ってしまうと抽象的すぎる。もう少し特定化していった方がいい。デザイン と言ってしまうと少し操作的になる。だから、本人たちが語る身体語って大事なんです」

先生の学びの世界の原点は、山岳部での体験にあったこと、それを体験にとどめず経験化していく過程の中で先生は自分自身の学びの型を構築し、大学にいったからもそれを応用させていったのかもしれない。私から見れば、先生の学びの型は実にダイアログ的です。ある特定の領域にとどまることなく、その縁を通して常に他の領域とつながりながら広がり、また統合されていく。しかも、このダイナミズムは常に学習者である先生自身を軸としておこっているように感じられました。モノログではなく、ダイアログ、対話的なつながりの中に成立する学びなのです。

「私は、生きていくことの証は、代謝をおこなうということだと思ふんです。それは、外の世界とのやり取りです。やり取りであるということは、モノローグ的な一方通行ではなく、ダイアログ的な対話なんです。人間の場合、それは物質にとどまらず、情報や感覚、あるいは心って言うてもいいかもしれんが、精神的なものでやり取りをするんです。そしてこれが、学ぶことの原点です。だから私にとっては、学ぶことは生きるということとイコールなんです。私がアウラを作ったのは、小さな子どもは好奇心に満ち満ちているのに、彼らが学校に入るととたんに学ぶことが強制されるもの、嫌なものに変わっていき、その好奇心が消えていく。この現実を何とかしたいと思ったからです。彼らの学びの認識をそれこそ覆したいわけですよ。学びは、自分自身と外の世界との統合であり、広がりであり、それは十分に好奇心を満たしうるものであるということを実感できる教育を想像したかったんです。でもK先生の学びは、そうやってないバラバラに分断された情報を、ただ効率よく記憶したり処理したりする範囲にとどまっている。それでは、好奇心を満たすことができないんですよ。せいぜいテストの結果とか受験に合格するとか、他者の評価を前提とした満足しかない。学んでそんなことじゃないんです」

「まあ、今までの求める人間像が、それでよかったのかもしれないなあ。でももう時代に合わなくなっている」

「かもわからないですね。そう思います」

「そういう時代の意識がそこにあるんだろうね。それがよく見えるんだろうね...ということも、書いてください。番外編に...。そうすることで読み手は北村さんの考えていることやっていることをよりよく理解するでしょうし、北村さん自身もアウラの森の主催者として、マイスターとして、よりよく出来上がっていくのかもしれない」

「それはそう思います。こうやってしゃべっていることそのことが、私のいでたちそのものを変えていっているんだと思います」

「単に外から来るようなものでもなく、元々北村さんが持つてるものだろうけど」

「でもこんな風には書きすすめると、どんどん深くなりますね。深くなればなるほどわくわくするじゃないですか」

「そうですよ。だからおもしろい。私はチャレンジアブルですから、課題が大きければ大きいほど、チャレンジアブルになっていくんですよ。私は困難とともに生きてるんですよ。それに職責上のこともありますしね。私のところに上がってくる問題は、課長や部長や次長で解決できなかったことばかりですから、常に困難なものばかりなんです。メタ的な視点がなければ、処理できないことばかりなんです」

「そうなんですよ。でもその大学の問題とここで私と対話していることは、どこかつながりがあるわけですね」

「もちろんそうですよ。単にフェーズの違いだけで、同じことでしょうね。私の中で一貫性がないとこれだけ多面的な仕事はできないですよ。“縁(ふち)”が好きなんです。絶えず自分を異化してくれるものしか興味をもたないからです。真ん中には、つながないんですよ。“縁(ふち)”には“縁(えん)”があるんですよ」

今日の対話がここで終了となりました。こんな風に対話を続けていけばいくほどに、私はより中村先生に出会っていったように思います。そしてそのことは同時に私がより私に出会っていくことなのかもしれません。先生との対話の場面で、私は私なりの学びを表現し、そこで表現された学びは、アウラの実践に影響をもたらす、それを記述したエピソードが再び先生との対話の媒介となります。この循環が、まるでらせん階段のように進行しているのかもしれません。

幼稚園の現場から

III

鶴谷主一

原町幼稚園(静岡県沼津市) 園長

■ 幼保一体化問題の報道は・・・

幼稚園と保育所を一体化して2013年度から順次「こども園(仮)」とする方針。皆さんも報道などでご存知かと思いますが、どんなイメージをお持ちでしょうか。

おおかたの報道では、

- ① 幼稚園は文部科学省、保育園は厚生労働省という縦割り行政の無駄や弊害を防ぐべきである。
- ② 待機児童増でキャパを増やすことに限界がある保育所、そして少子化で園児数減少の幼稚園。これを一緒にしちゃえば待機児童問題、幼稚園の経営問題も解決!
- ③ 保護者がそれぞれの事情で、好きな時間帯だけこどもを預けて働けるので、ライフワークバランスに応じた子育てを支援することができるようになる。
- ④ 働きたい母親を家庭から社会に出し、大いに働いてもらい、納税者を増やし国の税収をアップ。

⑤ NPOや企業などの参入を促進し、競争原理によって活性化し、経済成長と雇用を生み出し、おまけに淘汰により保育の質が向上していく。

主にはこのようなメリットが強調されており、幼稚園や保育園の現場が業界団体の既得利益を守る為に反対運動を起こしている。その反発に配慮したか、2010年11月16日の第3回幼保一体化ワーキングチームの報告では明らかにトーンダウン、現幼保を存続させるなどの譲歩案が盛り込まれた5つの案が提示された。

団体の圧力により幼保一体化が骨抜きにされる可能性も出てきて心配だ。(しっかりやってくれ!)

このような論調の中で、現場の人間は単に自分達の利益を守るために改革にブレーキをかける抵抗勢力のように言われています。幼稚園、保育園の現場は、なぜ強く反発しているのでしょうか。今回はこの問題についてレポートしたいと思います。

■幼稚園組織からの提言

政府は、今年の4月に新システムについて基本方針を出した。

すぐに反応した全日本私立幼稚園連合会は、「慎重に進めるべき」との立場から5つの提言を行っている。

まとめてみよう。

1 全てのこどもには、良質な教育を受ける権利がある。幼児期の教育環境は人が育つ上でもっとも重要な要素となる。教育に軸足を置いた国家戦略をすべきである。

2 全ての親は、子育てを通して人として成長する。親が子育てに一定の時間を割くことができる社会制度の充実が重要である。

3 認定子ども園を活用しやすくすることで、幼稚園からの自主的な移行を促進し、それぞれの地域事情に合った待機児童解消に向けた動きが活発になる。全国一律に制度を統一する必要はない。

4 幼稚園は地域の子育ての重要なインフラである。制度改革によって地域にとって必要な小規模園がなくなることは大変な損失である。OECD並みの教育投資を行い、健全な運営が保たれるような制度設計が必要。それが学校教育を支え、将来の日本を支える人材を育てることにつながる。

5 社会の中で、否応なく子どもが「保育に欠ける状態に追い込まれている家庭」、

親の人生選択の中で「保育に欠ける状態を選んでいる家庭」、「家庭での子育て」を大切にしている家庭」への支援を同一にすることは無理がある。親への目線ではなく子どもの育ちを考えた目線で公平な助成制度の確立が重要である。保育に欠ける場合であっても8時間を限度とし、教育・子育て・就労支援を改めて整備し、親子の時間を確保すべきである。

■進まなかった認定子ども園

いま改めて5つの提言を読み返してみると、とても大切なことを言っていると感じます。しかし、その頃の私たち幼稚園長の間では、まだまだ身に迫った問題ではなく「ホントにやるの？できるの？できっこないよ」と冷ややかな反応が大半だった。



旅芸人「のぼさん」園コンサート あそび歌がいっぱい

なぜなら2006（H18）年10月から、政府は「認定子ども園」制度を創設し、幼保一体化施設の推進を奨励してきたが、少子化に悩む過疎地の公立園や、野心的な私立園でわずかに実施されただけで、ほとんど普及しなかったからだ。受け入れられなかつ

た原因は、施設整備の条件は結構厳しいのに比べて補助金額が少ないことと、幼保それぞれの事務手続きが必要で、実質事務量が倍に増える煩雑さが敬遠されたのだ。数字をあげると平成22年4月現在の静岡県内の総幼稚園数520園中、認定はたったの5園しかない。

制度が始まった当初、私も園の保護者に「認定こども園は便利ですが、ウチの幼稚園がやるとしたら賛成ですか？」と聞いたことがある。

原町幼稚園は、幼保が同じ敷地内に建ち、園庭を共有し、私が幼稚園長になる前は妻の実母が両方の園長を兼ねていたことから、50年以上も幼保連携して保育を行ってきた。職員同士も仲が良く、施設や教具なども貸し借りする間柄だ。現在は私が幼稚園園長、妻が保育園副園長、妻の実母が保育園園長という典型的な親族経営で、我々の関係が良好ならば幼保の職員間も良好という状況を保っている。

こんな状況だから認定こども園に移行しようとするれば、ハードルは低い。しかしお母さん達は全員首を横に振った。「保育園でなく幼稚園に入れている」という親の意識も便利さとは別のところにあったのだ。

■急浮上！「こども園」構想

認定子ども園施行から約5年目に入った今年、にわかに熱気を帯びてきたのは残暑厳しい9月頃のことだった。いよいよ業を煮やしたか、民主党政権になって公約を守

るためか、一気に「認定」を取っ払い、国県の責任を放棄し、市町村お任せタイプの「こども園」に教育を投げてしまおうという暴挙に出てきたのだ。

どう暴挙なのか、次の記録を読んで現場とのギャップを感じてもらいたい。



「キャベツがキャッ！」みんなの目が集中！

●文部科学省との意見交換会

各地で文部科学省の説明会が行われはじめて、「静岡はまだか？どうなるんだ？」と少し気になり出したのが今年の夏。やっと9月21日に文科省、初等中等教育局幼児教育課 課長補佐という実務の中心にいる官僚さんを招いて「意見交換会」が開催された。

約2時間の意見交換会。文科省の課長補佐が気の毒になるくらい「具体的には何も決まっていないことがわかった」

ただ、政府が2011年1月に法案を提出して、それが国会を通れば「やる」ことだけははっきりしているという。

「何をどうやるというのだ！」

集まった代表50人の静岡の園長たちは啞然とするとともに怒り心頭だった。そこで出された主な質疑を紹介しよう。

○質問：現在、保育園には無い入園料、幼稚園でも園や地域により格差がある金額をどう設定するのか？

□回答：まさに今後の難しい検討課題である。持ち帰って検討する。

○質問：良質の保育を守る、質を高めるといって現状では不可能ではないか？長時間保育をすれば保育計画や準備の時間を圧迫する。現状に加えて長時間勤務を強いるのは無理である。

□回答：良質な保育は担保すべきことだ、持ち帰り検討させてもらう。



ステージにも乗せてもらってノリノリだよ♪

○質問：子どもの心の状態より、大人の都合だけで考えられているシステムではないか？システムだけで子どもは育たない。将来問題行動を起こす子どもがでたら遅い。

□回答：持ち帰って児童生徒課にも相談する。

○質問：株式会社も参入できることを危惧している。利益優先の会社が10年20年後に結果が出てくる教育の責任を負えるのか、利益が出なければすぐに撤退してしまうのではないか、その対策は？

□回答：株式会社は、利益が出なければ撤退するだろう、しかし教育はそれではない、参入審査基準を厳しくし、撤退にも規制をかけていくつもりだ。

○会場の声：「潰れました」という会社に、どうやって規制をかけるんでしょう？

○質問：幼稚園は学校教育法の位置づけになっているが「こども園」になると、どのような位置づけになるのか？

□回答：学校に位置づけされるか、福祉施設に位置づけされるのか、まだ分からない、学校教育法を改正してこども園になると、幼稚園も保育園もなくなるが、未定だ。

○質問：現在は県から認可されているのが学校法人立幼稚園だが、こども園は市町村が管轄することになるから、市町村の財政によって教育の質が左右されるのではないか？

□回答：実際、市町村から園にお金が行くことになるので、市町村の財政によって教育内容に優劣がつかない何か仕組みを考えなければならない、ただそこは

市町村の首長の考えが優先されることに…。

○会場の声：結局、国は責任を放棄して、市町村に丸投げってことかな。

○質問：給食については、幼稚園では外部委託で給食会社に依存しているが、自園に給食施設が必要なのか？必要なら給食室の整備に2～3千万かかると思うが、自腹か？

□回答：こども園という形にするなら調理室は必要になる。今後財政的に予算があれば何らかの補助はやっていかなければならないだろうが、まだ自園給食と決まったわけでは無い。

○質問：こども園に移行したくても、空き教室が無い園もあれば、経営が厳しく改装できない園もある。そもそも多様な保育形態を提供するといったときに、全国一律でこども園化する必要があるのか？

また、待機児童を解消するのであれば単純に保育園を増やせばよいのではないか。

□回答：今返答することが難しいので持ち帰って検討する。

○質問：今、課長補佐にお聞きしただけでも何も分からないことが山積なのに、とにかく来年国会を通し25年度から実施という。それでは混乱は必至だ。長い間培ってきた大事な子どもたちのシステ

ムを大きく変えるのであるから、急がないで十分検討して頂きたい。

□回答：皆様方に支障が無いようにやっていきたい。お金を減らしたら幼稚園さんについてこないと考える。拙速過ぎるという意見をどこでも聞くのだが、通常このようなものは、これまでは現場で、できるのか下から積み上げて検討していくのだが、今回は政府として大枠の方針が決まっているので、それに沿ってやっていかなければならないというのが第一義の考えである。それをやらなければならないのが私の仕事だ。

法案が国会で通るかどうかは別として、通ったとしても必ず移行措置として3～5年の期間を設けるので25年にスパッと切り替わることにはならない。

(以上、意見交換会の記録より)

いかがでしょうか、このやりとり。

たった3ヶ月ほど前のことですが、あと1ヶ月後には「やる」かどうか決めるという話なのです。最後に課長補佐もついに本音を話してくれましたが、「これならだいじょうぶ、やりましょう」というコンセンサスがとれてからやるのが普通で、このやり方は通常と違うのです。しかも幼稚園が誕生して約100年来培ってきた、こどもを育てる文化を大きく変えようというのです。

子どもの心を見ていない、という質問をしていた園長もいましたが、この根源的な問題については理念的なこと（悪く言えば

キレイゴト) しか議論されずに理念を実現させるための具体的な内容は空欄のまま、システムだけが論じられているのが現状なのです。

更に問題点を挙げますと、子育て新システムは、単に幼保を一体化して冒頭に書いたような目標を実現させるだけでなく、保育分野を国家の成長産業にしようという思惑があります。

保育分野に商売というパワーゲームを導入し、一般企業にも門戸を開き淘汰を進めれば、補助金で安穏と運営してきた保育業界も活性化し、質も上がるだろうと…。

安穏としてきたという点では、当てはまる場所もありますでしょう。その点は業界も多いに反省すべきだと思います。

■現場はいま

前出の全日本私立幼稚園連合会は10月26日、政府の「こども園」構想の輪郭が見えたところで、4月の提言をより強くした「緊急声明」を発表し、幼稚園廃止を前提とした幼保一体化に絶対反対の立場を明確にした。

保育園サイドも保育を守る全国実行委員会、日本保育推進連盟、社会福祉法人日本保育協会を主体とする菅直人総理大臣宛ての署名活動が11月中旬頃から急ピッチで始まっている。他の保育団体もあちこちで反対運動を活発に進めている。

その主張については、各団体のホームページなどをご覧頂ければ見ることができる

ので、私がくどくど書くのはやめておきます。



みんなで声をそろえて「ハイハイハイ♪」

私たち沼津市でも、遅まきながら現場からの声をあげようということで、動き出している。幼稚園、保育園がそれぞれに声をあげると業界団体の保身ととられてしまうため、幼保が連携して、子どもたちの健やかな育ちのために声をあげようということになりました。

私もその準備に追われているところです。

話はかわりますが、高齢者が家族から離れ、所属する組織の無い人々の孤独が「無縁社会」というネーミングで社会問題化している報道を見聞きします。それを地域のネットワーク構築や福祉の充実で補おうという動きがあります。これ自体は大切なことですが、もっと根本から考えることも必要だと思うのです。

人間の土台作りに携わる私からみると、病気にさせておいてあとから薬を処方するようにしか見えません。社会の絆の基本は

家族の絆です。親が子育てを外注すればするほど親子の絆は“か細く”なります。

たとえば“か細い絆”を持って成長した人が、高齢者などの孤独な人たちに寄り添い、フォローする福祉に、うまく携わることができるのでしょうか。また、逆に受ける立場になったときに、他人を信じ、絆を作り温かい交流をしていくことができるのでしょうか。

子育ては人の心を育てることであり、幼稚園、保育園は、家族以外の人間関係、社会との絆を作る第一歩の場所であります。

今の改革では、国が福祉への責任を放棄し、福祉をサービス化する介護保険制度を導入したことによる弊害と同じようなことが、保育・教育現場でも起こってくることは予想できるのです。

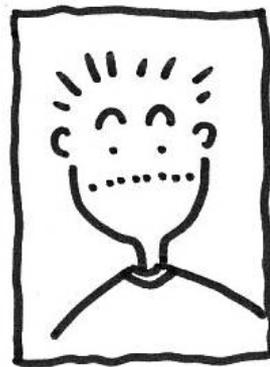
保育現場の混乱はストレートに子どもたちに影響を与えるでしょう、いくら保育者に気持ちがあっても、システムという大きな流れが変わって行く中では、踏みとどまれるのもわずかな時間です。

そうなる前に、現場の声を上げなくてはならない、声を上げられない子どもたちの代弁者としても私たちは声を大きくしていきます。

11月に入って、保育園の全国組織でも、反対のための署名活動が急遽始まりました。私たち沼津市でも、遅まきながら幼保が連携して勉強会を開き、反対の立場を表明するべく準備を進めているところです。

※写真と本文は直接関係ありません。今回は固い話だったので楽しい写真を入れてみました。

学校法人松濤学園 原町幼稚園
定員 200名 6クラス
幼稚園歴 27年（内園長歴 8年）
<http://www.haramachi-ki.jp>



ツルヤシュイチ

福祉系 対人援助職養成の 現場から

③

西川 友理

学歴差別

夕方、携帯電話に学生から電話が入りました。「せんせ～悔しい～」といきなりの泣き声。

——どうした、どうした。

この学生は専門学校生。某機関での社会福祉士相談援助実習の3日目が終了した帰り道、なんでも実習先職員の発言・行動に許せない所があるらしいのです。

「この事業の勉強は大学でやった？あ、やってないの。じゃあ専門学校でもやってないわね」

「〇〇大学のAさんにとって難しい課題なら、あなたにも難しいわね」

と、たまたま実習期間が重なった大学生を何かにつけて基準にし、“専門学校生には出

来ない”と決め付けられるとの事でした。

「…でも、私が知っている知識や、出来る課題も沢山あるんです。多分私の方があの大学生よりも知識があると思う。でも、『知ってる？わかる？』って聞いてもらえへんねんもん！」

そういつてわあわあと泣いています。

——うーん、そうか。

「それは悔しいねえ。なんにも落ち度がないのに、下に見られている感じ？」

「そう！大学か、専門学校かってだけで、まず差をつけられてる感じ！私、ちゃんと勉強してきたし、事前の用意もしたのに！」

「うん。ちゃんと勉強して、用意して、頑張ってたよね」

「そうだよ。なんで福祉の人間が学校で差別すんねん！信じられへんわ！」

——うん。そうか。

学歴差別をぶっ飛ばせ！

「納得いかんよな。…でもな、世の中に差別はあるよ。あって当たり前と思う。私もな、『何が差別で、何が区別か』まだわからへんけど。例えば、アメリカ人なら陽気で明るいだろう…とか、九州男児なら男らしいだろう…とか、江戸っ子なら気っ風がいいだろう…とか、これって差別か？」

「…差別っていうか、それは、そういうもん、みたいな…。文化的特色やないですか？」

「うん。当事者以外が言う文化的特色って、ある種勝手な思い込みイメージなんちゃうかなあと思う時がある。ソーシャルワークをする時にも、そういう事って時々ないか？ ケース事例を読んだ時、出身地や出身校、職業などを見た時に広がるイメージってあるやろ？」

「あっ、あります！」

「それと差別と何がどう違うの。舞台上立つヴィジュアル系バンドの長髪のボーカルが『本職は寺の住職なんだよねえ』と言った時に『おおう?!』と思うなんていうのも、その人の見た目と、自分の持つ“坊主”のイメージとのギャップに、びっくりするからやないの？」

「うーん」

「大事なのは、そういうイメージを持たれているという状況で、自分はどうか、ですよ」

「……」

「誰でも、初対面の時にイメージや思い込みを持って当たり前。でもその後の付き合いの中で、様々なことが見えてきて、初めて

その人の持つ能力や特色がきちんと理解できる。理解される」

「はい」

「あなたは今、実習が始まったばかり。その大学生よりも勉強してきていない。知識が乏しい。あまり賢くない。…と思われている。で、その状況であなたはどうするよ？」

「…頑張る。見直させたる。負けてないと思う」

「うん。私もそう思う。よし、じゃあ頑張れ」

後日、実習巡回指導に行くと、彼女は明るく話をしてくれました。積極的に質問し、実習指導担当者に話をするようにしたら、徐々に自分を見る周囲の目が変わり、とても高度な話をしてくださるようになったり、議論が出来るようになったとの事。件の大学生からも「あなたと話したら、自分が勉強足りてないって良くわかるわ…」と言われたとの事でした。

さりとて、学歴差別

果たしてこれでいいのか。

“学歴差別はある、あるという前提で、あなたがその差別を変えていきなさい”という指導は、その時点で学生を励ますためには良いけれど、無駄にしんどい思いをさせているだけなのではないのか、そこまで世間の風当たりが強くなくても良いのではないのか、と思うのです。

専門学校生の社会的評価は、大学生のそれと比べて、かなり低いように感じられます。例えば、実習の受け入れをお願いした際、「専門学校ですか？いまどきの専門学校生って、別にその専門の勉強をしたくて入

学したわけじゃないでしょ？大学に入る頭が無いけど、働くのも嫌だから、とりあえず専門学校に入学した子じゃないの？そんな子は実習に来てもらっても、困るんですよ」と、直接言われたこともあります。確かにおっしゃられるような学生も中にはいます。でも、「専門学校生」というだけで、どうしてそれ程までの全面否定に至るのか、あまりの言葉にその時は呆気にとられてしまいました。

過去に、専門学校からの実習生を受け入れた事で、何らかのかたちで苦しめられたことでもおありなのでしょうか。

学歴偏重主義 “大学神話”

実習受け入れ施設・機関の実習指導担当者は、概ね30～50代の方々です。35歳と仮定した場合、その方々が18歳の時は1993年、あの“ジュリアナ東京”が話題になった年です。この年、初めて大学・短大への進学率が40%台をマークしました。それ以前で30%を超えたのは1973年。この年に18歳だった人は、現在55歳の方々です。実習指導担当者の方々が学生の当時、大学受験は“勉強しなければ合格しない”ものでしたし、大学に進学出来る人は、18歳人口の中でも少数派でした。だからこそ、大学に合格した人は、能力が高く、努力をしてきた者として、周囲から認識されていたのでしょう。

少子化の影響もあり、大学全入時代と大きく報道されたのが2009年。その実、2000年頃からは、AO入試が一般的になってきたこともあり、経済的な問題がなく、大学・学部を選び好みさえしなければ、進学でき

る時代。いくつかの大学は必ずしも死に物狂いで勉強して入学する所とは言えない状況です。

大学・短大への進学率は、2005年度に50%を超え、2010年度には56.8%になっています。

大学生の中でも、志望した大学に入学し、社会福祉士相談援助実習に向けて真っ当に努力する学生もいれば、とりあえず大学に入学し、なんとなく実習に出向く学生もいます。

同じく、専門学校生にも、福祉職に就くために必死に頑張っている学生もいれば、なんとなくこの学校に入学しました、という学生もいます。

大学に進学することが容易くなってきたこの時代に“大学生は勉強が出来て、努力家が多い。専門学校生は勉強が出来ず、テキトーな奴が多い”という考え方は、いみじくも、学生が泣きながら訴えていた「なんで福祉の人間が学校で差別すんねん！」という状況なのではないでしょうか。

学歴偏重主義を超えて

専門学校は「専門職を養成する」ための学校。学生は学校が設定したカリキュラムに基づいて、最も適した時期に、必要と考えられる科目を受講しています。よって、専門学校生は、実習で必要とされる、一定の知識や技術を教育された状態で実習に臨んでいます。

大学は「学問する」ための場。学生は自分が必要と考える科目を、自分で選び履修します。よって、実習前には、学生個々の

履修状況が異なり、知識や技術の習得度にばらつきが生じています。実際は多くの大学が、社会福祉士の受験資格取得を希望する学生に対し、「この科目は〇年次に履修する事」と、最低限、履修すべき科目のガイドラインを提示しています。

実習前に必要な科目に関して、専門学校生は系統立てて学習するが、大学生は習得状況にばらつきがある。このように比較してみると、大学から受け入れた実習生の方が、専門学校から受け入れた実習生よりも「能力が高く、勉強してきている」とは言いきれないと思います。

いくつかの大学・専門学校で学生を指導してきましたが、実習指導内容をどの程度理解出来、専門知識をどのように活用出来るのかといった点は、結局の所、学生個々の能力によって差が出てきます。だからこそ、それぞれの学校に対するイメージに囚われず、“学生一人ひとりをよく見て、個々に見合った指導を行う事が、よりよい福祉人材を育てる事となる”と思うのです。

願わくば、福祉に携わる者として、実習先、実習指導担当者の方々も、同じような思いで受け入れた実習生（学生）達をご指導いただければ、大変嬉しく思います。

参考資料：

文部科学省『平成21年度学校基本調査』

我流子育て支援論 ～ 乳児期 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

妊娠も後期に入ると、母親は段々早く生まれて欲しいと思うようになる。実際は一人身のほうがずっと楽なのだが、うつ伏せで寝られない辛さ、おなかの重たさ、腰も痛くなるなどから、早く生んでしまいたい、身軽になりたいと思う。最近では男女の別を教えてくれる病院もあるようだが、最終的にはどちらでも良いから五体満足に生まれてくれればよいと思うのが一般的な親だろう。私自身も3人の子の親だが、毎回思うことは元気に生まれてくれればということであった。

出産の辛さは、何度経験しても痛いし苦しい。こればかりは、母親にしか分からない辛さであろう。一般的に母親は妊娠中、胎動を感じながら徐々に母親としての自覚を育ててくる。そして、最後に出産を通じて、母親となった感覚を持つことが出来る。一方父親は母親のお腹が

大きくなり、胎動を外から感じることにうらいしか出来ない。

出産前の支援として、父母に父、母になる意識を持ってもらおうと、何処の自治体でも母親教室や父親教室を盛んに実施しており、担当者は毎年様々な工夫を凝らし、初めての子育ての手助けをしている。

母親教室や父親教室に参加される方々はそもそも子育てに興味を持っていたり、学ぼうという気持ちがあると思いたいのだが、最近では、ファッションの一部、或いはゲーム感覚の様に教室に参加し、手技を学ぶということもある様に感じる。支援者としては、その場で、母親や父親になる人の様子を確認することも出来るので、こうした教室に参加してくれるとフォローしやすい。実際、教室での様子から、ずっと支援に乗っていくケースも

ある。

そのほか、様々な育児書や育児雑誌、祖父母から伝達されたものも含め、知識として得る手段は多い。むしろ情報過多の傾向があると言えよう。前章でも述べたとおり、育児の手本が自分の両親や兄弟等生身の人間である人より、育児書やネットと言う傾向が強い。育児書は平均的な内容を記載しており、個体差については、十分述べられていない。育児書どおりに育っていないとそれだけで母親たちは不安になってしまう時代である。うまく育児書を使う方法を伝授しなければならない。

育児書は一冊にする、ネットは見ない、分からないことがあったら聞く人を決めるなどのアドバイスをしている。不安な母親はそれでは満足しないのだろうが、とりあえずはその様に伝えておくことが必要だと思っている。

一方で、年齢相応の発達ということを理解していない母親が意外に多いことにも驚いている。母親からの質問の例であるが、「子どもに一人で片づけが出来るようにさせるにはどうしたらよいか？（1歳半）」「箸でご飯が食べられない（6ヶ月）」「おしっこを教えない。おむつがとれない。（10ヶ月）」などなど、一瞬どう答えようかと迷ってしまう質問に出会うことも増えた。頭ごなしに否定しても、自尊感情が低い母親達にはマイナスの効果しか生まない。発達の順序、年齢相応と言うことをゆっくり伝えていくしかない。

こうした状況から生まれたのがさまざまなグループ支援である。新米の母達を、一人一人支援していくより、グループで

支援した方が合理的であり、しかも教える形の講座より仲間感覚を生むことも出来、効果的である。

例えば、10代の母親たちを集めたヤングママのグループや、多胎の母親グループ、30代前後の母親のアラ・サー・グループ、最近増加傾向にある40代前後を集めたアラ・フォー・グループ、孤立しそうな母親、不安の強い母親、子どもを叩いてしまう母親などには、MCG（Mother&Child Group）など、ピア・カウンセリングの要素を持たせたグループ支援がある。もちろん、誰でもグループが良いと言うわけではない。個別支援の方が向いている場合は、育児相談で対応したりしている。グループが向かないケースとは、精神障害の状態が不安定だったり、発達障害や人格障害が疑われ、客観視ができず、他者攻撃が激しいなど自己中心的で場に良い影響を与えない、或いは場の雰囲気崩すとされるケースである。

子どもを育てる上での支援は、このほかにも、児童相談所はじめ、子育て支援センター、子育てサークル、子育てサロン、幼稚園や保育所での地域開放等による支援、様々な電話相談など、山のようにあるが、在り過ぎも又問題になる。

あちこちで相談してしまう不安の強い、自尊感情の低い母親は、助言がばらばらになることで余計不安になり、カウンセリングに飛び込んで来る。そんな母親達には、グループを紹介したり、相談する場所を一箇所にするなどの調整をし、母親本人の原家族の問題から始めて母親自身を育てることに時間を掛けることになる。

また、母親自身や子どもにさまざまな病名を付けてくるケースもある。「ネットで調べた結果自分は〇〇だ」「この子は××だ」と言い張る。〇〇や××の情報には、誰もが持っている傾向も含まれていたりする。

ここ20年、よく聞くようになったアスペルガー症候群もその診断基準には多くの人に見られる傾向が含まれている。人と接することが苦手、空気が読めないなど。高校のスクールカウンセリングをしていると、相談に来る子の殆どが、「人と接することが苦手」だったり、友達から「空気が読めない」と言われていたりする。だからと言ってこの子達が皆アスペルガー症候群なわけではない。ADHDでも同様である。1歳半から2歳半にかけては、言葉も未熟で、動きが激しく、「制止が効かない」などはどんな子にもある程度見られる。しかし、よく分かっていない母親達はそれをすべてADHDとってしまう。

ここには、マスコミの弊害があると思う。何でも報道すればよいと言うものではない。もちろんネットの問題もある。情報は何でも得られる時代だからこそその問題である。

アスペルガー症候群やADHDという障害名が出来たのは、もうずっと前のことである。ネットやマスコミで知らされなければ、殆どの親はわが子や自分にそんな障害名をつけることは無かっただろう。病気や障害については、知れば知るほど不安を呼ぶということをマスコミは抑えておくべきではないかと思うのである。

世の中何が正しくて何が間違っている

のかも曖昧になりつつある。子育ての指針が分かりづらくなっても仕方ない。もっと情報を制限し、母親達が右往左往しなくて済むような支援を構築しなければならない。そのための視点がいくつかある。

一つ目は「見過ぎ」をどうするかと言う視点である。

私が講座でよく言う言葉は、「適当、ほどほど、好い加減」である。昔の子育てが良かったと言うわけではないが、子どもに集中しすぎている現代の子育ては、親にとっても子どもにとってもストレスフルではないかと思う。

片目瞑る位でちょうど良い。四六時中子どもの一挙手一投足を見ていたら、気になることを探しているようなものである。

昔は洗濯も、掃除も、料理も、自動の部分で殆ど無かったから、子どもは負ぶって家事をこなしていた。背中で子どもは安心して寝たり、声をかせば母親がそれに応えてくれたり、密接だったが、顔が見えていたかと言うと後ろにいたので見えない。機嫌が悪ければ泣くので、それと分かる程度である。

しかし、ベビーベッドや、ベビーチェアにいる子、抱っこしている子の顔は良く見える。ちょっとした変化に一喜一憂してしまうのは無理のないことだろう。その反応に子どもも反応してしまう。子どもは余計神経質になってしまうだろう。見ないようにするのは見るようにすることよりずっと難しい。

二つ目はどうしたら父母を含む周囲の大人がちゃんと大人になるのかと言う視点である。

よくある相談に、「夜泣きがひどい」と言うのがある。夜泣きは近所迷惑だし、寝ている父親にも気を使うし、母親としては本当に困ってしまう問題である。しかし、病気が無く、どこか痛いとかきついというような所も無く、暑すぎず、寒すぎず、おしめもきれいでお腹も一杯であれば、放って置いても大抵は大丈夫である。子どもは泣くことも運動のひとつであり、夜中であろうが泣くことは仕方ないと周囲も思ってくれると分かっているれば、母親もそれほど神経質にならず、悪循環に陥ることは無いだろう。しかし、自己中心的な近所さんは「うるさい！」と文句を言ってくるし、同様に自己中心的な父親も「何とかしろ！」と母親を責める。父親も子どもの製造責任者であり、仕事を理由に自分だけがのうのうと寝ていて良いと言うことにはならない。子どものことは父母一緒に負担すべきことであろう。母親が精神的に安定していれば、夜泣きも自然に治まるものであろう。「赤ちゃんなんだから仕方ない。我慢しよう。」と思える大人、許容量のある大人が少なくなったことに問題があるとも言えよう。

夜泣きの次に乳幼児期に一番多い相談は、2歳前後の「いやいや期」の対応である。言葉が少し話せて、何でも自分でやろうとするし、興味も広がり、いじって欲しくないものを目ざとく見つけて片端からいたずらする時期である。夜泣き同様、この時期はどんな子も大変なのだと言うことを周囲の大人も母親たちも知っていれば、もう少し気持ちが楽になると思うのだが、理解の無い夫や周囲の大人たちの目を気にしすぎて、子どもをヒ

ステリックに怒鳴りつけたり、叩いたりする母親に度々出会う。また、母親自身の思い通りにならないからと怒鳴ったり叩いたりする母親にも出会う。どちらの場合でも、子どもにとっては同じに見えるだろう。

親が大人になりきれて居ないばかりではなく、周囲の大人も大人になりきれて居ないから、子育て中の母親たちが追い詰められるのではないか。子どもだらけの世界で、乳幼児が育つのは難しいだろう。

三つ目が世代間境界の視点である。

少子高齢化のこの時代、子どもが生まれると、その子の親、祖父母、場合によっては曾祖父母まで元気だったりする。それぞれが小金もちで、子どもはこの上なく恵まれ、何もかもあって当たり前のような生活を送っていたりする。その様な状態であるから、乳児の時期はさぞ愛情に恵まれてと思いがちだが、祖父母の口出し、手出しに自信を失くした母親がカウンセリングに訪れる。「祖父母が子どもを連れて行ってしまふ。自分の子育てを否定される。」と泣いているのである。これでは母子の愛着形成に歪みが生じてしまふ。自分の上の子を祖父母に取られ、下の子二人を連れて実家を出た母親に出会ったが、実家にずっといたことがいけなかったと今更ながら後悔していた。

祖父母が比較的元気なことも、問題を複雑にしているのではないかと思う。現役で働いている祖父母は、金銭的にも体力的にも力を持っている。お金の流入があれば、口出しもある。祖父母が強すぎることで、父母の力が弱まり、父母の自立が妨げられる。その結果として、子育て

でも阻害されてしまうのではないか。

「老いては子に従い」と言う言葉は死語なのか？「良かれと思って・・・」の行動が良い結果を招いたことはあまり無い。父母が子どもとの家庭を、悩みながら、相談しながら営んでいくことが、子どもの成長には大切だと思う。祖父母と同居であっても、世代間にきちんと境界が設けられていることが必要であろう。

そして四つ目、虚像と情報の影響をどうするかという視点がある。

前述のとおり、昔は、手動の時代で、家事そのものにとっても手をとられ、子育てに十分時間を掛けられなかっただけでなく、母親自身が自分のことに手をかけられる時間など殆どなかった。私の母親も朝起きてから寝るまで、バタバタと過ごしていたし、自分自身もそのような子育てだった。何処の家でも同じ状況なので、誰も不満に思うこともなく、そうした生活を通じ親も子も忍耐強さ、我慢強さが育っていたと思う。

しかし、今の子育ては、家によって差があるものの、何でも欲しいものがローンで手に入るので、車も家も家具も家電も良い物を揃えている。しかも、もっときれいな家、素敵な家具、可愛い子どもに素敵なだんなさん、幸せ一杯の家族の虚像がテレビを通じて常に目の前で展開されているのである。ちゃぶ台をひっくり返すような家ではないし、髪振り乱して子育てをしている母親像も流れては居ない。

こうした虚像を毎日見ていれば、自分の子育て、自分の生活に不満を感じるようになっていても無理はない。「こんな筈では・・・」「夫が悪い」「この子が悪い」

「私のやり方が悪い」・・・そんな思いが母親たちの心に生まれてくる。そして火に油を注ぐようなマスコミの報道。「片付けられない女性」「虐待」「ゴミ屋敷」「発達障害」「精神障害」携帯ブログの書き込みにも、子育ての悩みが並ぶ。

一方で子育てより自分の楽しみを優先している親たち、子どもを自分の楽しみに巻き込んでいる親たちの何と多いことか。それもこれもマスコミやブログから得た情報を元に、自分もこうしても良いと思って実行する。知らなければやらなかったことが多いのではないかと思うのである。

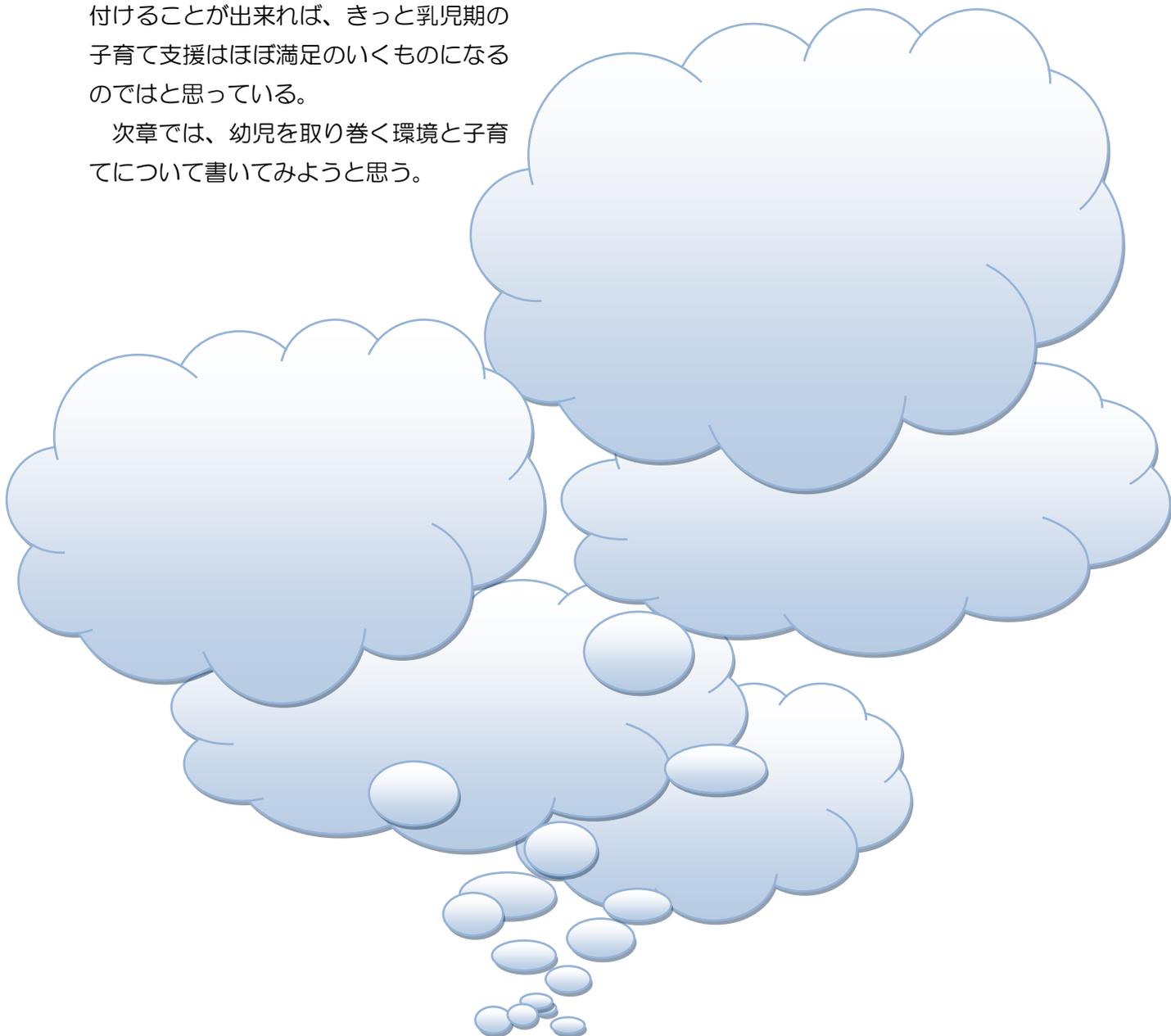
最近見かけて気になるのが、生まれて間もない子どもを連れ歩くことである。妊婦の床上げは産後1ヶ月。検診も1ヶ月。病院受診は仕方ないにしても、1ヶ月に満たない乳児を買い物やタバコの煙がもうもうとした飲み屋などに連れて行くのはどうか？できれば、3ヶ月は買い物など人ごみに連れて行かないほうが良いと思うのは老婆心か。ましてや飲み屋など、言語道断。しかし、病院に風邪をひいて入院する新生児をみるとそう思わずにはいられない。

また、救急電話に「体温計は耳で測るのとわきの下で測るのとどっちが良いのか？」と尋ねてくる母親は、知らないことを誰にも聞かないで滅茶苦茶な事をしてしまう母親よりは良いのかもしれないが、体温計が種類しかなければ迷わない筈である。なまじ物があふれ、種類が多すぎると悩むのは、誰でも同じであろう。もう少し、世の中が単純だったら、こんなに母親たちは悩まないで済むのではと思う。必要な情報と蛇足的情報を分

けて情報の渦から母親たちを引き上げてあげること我々支援者の務めなのかもしれない。

母親教室や父親教室、育児についての講演会、様々なグループ支援や個別支援を通じて、子育ては元々楽なものではないという認識を持たせ、生まれた子を育てるスキルを伝えていながら、「子どもを程ほどに見るようになれる」「子どもだから仕方ないと思える」「祖父母との境界を引ける」「情報を整理できる」力を父母に付けることが出来れば、きっと乳児期の子育て支援はほぼ満足のいくものになるのではと思っている。

次章では、幼児を取り巻く環境と子育てについて書いてみようと思う。



不妊治療現場の過去・現在・未来

連載3

～変化するもの・しないもの～

荒木 晃子

2010年のトピックス

本年度ノーベル医学生理学賞が、1978年世界初の体外受精による妊娠出産を成功させた、ロバート・エドワーズ氏（ケンブリッジ大学教授）に贈られた。同年、世界中が注目する中誕生した体外受精児ルイズ・ブラウンは「試験管ベビー」と呼ばれたが、のちに成人し、2006年には、自然に健康な男の子を出産した事実が確認されている。ノーベル賞は、ルイズの誕生から32年後の受賞であった。

報道された出生

前号から登場した、生殖革命の福音をきいた女性B子さんも、当時テレビ放映と新聞紙面で世界初の体外受精児ルイズ・ブラウン誕生のニュースを知ったという。1980年代といえば、一般家庭にインターネットが普及している現在とは違い、テレビ・ラジオ・新聞報道などのツールを

通して情報を入手する方法が一般的であった。その中、知人からの数少ないクチコミ情報や、書店に並ぶ専門書から不妊専門Yクリニックを知り、命がけで不妊治療を始めたというB子さんにとって、世界初の体外受精児誕生のニュースは、当時どう映ったのだろうか。たずねてみた。

「もちろん、うれしかったわよ！」躊躇することなく、即座に返事が返ってきた。「初めてニュースを聞いたときはまだ不妊に悩んでなかった頃だったから、単なるニュースでしかなかったけれど、子どもがほしいのになかなか妊娠しないって悩み始めてからは、私たちにとってビッグ・ニュースに変わった。だって、日本以外でも不妊を治療している夫婦がいる。不妊治療は世界中でやっていることなんだ。日本では不妊のことを、あまり大きな声では言えないけれど、海外ではもっと進んだ技術があって、自分たちはその最先端の医療を受けるんだ、って信じていたもの！私たち夫婦は、そうやって不妊を治療することに決めたんだから」

弾んだ声で、まるで楽しい思い出を語るかのように、Bさんは一息でそう言い切った。

「与える人」と「与えられる人」

「あ、そうだ…」一瞬、遠い記憶をたどるかのように視線を泳がせた後、彼女は再び、静かに言葉を選びながら語り続けた。

「そう、不妊で悩んでるのは自分たちだけじゃない。治療して子どもが産める最新の治療が海外にはもっとあるんだって、希望を感じたんだって。まだ、あきらめなくていいんだって。その頃はまだ、日本で体外受精はメジャーな治療法ではなくて、タイミング療法や人工授精、他にホルモン療法を繰り返すくらいしか治療法がなかったから。ああ、そういえば、通院中に主治医にたずねたことがあった。確か、日本で初めて体外受精で子どもが生まれたというニュースを知った後のことだった。いよいよ日本でも体外受精ができるようになったと思い、“先生、私も体外受精ができるんですか？”って質問したの。そう、その時、先生はにっこり笑って答えてくださった。“いま、H 大学病院(国立)でうちの若手医師が体外受精チームに入って研修中だから、彼が研修を終えれば、B 子さんが Y クリニック初の体外受精にチャレンジできるかもしれませんね。体外受精で出産第一号になりますか？”って。それを聞いたときは、うれしくて、うれしくて…。“その時はぜひお願いします”って頭を下げたことを思い出した」

話を聞いている自分の表情が硬くなって

いるのがわかる。B 子さんと主治医との会話を、私は理由もなく不愉快に感じていた。いや、不愉快な要因は、確かに存在した。20 年以上前に交わされたそのやり取りからは、なぜか医師と患者の会話とはかけ離れた医療場面が浮かんでくる。まるで、B 子さんが体外受精の治験を受けるために、医師に頭を下げている印象さえ受けた。「与える人」と「与えられる人」の関係というか、いずれにせよ、共に子どもの誕生を願い、ひとつの命をこの世に送り出す責任を負う人間同士の会話とは思えなかった。そのなかで、私がいつも話の合間に心掛ける相槌の回数も自然に減っていたと思う。できるだけ B 子さんには気づかれることのない様、目を伏し目がちにし、小さくうなずきながら話を聴き続けた。

負のスパイラル

「その日、早速帰宅した主人に報告したことも覚えてる。それ以降、二人して、これで絶対子どもができるね、もっと頑張ろうね、ってまるで合言葉になった。それまでもにも転院を含め、すでに、治療を始めてずいぶん時間がたっていたし、何度も失敗を繰り返すわで、手術費を含む入院・治療費も数百万円支払っていた私たち夫婦にとって、たとえそれがどんな情報であっても、子どもを産む希望につながることは、すべて福音に聞こえていたのね、きっとあの時は。そう…今思えば、治療の失敗を繰り返すうち、少しずつ自分を見失っていたのかもしれない…。今となれ

ば、どう考えても、私らしくないもの。本当は、毎月服薬を続けたホルモン剤や流産予防薬の副作用で自分の体調を崩したり、時には救急車で搬送されるほどに悪化することも何度かあったの。心配掛けるのが嫌で、主人や家族にはあまり言わなかったけど。でも、そんな時は、自分のおなかを縦にはしる手術の傷跡に手を当てて、ここまでしたんだから大丈夫！お金もたくさん使ったし、きっと子供が授かる、って自分を励ましながら頑張ってた。あ！ほら、前回お話したわよね？『妊娠シヤスクナルタメニオ腹ヲ切ツタ話』。でも、まあ、結局妊娠できなかつたんだから、意味なく身体に傷をつけただけだったんだけどね。う～ん…なぜ、あんなことができたのかなあ。あんなふうに思えたのか、今ではよくわからないのよ。まるで、治療すればするほど、深みにはまっていく感覚ていうか、麻痺するって表現がふさわしいかもしれない。次はきっと妊娠できるはず。これをやれば、絶対大丈夫、って、次第にやめられなくなる感じに近い。きっと、それほどまでに子どもが産みたかつたんだと思うけど。だって、一人子ども産んだつもりで手術をするんだ、って周りに明言していたから！お腹切っただけじゃ、子どもは生まれぬのにね～」

話し終わると同時に、彼女は聞こえないほどの小さい声で「ふふふ」と笑い、それから目を閉じ背筋を伸ばした。

「そうね、いま思うと、あの頃私は、自分であって自分でなかつたかもね！」

滑りだすように始まった静かな語りから、終盤はいつもの快活な B 子さんに戻っていた。最後に私の眼に焦点を合わせ、に

っこり笑い言葉を休めた。どうやら、彼女にとって、ノーベル賞を受賞した「世界初体外受精成功の報道」は、まさに情報入手が難しかったその当時、待ち望んでいた不妊治療の最新情報だったらしい。その数年後、日本国内でも体外受精成功症例の報道を聞いた彼女は、早速主治医へ体外受精を実施してほしい旨、自ら名乗りを上げたという。

ダブル・メッセージ

ここまで話し終えた B 子さんを前に思うことがあった。彼女の語りには、ダブル・メッセージがあった。“福音に子どもを産む希望を感じた”と語る一方で、“失敗を繰り返すなか少しずつ自分を見失っていた”とある。また、“頑張っていた自分”の対象に、“自分であって自分でなかつた”とも語っている。それはなぜか。確かめてみたい。喉元までこみあげたこの衝動を B 子さんに問うことはなかつた。その時、私の背中に生じたひやりとした感覚に、おもわず言葉をのみこんでしまったからだ。疑うことなく生殖医療技術の進化を福音として受け入れる B 子さん自身に危機を感じた瞬間だった。

実際に、この世界中の注目を集めた児の誕生までには、20 年以上に及び研究の試行錯誤を繰り返したという。その研究成果は、途中 1969 年 2 月にネイチャー誌に発表され、その後試験管ベビー誕生までは、激しいバッシングとセンセーショナルな報道が続いたという。ある神学者は、

その研究行為自体を神をもおそれぬ不遜なものと非難し、著名な科学者たちもこの研究に懸念を示した。そんな状況下で、人類初の体外受精児は誕生したのだ。この情報は、当時 B 子さんには届かなかったのだろうか。聞こえてきた福音の背後には、もうひとつのメッセージがあったのだ。もしかして、B さんの語りにも覚えたダブル・メッセージは、彼女が信じた福音の背後にあった“もう一つのメッセージ”へ対応するものだったのではないのか。

もう一度問うてみなければ。彼女を傷つけることなく、自然な対話の中に B さんの思いが溶けて流れるような空間を作り上げながら。そう思った。(次号に続く)

再び、「だれの福音か」を問う

前号で、B さんは「不妊治療は私たち夫婦にとって福音だった」とはっきりした口調で私に告げた。私は、「あなたにとっては、どうだったのですか？」と勇気を出してたずねたのだ。B さんは、「夫婦の福音は、私にとっても福音に決まっていますよ？」と軽く受け流すように答えていた。

私は一瞬言葉を失いそうになった。それはかつて、戦後を生きた A さんの語りと何かが重なっていたのだ。

では、なぜ、彼女は現在独身なのか。共に福音を聞いた夫婦がなぜ、今も夫婦ではないのか。私の疑念は全く払拭できなかった。これまで、例えどんなテーマで語っても、そこから派生する彼女の不妊に対する語りは、やはり、「私」から「夫婦」へと移行していくことに、今回私は気付いていた。そして、その背後に流れるもう一つの「私の語り」の存在も。その二つの側面は一致していない。

対人援助学の里程標

3

サトウタツヤ

(立命館大学)



メアリー・カバー・ジョーンズ.

行動療法の母

今回はメアリー・カバー・ジョーンズ。メアリー・ポピンズみたいでリズムの良い名前です。メアリー・カバー・ジョーンズ (Mary Cover Jones ; 1896 - 1987) は、Cover 家に生まれ、Mary という名を受けました。大学卒業後の 1919 年、ニューヨークで行われていた週末講座でワトソンの講義を受けました。この講義はワトソンの有名なアルバート坊やの実験も含んでいました。

ワトソンと共にこの実験を行い後に妻となるロザリー・レイナーはメアリーと同じ大学を出た友人でした。メアリーはこのワトソンの講義に触発されてコロンビア大学で修士号を得ることになります(1920)。同年結婚し、以後、メア

リー・カバー・ジョーンズと名乗ることになりました。

(図・若き日のメアリー)



トルで時に歴史のことも書くことにしたいと思
います。相変わらずのご愛顧を。

メアリーは1923年から、コロンビア大学ティ
ーチャーズ・カレッジ（教育学部）の教育研究
インスティテュートで研究助手となり、有名な
ピーター坊やの研究（Jones, 1924）を行うこと
になります。この時、既にアカデミックな世界か
らは引退を余儀なくされていたワトソンが指導
にあたりました。ワトソンはこの時期、コロン
ビア大学においてある財団の基金を得て児童研
究のコンサルタントとして所属していたのです
（Rutherford, 2001）。

さて、ピーターは白ウサギ恐怖であった。メ
アリーは様々な恐怖低減手続を用いていました
が、結果として最も有効だったのは「直接的条
件づけ」、つまり、白ウサギと共に食べ物を提
示することにより恐怖症が低減したと報告しま
した。ただしこの研究はそれほど注目されず、
ウォルピの精力的な活動のもと行動療法が体系
化されはじめた1960年代に注目を集めること
になります。1970年代にメアリーのことを「行
動療法の母」と呼びはじめたのもウォルピでし
た。

さて、1927年、メアリーは夫の異動に伴う形
で、Institute for Child Welfare at the University of
Californiaの研究助手となり、Oakland Growth
Study (OGS) colored the rest of career に従事し、
生涯発達心理学の発展にも力をそそぎました。
そして1987年にカリフォルニアで死去しまし
た。



さて、三回ほど「対人援助学の里程標」とい
うタイトルで歴史を書いてきましたが、今回で
終了します。歴史は書いている量のわりに調べ
る時間がかかりすぎるのでエッセイにします。

「対人援助学&心理学の縦横無尽」というタイ

文献

Jones, M.C. (1924). A laboratory study of fear:
The case of Peter. *Pedagogical Seminary*, 31,
308-315.

Rutherford, A. (2001). Introduction to "A
Laboratory Study of Fear: The Case of Peter" Mary
Cover Jones (1924).

<http://psychclassics.asu.edu/Jones/intro.htm>

小さな「怪獣たち」とのドラマセラピー

尾上 明代

3. 続く「いじめ」のドラマ

このマガジンでは、被虐待児たちへのドラマセラピー治療について、ある児童養護施設で継続的に行ったセッション事例を連載することにした。主に具体的なストーリーを読むことを通して、ドラマセラピーという「対人援助」法について知っていただければと考え、プロセスを詳述している。

A 児童養護施設で暮らしている 5 人の子どもたち（マツオ君、スギオ君、イチゴちゃん、リンゴちゃん、アンズちゃん）と開始したドラマセラピー。前号では、良いスタートとなった一回目のセッションについて書いた。

今回、報告する二～四回目でも、私の「いじめられ役」が続く展開になったが、ドラマという枠組み、そして役と現実の境界をはっきりつけることが、いかに重要であるかを改めて確認する良い機会となった。

二回目のセッション

リンゴが、いきなりぐずり始めた。お試しセッションのときに受けたおっとりした感じが消えており、ネガティブな気分を周

囲にたくさん投げかけていた。実家に帰って実母と会える機会がなくなっていること、また自分より年下の子どもが入所したことで、一緒に暮らす職員からの注目が、その子どもに行っている状況等が続いており、やはりその影響ではないかと施設職員の浩二さんから聞いた。

私とドラマをしたいというイチゴとどちらが先にやるかでけんかになったが、浩二さんが、「イチゴの方が一つ年上なんだから」とイチゴを説得した。「いつも年が一個上ってだけで、我慢させられるんだからッ！」と、イチゴは強い不満を訴えた。一人一人の子どもの訴えやリクエストを、それぞれ 100%受け入れてあげたいところだが、それはなかなか難しい。やはりできるだけ公平になるよう配慮しながら順番に対応していくしかない。もちろん、グループ内のコンフリクトはグループワークの重要な要素である。しかし、少なくとも連続セッション開始時期の今は、そこには焦点をあてないようにし、ドラマを演じ合う中で、良い相互関係を創るという目的を優先する。

リンゴ（母親役）と私（子ども役）

母親は、子どもを家の外に締め出し、無理やりレバー（彼らにとってレバーは、まじいものの代名詞である）を50コ食べさせながら、自分は家の中で桃を食べている。ドア越しに話している設定。

子ども： 桃とレバーじゃ、天国と地獄じゃん。

母： あんた、地獄に行けば。いいから食べる！

いじめている、という雰囲気が強く伝わってくる。家には絶対に入れてくれない。今日のリンゴには、大声で怒鳴るようなエネルギーはないのだが、その分、静かで冷たい。私は子ども役として、確実にいじめられていることを感じた。ドラマの雰囲気がシリアスになりすぎないようにコントロールしたかったので、少しユーモラスにしようと思い、子どもがレバーの数をごまかしながら食べる場面にしてみた。ところが母親は、間違いなく食べているかどうか、ちゃんと数えているので、まったく数をごまかせなかった。一皿に盛ってある50コを食べればよいと言ったのに、やっと食べ終わったら、またもう一皿、持ってきた。子どもがいよいよ食べていると、「1万円くれたら許す」などと言う。しかし、当然そんなお金は持っていないので、子どもは、随分たくさんレバーを食べる羽目になった。

イチゴ（母親役）と私（子ども役）

こちらもおやつにレバーを食べさせる母親だった。当然、前のドラマに影響されて、それを真似することがよく起こる。しかし、単に真似する目的だけではなく、私が望み通り「いじめられ役」を誠実にこな

すので、それを見て自分もやりたいと思ったのだろう。

子ども役が、気持ち悪がりながらも、けなげに一生懸命食べ終わると、イチゴは「あと10皿食べなさい！」と迫ってくる。しかし相手役の私は、リンゴのときよりも、嫌な気分にならなかった。今日のイチゴとのドラマには、劇遊びの雰囲気が少しあった。いじめていても、台詞にそれほど陰がない。つまりイチゴが、「いじめる」感情にどっぷりと支配されずに、そこから少し距離をとって、劇遊びとして楽しんでいる部分を感じたのだ。このようなことは、私自身が相手役を演じているからこそわかるのである。たとえば子ども同士に演じさせて第三者としてドラマを見ていてもわからないことが、「第三者」として関わると、確実に感じることもできるのである。

しかし、プロットの発展や変化はないままだった。そこで、ある程度イチゴが希望通り繰り返したな、と感じたところで一旦終了した。

マツオ（1300歳の怖いおじいさん役）と私（156歳の息子役）

役の設定そのものが、マツオがクリエイティブになってきたことを示している。ほんの短い間であったが、彼が老人になりきった瞬間があり、しかもそれが本当に「おじいさん」らしい上手な演技だったので、全員にとってもウケた。息子役がいじめられるというテーマは同じだったが、内容は、ポテトサラダに毛虫が入っていて、それを息子が食べさせられるというもので、レバーより進化していた！ しかも、ポテトサラダはレバーよりずっとおいしいものという認識をもつ彼が、息子を一瞬喜ばせ、結

局毛虫というレバーよりずっとひどいものを食べさせるという手の混んだストーリーラインも、創造的で良いと思う。

息子は、何とかいじめられることから逃れ、できれば父親と仲良くしたい意図で、「父さん、一緒にお酒でも飲もうよ！」と良い雰囲気誘ってみた。でもおじいさんは、「嫌だ」と舞台の端のイスのところにいるままで、寄ってこなかった。しかし、たとえ短い時間であっても、表面の装いと、その真意を二重に表現するような場面作り、老人の役を上手に演じるなど、演技を楽しみ始めたという感じがあり、前よりずっとドラマらしい様相を呈してきたことは進歩だと思う。

スギオ（おじさん役）と私（おじさんが道で拾った 26 歳の男の役）

マツオのドラマに刺激されたスギオも、さらにユニークな配役と筋書きを考えたようだ。とにかく、すべての設定は、本人が提案するものを評価なしにそのまま受け入れる。

男が、道端で拾われるところから開始した。

おじさん：持って帰ってやるよ。

男：嬉しい、いい人だね！（素直に感謝する）

おじさん：こき使ってやる。

やはり、そう来たか……。このあと、おじさんは、トイレの便器に頭をつっこんで来い、とか浩二さんにキスして来い、などと男に命令する。もちろん、ふりだけの演技であるが、男はきちんと従う。すると、「冷蔵庫の下のドアに入っているお酒飲んでいいよ。」と言うので、男がご褒美だと思って喜んで飲むと、「飲んだら死ぬよ。毒が

入ってるから。死んでよ！」という筋書きになった。当然、男は苦しんで死んだ。おじさんは、笑って見ている。このときにスギオから受けた感情は、誰かを殺したいほど憎んでいる、ということではなく、自分のリクエストを他者がその通りに聞いてくれた・自分を全面的に受け入れてくれたことへの愉快的気持ちだったように感じた。お試しセッションのときに「殺し合いをしたい！」と言ったE君（メルマガ第一号に掲載）からは、本気で人を殺したいような雰囲気が伝わってきたが、スギオからは感じられなかった。

男が死んですぐ、観客として見ていた他の子どもたちが、その場面にどやどや入ってきて、男は生き返るよう導かれた。「友情出演（?!）」のつもりなのか、「昔のお母さんとおじいちゃん」などが登場してきて、男は彼らに会うことになった。「観客たち」も、場面作りに一緒に心を配り始めたのである。これは、彼らの自発性が引き出されたことを示している。また、「おじさん」を信じてついて行った男を死なせなくなかった子どもが多かったとも言える。その後は混沌として、ドラマとしての結末で締めくくる形にはならない状態で終わったが、みんなが舞台に登場して男を生き返らせることで、満足した感情になったことが結末、という見方もできる。スギオとしては、「ドラマを演じる」というかたちになっていたという点で、かなり良いものを提供してくれたと思う。

その後、全員で強盗と探偵のドラマごっこを行ったが、前回の家族ドラマのような盛り上がりはなかった。それでも皆は、面白がってやっていたようだ。

「想像」の難しさとヒステリックな笑い

最後にクールダウンのための、想像の世界へ行く時間になる。部屋を暗くして床に寝て、「鳥になったつもりで好きなところに行つて。」という指示をする。でも、私がどこに行つたか聞いても皆ふざけて、前回同様、ウンコの世界、おちんちんの世界、としか答えなかった。そもそも、そのような想像の世界に行っていたとは感じられない返事の仕方だった。もし何かを想像していた子どもがいたとしても、それを皆には伝えなかった、ということかもしれない。それまでの経験から言うと、小学校のクラスでこのワークをすると、子どもたちの反応はとても良かった。しかしこの五人は、この後も「想像の世界に行く」ことが難しい時期が、長く続いた。

今回のセッションでは、彼らがまったく意味なく突然、キャー！！ギャー！！と奇声をあげて叫ぶことが多かった、というのが全体的な印象だ。また、特に女の子3人の笑い方が気になった。前回、イチゴとのドラマの中でも感じたが、今回は3人とも同じようなヒステリックな笑い方をしていた。子どもが、楽しい・面白いと感じたときに出す笑い声とは異質なものだった。いわゆる子ども向けの童話劇か何かで、(大人の俳優が演じる)悪役の魔女が、「いい気味っ！」という感じでヒヒヒヒヒッ！と甲高い声で笑うときのイメージにぴったりだった。そのような笑い声を、ドラマ以外のときにも何度も聞いた。純粹に、ただ楽しいという感情のこもった彼女たちの笑い声を聞いてみたいと思った。そのような笑い声は、その後10ヶ月経った頃ようやく

聞こえ始めることになるのだが、この時点では、そのような変化がいつ、どのように表れるのか、予測はできなかった。

ドラマという枠組みの効用

この日、私は事情で即座に帰らなければならず、皆でお菓子を食べる時間は、浩二さんに任せることにした。それを告げると「何でえ!？」と皆が不満な顔を見せたので驚く。特にマツオの、えーっ!?!? そんなの嫌だ!という表情が印象に残った。浩二さんは、施設の中でも特に人気のある職員で、子どもたちはとにかく彼のことが好きだ。お菓子の時間は、浩二さんが本を読むのを一緒に黙って聞くだけなので、私がいなくてもそれほどの違いはないと思っていたが、そうではなくて、彼らにとっては重要だったというのが、このときにわかり、私が個人として受け入れられていることを感じて嬉しく思った。

また、改めて「構造」としてのセッションの働きに注目させられた。これは、ドラマの中での私への「いじめの感情」が、しっかりドラマの中だけに収められていることを意味している。私たちは、この施設で、いわばセラピストとクライアントという「役」をそれぞれ演じているわけだが、さらにそこで創ったドラマという「劇中劇」で、「お母さんと子ども」「おじさんと若い男」などの「役」を演じていたのであり、その役を降りたあと、お菓子の時間には、またセラピストとクライアントに戻る、ということを経験する構造が、子どもたちにはっきり理解させていた、ということなのだ。

たとえどんなに私をいじめても、それは当然ドラマの中で自分の感情を表現して、

セラピストが演じている「役」の誰かをいじめているのであって、もちろんセラピストをいじめたいわけではない。子どもたちには、「セラピスト」とその彼女が演じている「役」が、はっきり分化・分離して見えている。そして、セッション終了後のお菓子の時間に、私を「セラピストの明代さん」として受け容れる素地ができはじめていたのだ。そのような二重構造が有効に働いているのは、ドラマセラピーとしては当然のことであるとはいえ、改めて発見できたことだった。

しかし、このような役の多重性という単純なことも、ドラマという枠組みがないセラピーでは、よりわかりにくい。逆に、枠組みをきちんと作ると、ドラマの「役」から降りたときに、はっきりとお互いにわかるのである。ここが非常に大切なポイントである。ドラマを使わないセラピーの場合、セラピーと非セラピー状態の境界線は、どのように引かれているのか。これは、言わばプレイ・ルームという場所とセラピーの時間で区切られていると考えられる。しかし、その境界線をクライアントが理解していない場合が多いと感じる。セラピストでさえ、境界があいまいになり、傷つくこともある。例えば子どもにプレイセラピーを行うため、プレイ・ルームに入ってセラピーの時間をともに過ごしているときは、セラピストとクライアントとして過ごすことになり、そこでの遊びの中でクライアントからセラピストへの「攻撃」があった場合、それは当然「セラピー内」でのことである。しかし、その時間が終わり、その部屋を出れば、クライアントの攻撃的な気分はすぐに収束するのだろうか。またセラピストも、「攻撃された」感情をすぐに切り替えられ

るのだろうか。子どもは、いったい誰への攻撃をしたという認識だったのだろうか。このようなとき、セラピーセッションの中でさらに「ドラマの役」という構造が使えると、そのような感情の分離が効果的に、眼に見える形で実行できる。通常発生する転移感情を、ドラマという特別の舞台、特別の時間の中の演技・行動の中に包みこむと同時にそこで大いに「劇的に」解放することが可能となる。もちろん、このことで通常のクライアント・セラピスト間の転移・逆転移がなくなるものではない。しかし、このようなドラマ手法では、(いじめや攻撃的感情の場合は特に) 転移感情の問題から解放された活動が大いにできる。また、その個別のドラマが終了し、役割解除をすれば、本来のセラピスト・クライアントの関係に短時間で戻ることが可能となり、セラピーをよりよく効果的に進めることができると考える。

以下は、マクマホン(2000)が、傷ついた子どもの収容施設で働くワーカーが遊びのセッションをする際の留意事項を述べたものである。

ワーカーは遊びのセッションの中で子どもの気迫に満ちた怒りの感情を受け止めるにつれ、その子への怒りやその子を罰したいという感情を恐れるようになっていたり、また報復したいと思ったりするかもしれない。あるいはワーカーは、自分自身と環境を子どもの怒りから守るのに忙しいので、その子が伝えようとしているものについてよく考えたりそれに反応したりする精神的な空間を作る機会がないかもしれない。犠牲者が迫害者になってしまうこともある。軽蔑

的な無関心さ、すなわち自分が感じている拒否というコミュニケーションのやり方でワーカーとやりとりする子どもがいる。こうした場合、ワーカーはむなしさ、無力感を感じ、悪影響を受けたとさえ感じる。(p.90)

このようなことは、セラピーの中で（もちろん、相手が大人であっても）起こるが、ドラマという枠組みを使うと効果的に対処できることを、理解していただけたと思う。マクマホン、このようなときの対処法について、次のように言う。

ワーカーが攻撃は個人的なものではなくて、自分を裏切ったと感じている親に対する子どもの感情の再現なのであるということを経験し、思いつくことが有効である。(p.90)

まったくその通りなのであるが、攻撃が激しくなると、どんなに頭でわかっている、セラピストといえども人間なので、感情的に難しいときがある。

英国のドラマセラピーのパイオニアであるスー・ジェニングズ(1990)は、次のように言う。

ドラマセラピーという方式では、その本質からして、劇の中の劇、さらにその中の劇、というように劇が多重に創り出される。別の言い方をすれば、さまざまな人の人生を抱える世界全体という演劇の場、その中のドラマセラピーグループという場、さらにその中のドラマ、という具合である。(p.25)

つまり彼女は、劇中劇を演じることによ

り、演じる側と観劇する側との双方を多重に理解していくことができる；そのことにより、人のさまざまな本心や真実が開示される局面を作り出すことが可能となる、と言っている。私は、この構造がセラピー中の転移感情を扱う上でも有効だと考える。繰り返すが、セッション中のドラマという劇中劇で演じることにより、転移感情をより強く、より真実に近い、あるいはそれ以上に拡大して表現することが可能となり、それが相手を傷つけることなく、安全に行われるのだ。

実は、私たちの日常生活の中でも、転移感情を本来の相手ではない人に対してぶつける・ぶつけられるという場合が多くあるのだが、お互いそれに気づかずに、人々は傷ついたり苦しんだりしている。普段でも、もしこの劇中劇という枠組みを作れたとしたら、多くの人間関係を良くすることができるのに、と思わずにいられない。

3 回目のセッション

さて、3 回目は、少し趣向を変えてみようと思い、『三つの願い』というお話を導入に使った。貧乏な老夫婦の前に神様が現れ、どんな願いでも三つ叶えてあげよう、というストーリーだ。子どもたちに、何でも希望を言ってもらい、それが叶うドラマを創ろうという意図だった。これまでのセッションで、演じることや仲間とのドラマ創りを多少なりとも楽しむことに慣れてくれたのではないかと考えて試した導入であったが、彼らは楽しくなさそうで、全然乗ってこなかった。あとで思ったのだが、彼らは希望することが不得意なのだ。重要な時期に親との信頼関係が築けなかっただけでなく、多くは見捨てられたという感情を持ち、

セルフ・エスティームが低い状態では、たとえドラマの中でさえ、大きな願いを神様に頼む心境にはなれなかったのだろう。万が一でもいいから、「実のお母さんと会いたい」などの生の気持ちを表現してくれたら、グループで共有・共感したいと思っていた私の期待が甘かったと思う。

それでも私がリードすると、お金がほしいという希望が多かった。前回、レバーを食べさせる母を演じたリングが、「1万円くれたら許す」と言っていたことも考え合わせると、彼らが「せめてお金だけでも、少しあったら」と思う気持ちが理解できる。あまりに自由のない生活、我慢ばかりの生活。子どもらしい夢や希望をもつ気持ちの余裕などあるはずもないのだ。

結局5人きょうだいの劇をやることになった。スギオは大学生。あとの子どもたちは小学生。浩二さんは父、私は母になる。学校からみんなが帰ってきたところという設定で、親たちは、「宿題しなさい！」というが、全員反抗する。一人ずつ私たちに訴えている様子からわかるのは、やはり自分に一番注目してほしいということだった。100%の受容、100%の注目をあげるという意味では、彼ら一人一人に一对一のセラピーが必要だと思う。でもとにかく今回も、彼らは「両親のいる」ドラマを皆で楽しんでくれたのではないかと思う。ただ今日は、そのあと混沌として大騒ぎになり、あまりの大声に、階下で仕事をしていた事情を知らなかった人が、注意をしに来たほどだった。

最後の目を閉じて想像の世界へ行く時間でも、今回はバタバタ動き回るだけで、全員まったく言うこと聞かなかったのが、浩二さんが彼らを強く叱った。彼は私に「こ

の時間だけ、子どもたちみんなが、收拾がつかなくなるんです！」と言っていた。そうであるならば、できるだけそうさせてあげたい。もちろん、ルールが守れずドラマができないほどの混乱になっては困るだが、ある意味ここが「解放される場所」として、子どもたちに正しく受け取られていると言える。できれば、普段我慢ばかりの子どもたちに、ドラマセラピーの場でまで怒ったり制限したくない。いづれにしても、今回は、初めに私が提供した材料（三つの願い）が失敗だった。私にとってはいくつかの発見があったが、セッションの進行としては、少し、行き詰まった感じで終了した。

四回目のセッション

到着してすぐ、スギオがマツオに耳をぶたれて泣き、私が撫でてあげる。スギオには私のケアリングを示す自然なタイミングがなかなか訪れなかったので、良い機会だったと思う。

さて、いつもは最初に必ず円になって、守るべき「約束」(メルマガ第二号参照)を、何とか全員一緒に言わせてからセラピーを開始していたが、今日からその前に毎回、ダンスをすることにした。初めは私が音楽に合わせて適当に踊るのを、皆がまねっこする。あとは、一人ずつ順番に「踊るリーダー」になり、全員でまねっこをする。真似をさせるのは、ミラーイングの効果で皆の気分を合わせる狙いだったが、それぞればらばらな動きを勝手にしていた。でも初めてのダンスを楽しんでくれた。

ドラマは、再び子どもたちの好きな設定でやらせることにした。

イチゴ(子ども)と私(怖いくそババア)

私は「宿題しろ！」で始めたが、いつも

と同じようなパターンを抜け出せないかと考え、だんだん怖くしないで仲良く母子で遊ぶという方向にもっていこうと試みた。が、もう一つ相手の反応が悪い。そのうち観客が「全然怖くない！」と訴えるので、「そうか！」と言って彼らの気分に合わせてことにした。その後の流れの中で、くそババアが、「何かリクエストは？」と子どもに聞く場面があったとき、イチゴは、まじめにこう言った。

「消えてほしい、ほんとは死んでほしい。」

つまり「私があんたを殺すんじゃないよ。あんたが自分で死んでくれ」というメッセージである。本当にそういう気分なのか確かめたいのと、気が変わってほしい希望もあって質問してみた。

くそババア： 今、私がウって死んだら嬉しい？

子ども： うん、嬉しい。

くそババア： そのあとどうすんの？一人で生きるの？

子ども： うん。

ふざけている雰囲気は、まるでない。このストーリーを実行する決心は固いようだった。

くそババア： どうやって死んだらいい？

子ども： 包丁もってきて、自分の目ん玉刺すの！

イチゴは、考える間もなく、すぐに答えた。このような発想がどこから来たのかはわからない。ふと、ギリシャ悲劇のエディプス王を思い起こす。自分自身に与える懲罰としては、相当に酷い部類に入ることではないだろうか。それをリクエストしているイチゴは、「くそババア」に対して、それほどの思いを持っているのだろうか。私は往生

際が悪く、イチゴが撤回してくれる気分にはならないか、と働きかけてみる。

くそババア： えーっ！？ じゃあ……。私が死んだら悲しい・・・？

イチゴは、煮え切らないで、ごちゃごちゃ言っているくそババアに腹を立てたようだった。

子ども： 早く死ね！（怒鳴る）死んだらハッピーエンド！（叫ぶ）

くそババア： じゃあ、ハッピーエンドにしてやるよ。

私は、イチゴを受け入れていることを示したかったので、リクエスト通りの筋書きを演じた。まず、両方の手に包丁をもって、「うっ」と目を刺す動作をした。しかし、私が本気で演じたらリアルすぎて、イチゴや他の子どもたちにとって絶対に良くないので、ユーモラスな雰囲気のをしゃべり方を漂わせて、「残虐なドラマです。あ、血が・・・どおおー」とナレーションしながら、目から頬の上を手の指で軽く触った。そして「バタっ」と言いながら倒れて死ぬところを「誠実に」演じた。するとイチゴは、満足したように、最後のナレーションを自分でしゃべってドラマを終わらせた。

子ども： 包丁もってきて、切って、焼いて食べました。おわり！

観客の拍手でドラマ終了。このとき、イチゴは何を感じていたのだろうか。この施設では、今まで何度となく「殺された」私であるが、このような具体的で「残虐な」リクエストによって自ら死なされる場面は初めてだった。しかも、バタッと死んだだけで終了ではなく、さらに「包丁で切って焼いて食べられた」のだ。しかし、イチゴが「切って焼いて食べる」アクションはせず、ナレーションだけで筋を説明したの

は、私がリアルになり過ぎないように意図した演技を理解していたからかも知れない。

マツオと私（二人ともプロレスラーの役）

最初はドラマの設定と役がまったく決められずにいたが、結局「プロレスラーとその相手」ということになった。プロレスラー同士だからと考え、私は「試合が終わったら話さないか」とマツオを誘ってみたが、「いやだ」と断られた。

試合が始まった。実際に殴ったりする気配はなく、セラピー初めの約束通り、プロレスの「ふり」だけで、アクションをする。きちんと「ふり」ができてるのは、見事だと思った。そして、私が倒れたところで「1！2！3！」とカウントされ、立ち上がれずに負けて、試合が終わった。勝ったマツオは嬉しそうだった。

私（世界一うざくて臭いゴリラの役）とリンゴ・アンズ（ゴリラをやっつける人の役）

最初にリンゴが出て来て設定を始め、アンズと一緒にやろうと誘った。アンズは一人では、絶対に私とのドラマをしないが、仲間と一緒にだと出て来て参加する。リンゴは私に、「お前がゴリラで私たち二人の人間が殺す」と言う。バナナをあげるよ、とゴリラに渡してすぐ取りあげたり、「臭ーい！」とか「きもーい！」と言っていじめる。二人で楽しそうにはしゃいでいる。私は二人の満足のために、きちんといじめられ役を演じた。最後は、二人がゴリラを殺したが、ふざけている感じで、イチゴのようなシリアスな雰囲気はない。

次に、二人が「臭いし、まじめすぎているやだ」という女の子（私）を学校でいじめるドラマに移る。今度は、ぶったり（もち

ろん、ぶつ「ふり」だけ。これも毎回「約束」を復唱させている賜物である）、臭いと言ったりする。担任の先生がいないところでいじめるので、陰湿な感じを受ける。私がいじめられて泣いたりすると、二人して「いい気味〜！」という感じでとても嬉しそうにする。

すると、何故かイチゴが、「見てもらえない、放っておけない」という感じで観客席から出て来た。担任の先生になり、ひょうきんな雰囲気やしやべり方で私をかばい、いじめっ子に注意する。「あなたたち、いじめてるんでしょー。ダメーよ！」

今日は、「目ん玉刺して死ぬ」ところから始まって、その後もプロレスで倒されたり、友だちにいじめられているばかりの役をしている私は、自分の生身の感情としても救われたような気持ちになり、またイチゴが私の味方の役を買って出たこと自体も嬉しかった。そこで「先生、助けてくれてありがとう」と、嬉し泣きの演技をした。このような、相手の好意を信じて感謝するような場面で、私は今まで何度も「失望」させられて来たのだが、今回のイチゴは、私の信頼を初めて裏切らなかった。イチゴ先生は「また、こういうことがあったら、言ってね！」と言ってくれた。リンゴもアンズも、それ以上はいじめなかったので、「先生」の「介入」は、奏功したのだ。

先ほどの、目を刺したドラマから私はかなりのインパクトを受けていたので、イチゴが咄嗟に特別出演で、私の味方役をしたことは、どんな意味があるのだろうかと思わずにいられない。前半でネガティブな感情をはき出すことができたので、ハッピーエンドを創ることができる気分になったのかもしれない。

できちゃった結婚の家族ドラマ

後半は、やはり家族のドラマがいい！ということで、みんなで設定する。今回は、できちゃった結婚、ということになる。以下のプロットは、ほとんど子どもたちが創ったものである。

まず浩二さん（父親）と私（母親）が結婚式で指輪の交換をし、キスするところから始まる。みんな「キスして、キスして！」とはやし立てるが、これもやはり「ふり」だけである。イチゴは神父、スギオは私の父役で、新婦の私はスギオと腕を組んでバージンロードを歩く。彼は、照れている酔っぱらいの父を演じている。酔っぱらいの演技がかなり上手くできていて、感心する。あとの子どもは列席者である。式が終わったら、すぐに産気づく母親。イチゴは、いろいろな役を即興でこなせる柔軟性が一番高い。すぐに看護師になり、私のお産の世話をしてくれた。このときも、いじめられている子どもを救った教師と同じような感情で、親切であった。出産が終わると、五人は全員、夫婦の子どもになる。（できちゃった結婚で、結婚式直後に五つ子を生む親もめずらしい。私としても、めったに経験できない役を演じることができた。）

子どもたちのリクエストで、夫婦は五人に名前をつける。「あなた、この子は可愛いですね。何て名前にしましょうか」と二人で、「食いしん坊」「甘えん坊」などと一人ずつ名付けていった。五人とも素直に嬉しそうな表情を見せた。

今日は、前回の「行き詰まり感」から抜け出せた気がする。

（次号に続く）

引用文献

- ① リネット・マクマホン 鈴木聡志訳
（2000） 遊戯療法ハンドブック ブレーン出版
- ② Jennings, S (1990). Dramatherapy with families, groups, and individuals: Waiting in the wings. Jessica Kingsley



家族造形法を使った事例検討

家族造形法の深度

その3

早樫 一男

〇はじめに…。

これまで2回は家族造形法の基本の紹介でした。今回からは、「家族造形法を使った事例検討」を紹介することにします。

基本的な進め方はいたってシンプルです。事例提出者（以下、提出者）が彫刻家になります。それぞれの家族の役割は参加者の中から選びます。そして、提出者が彫刻家となって、面接で語られた家族を造形という形にして創りあげていくのです。

提出者にとっては家族全員を配置することによって、家族というシステムの中の個人について、視覚的に確かめることができることとなります。

また、造形は家族の関係を具体的な位置や姿勢として表すこととなります。提出者は家族を創りながら、家族の関係に気付くチャンスが与えられているといってもいいかもしれません。

さらに、家族一人ひとりの表情、視線、手

の動き等も創っていきます。家族にとっては“からだ”を通して家族を感じることにつながる感覚的な体験にもなります。

造形が完成後、その感覚的な体験をそれぞれの声や言葉を通して確かめていくプロセスはとても興味深いものです。これまでなら、面接をしている特定の家族の語りを聴くだけであったのが、それぞれの立場に立っての語りを聴くことができ、新鮮な発見がたくさん生まれるのです。

もちろん、家族の役割を引き受けた参加者にとっても、家族のことを考えるととても不思議な時間・空間が創りあげられていくこととなります。

家族造形法を使った事例検討は、ダイナミックであり、ライブ感覚であり、そして、ボデーワークのようでもあるといった、さまざまな要素を含んでいる事例検討法です。

ライブを紙面で再現することはなかなか難しいところですが、今回はある研究会での様子を紹介することにします。なお、事例に

については、一部修正・変更など、再構成してあることをお断りしておきます。

○事例について…。

提出者が家族に関する情報や提出の意図を簡単に説明するところから始まりました。

提出者はホワイトボードにジェノグラムを作成しながら、母方祖父母、母、母の弟（おじ）、本人（姉）、弟の6人家族についての情報を簡単に語っていきます。

本人は10代の中頃から身体症状を訴え、自宅から殆ど出たことがないまま家にいます。

「どうなったら本人が今よりも楽になったり、前向きになっていけるかについて、家族それぞれの思いも確認することによって、これからの援助に何かアドバイスとかヒントになるようなことが手に入ったらいいなあ」というのが提出者の思いです。

「正解はないが、参加者からのいろんなコメントやアイデアをもらいましょう」というファシリテーターの言葉によって、家族造形が始まりました。

○家族を創っていく、置いていく…。

それぞれの役割を担う人が提出者によって指名されます。家族情報の捕捉が行われた上で、提出者が彫刻家役となり、一人ひとりのメンバーを粘土に見立てて、ゆっくりと創っていきます。一連のプロセスを見ているオブザーバー役もフィードバックの際には、重要な役割を果たすことになります。

最初に選んだのは本人（役）です。ゆっくりと部屋の真ん中に置きます、視線は下向きで、両手には力が入り、構えた姿勢です。

次に選んだのはお母さん（役）。娘の左横に座り、右手は娘の左腕の方に近づこうとしています。視線も本人の方を向いています。

三人目は弟（役）が選ばれました。母と姉に背を向け、家族の外を見ているといった感じの姿勢で座っています。提出者からは「楽な姿勢でいい」という指示が追加されました。



(写真解説)

左から本人、母、背を向けている弟

次に選ばれた祖母（役）は椅子に座って、本人と母の方を向いています。母の弟（役）は祖母の左後ろに膝をついた中腰となり、本人に向かって左手で指差しています。

最後に祖母の右後ろに隠れるように置かれたのは祖父（役）でした。



(写真解説) 椅子に座っている祖母、祖母の後ろにおじ、祖母の右後ろに祖父、祖母の前には本人と母 (右端)



(写真解説) 静止の時間 後方動いているのはオブザーバー

○静止の時間…。

家族全員の造形が完成したら、しばらくの間、そのまま静止の時間をとります。この時間はそれぞれの胸の中に湧いてくる思いを確かめる貴重な時間なのです。

オブザーバーは、ギャラリーとして、彫刻全体をさまざまな角度から眺めたり、それぞれのメンバーに近いところに位置し追体験したりといった、自由な動きをしながら、家族について考えていく役割を担います。

それぞれの役割を演じている人がここで感じたり気づいたりすることやのコメントが、「here and now」で思いがけない展開となっていくのです。

○それぞれの語りに耳を傾ける…。

静止の時間が終わった瞬間、本人が「泣けてくる」と涙を流し始めました。提出者も自ら創った造形を眺めて、感情が揺り動かされたようです。本人に引きつけられるように、寄り添う位置に動きました。

提出者は創った順番に合わせて、それぞれの語りに耳を傾けていきます。

まずは、本人の語りです。すぐに言葉にはなりません。しばらく、涙とともに沈黙。左横にいる母との間で感じることを語り始めました。身体を通して感じる複雑な感覚や思いなどです。次に、おじさんのアクションに対する思い、祖母に対する思いが語られました。その後、弟や祖父に対しての印象でした。最後に、家族の中にいる率直な感想が述べられました。

祖父に対するコメントを聞いた提出者は「ああそうなんですか…」と意外な様子です。

実は、提出者が予想もしていないコメントが新鮮な気づきや発見になるのが、造形法の興味深いところなのです。



(写真解説) 本人から見た風景の一部
祖母と隠れたような祖父

次は母のコメントを確かめます。母は息子や娘との距離感、祖父母に対する思い、そして家族の中での役割意識等を語りました。ちなみに、祖母は「菩薩のように見える」とのことでした。ファシリテーターは本人に母のコメントについての感想を求めました。



(写真解説) 母から見た風景の一部 左から祖父 祖母 兄 (本人のおじ) 娘

○外から見た家族、内に入って感じた家族…。

オブザーバーに感想を尋ねてみました。

お母さんについてのコメントの後、オブザーバーは「家族を一人ずつ、造形として置いていくにつれて、場面が変わっていく感じがあった。おばあさんについては、母の菩薩という言葉にはすごくびっくりした。外から客観的に見ていると、ものすごく偉そうで、近い距離で統治して、ある種、規範的なまなざしで見ているのに、母のコメントは意外であった」

提出者は「最初は思わなかったのだけれど、すごく、うまく置けたかもしれない」との感想。オブザーバーは、その後、弟のポーズや祖父の楽なポジションについて、コメント。また、それぞれのメンバーの横に立って見た時やみんなの姿勢になった時の感想と、外から客観的に見た時の感想についても語りました。

オブザーバーは、造形のプロセスを外から客観的に見ることができます。一方で、静止の時間には、各家族の横に位置し、同型の姿勢をとって感じ取る主観的、感覚的な機能も触発されることがあるのです。

そして、この両者のスタンスからのコメントと家族のコメント、提出者のコメントとが混ざり合っ、さらに、新たな発見が生まれ、家族造形法を使った事例検討ならではないのです。

○さらに、家族の語りに耳を傾けると…。

祖母が語ったのは、本人の表情を見ての感想、母に対しての思い、母と本人との姿勢からの感想、そして、自分自身の身体感覚などです。祖母の言葉に対して、本人やファミリーテーターからのコメントが加わりました。



(写真解説) 祖母から見た風景の一部 母、本人 弟

次は弟です。彼は母の言葉を聞いての感想をまず語りました。ほとんど見えない姉、祖父母等への思いも語られました。最後は弟自身の思いや姿勢から感じることでした。

祖父、おじも他の家族への思いや自分自身のスタンスなどについて語っていきました。



(写真解説) 祖父から見た風景の一部 左から祖母(椅子) 本人、母、弟

興味深いコメントが出てくるに従い、随所で家族役による交流や提出者も交えた検討が自然に深まっていきます。それは、家族造形法を使った事例検討の面白さでもある。



(写真解説) おじから見た風景の一部 おじは左手を前に本人、母の方向を指している

提出者が改めての感想を述べました。「この中にいるだけでも本人はしんどそう。客観的に言えば、作り手としてはよく作れたと思う。みなさんのフィードバックはとても参考になりました」



(写真解説) フリーターキングの一こま 左から弟 母 祖父 本人 (右端) 弟と母の間
にしているのはオブザーバー

○その後は…。

改めて、各メンバーのフィードバック（追加）を確かめた後、後半は今後の援助の方向性について、フリーターキングが展開されましたが省略します。

最後に、役割解除の儀式を行い、ラスト一言を分かち合っ、研究会は終了しました。参加者それぞれにとって、大変、印象に残ったケースのようでした。

○改めて、提出者の感想です。

この研究会に参加させていただくようになり、何年にもなりますが、毎回新しい発見

があります。これまでは、クライアント本人を取り巻く家族の状況や家族それぞれの思いを整理したい時、家族の力動が絡んでクライアント本人へのアプローチだけでは解決の糸口が見えない時、家族の転入・転出や変化があって家族力動がどうなっていくのかという見通しを得たい時に、ケースを提出し、メンバーの皆さんからヒントやアドバイスをいただけてきました。今回は、家族それぞれがしんどさを抱えている家庭で、クライアント本人が動き出したいけど動き出せないという状況の中、どのようなサポートがあれば本人が動き出せるのかというヒントが得たく、ケースを提出させていただきました。

家族を造形していくにあたり、本人を取り巻く家族システムを視覚的に捉えられるこ

とや、提出者自身が家族と同じ姿勢を取って
みることで、家族力動を体感することができ
ました。「こんな姿勢をとっていたら、肩に
力が入るだろうな…」「こんな距離感だつた
ら、圧迫感があって動けないよな…」「意外
と〇〇さんの位置からは、家族全員が見えて
いるな」などの気づきと、役割を演じたメン
バーからのフィードバックを重ねあわせ、本
人と家族のしんどさを再確認したり、本人と
家族のリソースが見えてきました。面接中に
クライアント本人から得てきた家族の情報
が、それまでは点と点だったのが、メンバ
ーからのフィードバックにより線となり面と
なり、臨場感を伴った理解（＝共感）につな
がっていくような感覚でした。

また、カウンセラーとして自分はこの家族
のどの位置に立っているのか、できあがった
造形に自分を彫刻として加えてみることも
できます。今回は本人役のフィードバックか
ら感情が揺さぶられ、思わず私から本人に寄
り添いましたが、これも私自身の今ある立ち
位置と距離感を確認することになりました。
今後の援助の方向性だけではなく、クライエ
ントの家族システムに自分がどう加わって
いるかの確認にもなったと感じています。

何よりも今回の大きな収穫は、提出者自身
が造形することにより、エンパワーされたこ
とです。メンバーそれぞれが家族のしんどさ
を体とこころで感じ、訴え、共有すること、
そしてこれからどうなっていったら援助の
役に立つだろうかと、頭とこころを寄せて共
に考えていただきました。メンバーの皆さん
に、本人と家族の思いを共感していただいた
ことは、私自身の支援のパワーとなり、希望
を持ちながら関わり続けていくことの大切
さに気づかされました。本当にありがとうご

ざいました。

〇おわりに…。

今回の掲載について協力いただいた事例
提出者を始め、研究会のメンバーにお礼申
し上げます。

旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

前夜③～メセナの時代に

村本 邦子

前夜、世はバブルの只中にあった。息子が生まれた 1988 年、京都国際会館で日仏文化サミットが開かれ、「企業の文化的責任」が熱く論じられ、以後、メセナの語が広まった。メセナとはローマ時代に遡る文化擁護を指すが、今では広く企業の社会貢献の意味を含む。当時はバブリーで品のないメセナも目立っていたが、企業が文化に貢献しようとするようになるには、ある種の文化的成熟が必要だろう。逆の言い方をするなら、少なくとも市民が文化的貢献をしようとする企業を支持する社会になるということだ。世の中に疎い私が当時そんなことを深く認識していたわけではないが、自覚されぬまま、嫌が応にも人は時代の影響を受けるものだ。

当時、本を通じて、たまたま、マザーリング研究所を主宰するたけながかずこさんと出会った。今野由梨さん(はや 1969 年に株式会社ダイヤル・サービスを設立、日本初の電話相談「赤ちゃん 110 番」を開設したという著名

な女性企業家である)の影響を受け、たけながさんは、「育児支援は母親支援」、「仕事・家庭・ボランティアからなる“マザーリング3つの輪”の生き方」を提案され、複数の企業と提携して、子育て中の女性を社会につなげる活動をされていた。オフィスは東京にあったが、月 1 回、尼崎にある「つかしん」のベビーコーナーでマタニティサロンをやっているというので、暇を持て余していた私は大きなお腹を抱えて通い始めた。そこで知り合った人たちは、ちょうど同じ時期に出産することになり、その後も子育て仲間としていろいろなことを語り合うことになった。息子出産後は車の免許も取ったので、運転の練習を兼ねて、娘が生まれる直前まで「つかしん」に足を運んでいた。

同じ時期、ネピアをスポンサーに、たけながさんが「ネピア赤ちゃん学」というのをやっていたので、私も 3 期生として応募した(何しろ暇だった)。これは、1985 年に始まり、1 期生から順番に、「マイお産ストーリー」「赤ちゃん 100 日戦記」「あんしん母乳育児」…と続い

て、93年第7期「ゆとりある育児」まで、毎年、テーマに添った作文を応募して選ばれたママたちが、1年間、東京と大阪で「赤ちゃん学」研究生になるというものである。たとえば、3期生の私だったら、母乳体験記を書いて(私の悩みは母乳の出すぎだった。妊娠中、12キロも体重が増えたせいなのか、母乳が出すぎて困ったものだ。十分双子が育つだろう。昔は母乳が足りない赤ちゃんにあげる「もらい乳」というしくみがあったそうだ。たぶん、子どもが私有化されている現代人には抵抗があるだろうが、私には良いしくみだと思える)、正確には覚えていないが、年に何回か堂島のロイヤルホテルに集まり(当時、私はそのあたりに住んでいた)、豪華にお食事をして(お茶だったかも…)、託児付きで、テーマごとのグループに分かれ、研究発表をして、きれいなクレヨンとネピアの紙おむつをおみやげにもらって帰るというようなものだった。

百貨店のマタニティ・サービスやマタニティ便利グッズなど、街へ調査に出かけ、ママ目線で商品開発やサービス向上を提言するのである。1年後には研究成果を冊子にした。振り返れば、これはグッド・アイデアの企画だったと思う。なにしろ、子育て中の母親はバブル時代マーケットのターゲットだった。当事者たちをうまくマーケティングのリサーチャーとして使いながら、一方で、知的好奇心や能力がありながら妊娠・出産で家庭に入ってしまったはいいが、「こんなはずじゃなかった」と閉塞状況に苦しんでいた母親たちを拾い上げ、社会参加する機会を提供したのだから。実際のところ、ここで拾い上げられた女性たちは、貴重な人材バンクであり、私を含め、うちの研究所のスタッフ3人はここの出身なのだ。

研究期間は1年だったが、卒業生たちはそ

れぞれ自主的に活動が続けた場合が多かったし、ここから複数、子育てに関わる社会的起業が誕生した。私たち3期生も、その後、ずいぶん長く活動を続けた。母親たちの集まりであると同時に、女性たちの集まりでもある育児サークルとして(これは案外、珍しかった)、イベントを企画しては集まり、どのくらいの頻度だったか忘れてしまったが、その後、何年も同人誌を発行し続けた。私が編集長をしていたような気もするが(今となっては遠い昔のことで、記憶が定かでない)、私自身は、妹にかわいいイラストを描いてもらって、「子どもウォッチングクラブ」という連載をしていた(こうして考えてみると、私はきっとウォッチングが好きなのだろう。最近では、ひそかに「おじさんウォッチング」をやっている)。

そういうわけで、私の子育て仲間には、ここで出会った人たちが多かったし、自宅で始めた子育てグループにも、この仲間たちが遠くから子連れでやってきてくれたりもした。この仲間たちと語り合ったこと、お産の話、女性の置かれた社会的状態(多くの女性たちが子どもを産むまで騙されてきたような感覚を持っていた)、女性の生き方、パートナーとの関係性、実家やパートナーの家族との関わり、そして、子育ての苦労と喜びの共有は、後に研究所を作るうえでの土台となった。前回書いたような経過で、第二子出産のおり、勤めていたクリニックをやめることになり、こうして積んできた土台の上に研究所設立の思いつきに乗ったのだと思う。

ここにもうひとつだけ付け加えておくと、私が仕事を続けていく覚悟を決めたのは、娘を産んだからだ。それまで、私は仕事にこだわっていたわけではなかった。前回も書いたように、

経済的自立や社会的地位とかいうものにもとくに執着はなかった。とにかく、最低限、食べていけて、自分にとって面白いこと、意義を見いだせることができさえすれば、それで満足だった。これは基本的に今も変わらない。今では大学生となった子どもたちにも、「あくせく就活なんか振り回されるより、若いうちにおもしろい体験をいっぱい積みなさい。とにかく食べていけたらいいんだから」と言い渡してある。子どもたちは、「そんなこと言ってる人、お母さんぐらいやで」と、なかばあきれながらも、(きっと自分なりに悩みながらも)それぞれに人生をエンジョイしている。私としては、子どもたちに有名企業に就職して欲しいとも思わないし、安定した職業を得て欲しいとも思わない。野垂れ死には困るが、ワーキングプアでもいいから、自分の力で満足できる人生を創り上げて欲しいのだ。

娘が生まれた時、とてもおもしろい体験をした。母親は、同性である娘について自分の人生を託してしまうのだということを、身をもって学んだのである。息子が生まれた時、私は、息子の人生を勝手に夢見ることはなかった。「とにかく、なんでもいいから、自分の責任で、納得できる人生を生きておくれ」と祈っていただけだ。ところが、娘が生まれた途端、私は、娘に「女性として仕事を持って、社会で活躍しておくれ」と願った自分にびっくり仰天することになった。自分自身は、女性として仕事を持ってやっていきたいという願望の自覚はなかった。どちらかと言えば、夫の方が専業主婦との結婚生活を望んでいなかったのだから、細々と仕事を続けていた感じである(もちろん、やるからには、一生懸命やっていたつもりだけ)。もしも専業主婦が好きな人と結婚したら、たぶん、地域活動やPTA活動なんかを一生懸命

やっていたのではないかしらと思うことがある。

それなのに、娘に社会的活躍を願うなんて、これはまずい。それが本当に私の望みなのだったら、それは、娘に託すべきではなく、自分が生きねばならないのだ。この時、私は、きっぱりと働いていく覚悟を決めたのだ。娘が専業主婦になって、地域活動やPTA活動に打ち込む人生を生きたとしても、それは娘の自由だ。もつとも、そうはなりそうもないけど。私の姿を見て育った娘は、ある時(それは、きっと社会が見えるようになった時なのだろう)、「ねえ、世の中には、お仕事するお母さんと、お仕事しないお母さんがいるんだね」と言い、それから、もう少し大きくなってから、「ねえ、専業主婦って金魚鉢のなかの金魚みたいだね」と言った。私は、あわてて娘の口をふさいだが、これは、私が主婦としていかに何もしていなかったかを表しているだけのエピソードである(念のため)。以後、娘は、素敵なカフェやブティックに行くたびに、「うち、高校生になったら、ここでバイトしよう」と言い、「いったいいくつバイトするつもりなの!?!」と心配になるほど働くことに夢を抱き、実際に高校生になったら、USJで立派に働くようになった。母親の姿を見て、働くことが良いことだと感じ取ってくれたことは喜ばしいことではある。

ずいぶん脱線してしまった。とにかく、私は、娘を産んで、「しっかり働くぞ!」と決意し、開業することにした。娘が生まれたのが1990年の7月7日で、研究所開設が10月1日だから、9月頃には、つまり、娘が2カ月の頃には、アイデアを得るために関係者に会いに行ったり、部屋探しをしたりなど、活発に動き始めていたはずである。赤ちゃん学で仕入れた情報から「スナグリ」という抱っこバンドを愛

用していて(これは首が据わる前から使えて、成長とともにダーツを開いていって、かなり大きくなるまで使えるというすぐれものだった)、カンガルーのポケットのようなスナグリの中で娘はスヤスヤ眠り、2歳になったばかりの息子の手を引いて、私はあちこち元気に出かけていた(まだ20代で元気だったし…)

東京に行って、たけながかずこさんのオフィスを見せてもらったり、鉄道弘済会「お母さんのカウンセリング・ルーム」をやっていた三沢直子さんに会ったりもした。何を話したか私の記憶は曖昧だが、三沢さんは、のちに、「まだ、子育て支援という言葉さえない時代だったので、全国から相談が殺到して四苦八苦しており、幼い子どもを抱えての開設はとても無理なのではないかと言った覚えがあるけれど、さすがはエネルギッシュな邦子さん、あっぱれだ」と言ってくれていたのだから、きっと無理だと言われたのに、私があまりそのことを気にとめなかったということなのだろう。結局のところ、それからずいぶん長い間、子育て支援をしている臨床心理士は、関東の三沢さん、関西の私しかいなかったのだ。

この時、三沢さんから、関西だと「赤ちゃん本舗」に話をもちかけてはと助言を受けた記憶だけは残っている。そう、その頃、考えられる可能性は、スポンサー企業を見つけることだった。企業家に言われて、某有名企業の黒幕的存在という人に会いに行ったこともある。でも、私には、スポンサーを探すというのが何だか面倒だった。どこかがお金を出してくれるというならとくに拒否するつもりはないけれど、わざわざ自分で見つけたり頼んだりする労力と時間があれば、今、自分の持っているもの、自分にできることを資本に、さっさとやれることから始めるという方が私らしいのである。実際

のところ、バブルの時期に企業に頼って事業を始め、バブルがはじけた途端に事務所を畳まねばならなかったケースは少なくなかったから、それはそれで懸命だったのではないかとも思っている。ただし、最近、芸術教育研究所・東京おもちゃ美術館の多田千尋さんが、「これからは市民創造の時代。社会貢献したい企業があって、アイデアにあふれた市民NPOもあるのに、今はまだお見合いの場がない」と言っているのを聞いて、本物の企業家ならば、スポンサーにマネージされるのではなく、逆にスポンサーたちをマネージするのだろうと思うようになった。

必ずしも景気の良くない時代にメセナを考える企業は立派である。そんな企業を支持する市民社会は成熟を反映するのだろう。これから私たちの社会はどんな方向を目指していくのか。



きもちは、 言葉を さがしている



第 2 話

水野 スウ

不思議なレストラン

水曜日の午後だけ開いている、誰でもどうぞ、の「紅茶の時間」をはじめから27年がたった。最初のころの紅茶は、毎週にぎやかな子育て井戸端のようだったけれど、年月とともに、あんまりはやっていない、とりたてて何もしてない、静かな時間へとじょじょに変化してきて、10数年前からは、元気がない時や心くたびれた時、ふらり行ってみようかな、と思える場所にどうやら育ってきたらしい。

今でこそ、そんな人たちを受けとめるのがあまりこわくなくなった私だけど、当時はなんだかややこしそうな人が来ると、おっかなびっくりだったことを思い出す。私の受けとめ方がまずくて、もしか、すでに十分よそで傷ついてきた人をさらに傷つけてしまったらどうしよう、って不安だったんだろう。ちょうどそんなころ、紅茶つながりの友人が「不思議なレストランからこんにちは」という講演会のちらしを送ってくれて、そのタイトルに魅かれ、私は富山までお話を聞きに行った

のだった。

東京調布にある「クッキングハウス」は、心の病気をした人たちの居場所であり、職場であり、そして誰もがおいしいランチを食べにいける、街なかの不思議なレストラン。代表をしているソーシャルワーカー、松浦幸子さんのお話は、東京にそんな場所があるんだ！という驚きとともに心に深くはいつてきて、これはどうしても行かなくちゃ、と思った。そして出かけていった。今から13年前のこと。

仲間と一緒にごはんをつくって一緒に食べて、おいしいね、からメンバーさんたちが元気になってゆく、というクッキングハウスは、お話で聞いたとおりに、ほんと安心できる、家庭的であったかいレストランだった。家族の誰かが心を病み、何をどうしていいかまったくわからない不安な時、クッキングハウスの存在を知って、全国から訪れる人も多いという。やっと来れた安堵感でテーブルに着いて、メンバーさんから、ご注文は？と聞

かれたとたん、おもわず涙があふれてきたお客様に、さりげなくどうぞと涙ふくタオルをさしだす、そんなことが当たり前、という意味でも、やっぱり不思議なレストランだ。

クッキングハウスのSST

決まった曜日に食事の後ではじまる、SST という名前のコミュニケーションの学びの時間にも、たびたび参加させてもらった。メンバーさんたちが、自分の日常生活で実際に起きる対ひととの様々な場面で、こうできたらいいな、もっとこうしたい、という希望とニーズのあることを練習の課題として出す。

たとえば、自分から仲間にあいさつができるようになりたい。おしゃべりの輪のなかに、しぜんに入っていきたい。新聞の勧誘の人を上手に断りたい。お母さんの誕生日に、プレゼントをどうやって渡したらよろこんでもらえるかな、などなど。

ささいなことにみえても、本人にとっては一つ一つが大問題。それにいちいちつまづいてしまう状況だとしたら、毎日どんなに生活しづらいことだろう。それを思いきって課題に出してみると、仲間たちが、そのきもちわかる、自分にも同じ悩みがあった、私にもあるよ、と真剣に受けとめてくれて、それから、自分の場合はこうやってみたらうまくいった、こういうのはどうだろう、と仲間たちが、いろんな知恵を分けてくれる。SSTリーダー役の松浦さんやスタッフからも、その人のこれまでとは少し違うものの見方や考え方、あたらしい行動パターンなどのヒントや助言がもらえる。

いくつか出された方法の中から、課題を出したその人が、これならできそうかな、と思うものを選んで、実際に練習場面をつくり、参加者の誰かに相手役になってもらって、短いロールプレイを試してみる。

練習したあとはすぐに、今のよかったところが、見ていたメンバー仲間や参加者から口々に伝えられる。まるでシャワーのように、その人にそそがれるちいさなほめ言葉の数々。してみてもう

たか、と訊かれて、当のメンバーさんも今のきもちを言葉にする。何より、勇気を出して練習したことがみんなから認められて、メンバーさんはともうれしそうな表情になる。

こんなふうには展開していくクッキングハウスのSSTからは、いつ参加してもあたたかな感動をわけてもらおう。メンバーさんたちは、練習を何回も重ねていくうちに、悩みや困りごとを一人でかえこまないことや、一緒に考え、応援してくれる仲間たちの存在を信じていることができ、実際には問題だらけの毎日であっても、一つ一つ、越えていこうと思えるのかもしれないな、と感じた。

と同時に、いいところを見つけて言葉にして率直に伝えることが、メンバーさんたちが自信をとり戻してゆく過程でとても重要な意味を持っている、ということも実感できて、それが私にとっては大きなうれしい発見だった。それは紅茶の時間をはじめたころから、特に大切なことだと意識もせず、私がずっとしてきたことと通じていたから。

ソーシャル・スキルズ・トレーニング、の略であるSSTが、認知行動療法の一つで、精神障がいの人のリハビリに役立つリハビリプログラムの一環でもある、と知ったのは、クッキングハウスのSSTを知っただいぶ後のことだった。でも私からすると、こんなコミュニケーションの練習って、病気であろうとなかろうと、およそどんな人でも日常的に楽しく学べたらいいのにな、と思えてならなかった。そういう場所が近くにあれば、ほんとはいいな。クッキングハウスに行くと、そんなきもちになって帰ってきたのだった。

練習が必要

クッキングハウスから帰った翌週の紅茶の時間では決まって、東京で学んだことのおすそわけやおみやげ話をしていた。人ときもちのいいコミュニケーションができるようになるって、練習すれば誰でも身につけていけるやさしいちからなんだと思う、と繰り返し言っていたら、紅茶にそのころ毎週のように来ていた人が、とんでもないこと

を言い出した。

「それって、今の私にもものすごく必要。自分だけじゃない、そういうコミュニケーションの練習が必要な人、私のまわりにたくさんいるの。お願い、スウさん、そんな練習ができる時間を、紅茶とは別枠でつくって」

見よう見まねのSSTを人に教えるなんて私にはとうていできない。無理だよ、難しいよ、と言いつづけたけど、このお母さんは、紅茶に来るようになってからの自分の変化をまるで動かぬ証拠(?)のように次つぎあげて、一向にあきらめようとしなかった。

— 紅茶の時間で、話をていねいにじっくり聴いてもらうことで、以前とは違う気づきがいっぱい生じてきた。

— 子どもの話を、そんなふうには聴いてこなかったこと。それまでコミュニケーションだと思っていたものが、実は世間体を気にした表面的な会話にすぎなかったり、きもちをごまかした取りつくろいだったり、相手を○○させよう、の意図が透けて見える操作誘導だったり、とだんだんわかってきたこと。

— こんな親をまじかに見て育ったら、どうやって人ときもちを分かち合うのかわからなくて、子どもが社会に出た時、生きにくくて当たり前かも、ってことにも気がついた。

— これからは、きもちのいいコミュニケーションができる自分に少しでも近づいていきたいと真剣に思ってる。だから、具体的に練習できる、そういう時間がどうしても必要なんです。

そんなふうにあくせくお母さんの近くには、彼女みたいに、コミュニケーションが苦手と思いこんでる人、わが子や家族とほんとは心通わせたいのに、いろんな要因が重なってそれがどうにも難しくなっちゃった人、だからこそ練習の場を必要としている人たちのいることが、私にも少しずつ見えてきた。

そうした家族の問題や葛藤を、他人にはあまり

知られたくないという思いもまた当然のこと。となると、誰でもどうぞ、が基本の紅茶の時間のオープンさは、いつ誰がくるかわからない大きな不安材料でもあって、だから紅茶とは別の場所と時間が必要なんだ、と次第に納得するようになった。

小さくてもいいからそこに自分なりの必然がある、と感じたら私は動き出せる。何よりもまず、練習したい、練習が必要、と思う人たちがいる、ということ。それも、SSTに限定しての勉強会というなら私にはまだできないけど、紅茶の延長線上でのコミュニケーションの練習というのなら、そして、参加する人たちと一緒にそういう場をつくっていかうというのであれば、あらたに何かをスタートさせられるかもしれない、そんな気がした。

もうひとつの時間

こんな話の出る前からしてきた、能登七尾の商店街のおかみさんたちとのコミュニケーションの勉強会や、金沢でのワークショップ自主勉強会、東京のJHC板橋会のテキストを参考にしながら続けてきたピアカウンセリングの学び、といったたくわえのようなものが、おそらく私の背中を後押ししてくれたのだろう。

とりわけ、七尾のおかみさんたちと数年続けてきた勉強会の経験が、私にささやかな勇気をくれた。おかみさんたちは、相手のきもちも自分のきもちも大切にしながら伝える「私メッセージ」と、相手を非難したり責めたりする「あなたメッセージ」の違いや、「聞く」と「聴く」の違いを学んで、それを自分たちの家族間のコミュニケーションやお商売の場面で実際に活かし始めていた。以前と比べて、きもちを言葉化する、伝える、ということを意識するようになって、仲間や自分のいいところもずっと自然にできるようになっていたし、おかみさんたちの表情も見違えるほど豊かになっていた。

私なりに見つけたおかみさんたちのうれしい変化、おかみさんたちが気づいた自分たちの変化。いくつもの、あ、なんか、前とは違う、少しは、

私メッセージで言えてる自分がいる、あの人がいる、自分の話を聴いてくれる仲間がここにいるって思えるのはいいな、といった感覚と経験。それらが、きもちのいいコミュニケーションの練習はたしかに意味をもつ、そして場のちからというものが育てば、仲間の間に信頼や安心感がふえてくるということ、私に教えてくれていた。

もちろん、これから一緒にコミュニケーションの練習をはじめようとする人たちと、おかみさんたちの会とを同列に並べられないことはわかっていた。これから、の人たちの悩みや問題は、だいぶ深くて厳しいのかもしれない。だけど、紅茶を長く続けてきて、悩みも問題も皆無、なんて人はいないことを知っていたし、その意味では、おかみさんであろうと、お母さんであろうと、どういうご家族であろうと、本質的にまったく異なっていて共通点の一つもないってことはないだろう、探せばきっとどこかに似たようなところや同じところ、普遍性が見つかるはず、とも思っていた。

とにかく今は、これからの会を、私が上手にできるかどうかということよりも、学びたい、練習したい、という人がいて、まずは練習する場がある、そのことの方がきっと大事なんじゃないか、とだいぶ迷ったあげく、私はやっとそこに着地できたのだった。

こうして、あなた「と」学ぶ、わたし「も」学ぶ、ともに学ぶ、という意味を名前にこめた、「ともとも」が2005年の2月に生まれた。その後、「結とも」が、やがて「ともさん」(3番目のとも、の意)もできて、月に一回集まってコミュニケーションの練習をする、紅茶とは別枠のもうひとつの時間である「ともの時間」は、あわせて3つになった。

ともの時間

第一回のともともに集まった10人ほどのうち、半分以上は私と初対面の人たちだったろうか。とにかくみんな、何をするのか、させられるのか、緊張感いっぱい、どの人も硬い表情をしたこと、よく覚えている。くわしくはわからないけど、深刻な家族の問題を、それぞれかかえてる人が多

いようだった。

まず最初にはっきりさせておかなきゃ、と思って私が言ったことは、ここは誰かが答えをくれたり、悩みや問題をすっきり解決してくれたりするところではないということ。小さなこまごました練習を仲間と一緒に積み重ねながら、一人ひとりが自分で何かを発見していく場。言葉にすることで無自覚だった自分のきもちに気づき、気づいたらそれを、相手に伝わるように伝える練習をしていく場所。私はこの場の水先案内人なだけであって、先生とか、指導者とかでは決してないということ、などなど。

その場にいた人たちの中には、家族のことで、これまでにいろんな本を読んだり、先生の講演を聞いたり、専門家に話を聞いてもらったりしてきた人が少なからずいた。悩みが深ければ深いほど、どこかにいい答えや解決策がないか、必死に探してきた人もいただろう。だからこそ余計、私が“先生”ではないことをはじめから明確にしておかなきゃいけなかった。

もしももの時間でそんな立場になってしまったら、私は正解やよい助言をくれる人、と勘違いされそうで、それはとっても困ることだった。そんな力が私にないのを十分わかってたせいもあるけど、何よりもここは、ともに、の場。セルフヘルプの場。互いの関係性がたいらであってこそ気づいていけるものが大きいはず、と確信していたからだ。もちろん今も、そう思っている。

ちょっと話がずれるけど、お話やワークショップの出前に行った先でも、紹介される前に、先生、でなしに、さん、で呼んでくださいね、といつもお願いしている。なんの資格も専門性も持たない私は、それこそが自分の特性だと思っているので、身の丈の、さんで呼ばれるほうがずっと心地いい。学校で子どもたちの前で話す時なんか、特にそう。○○先生、と紹介された人の話を聞かされる時と、なんやら変わった名前、それも、紅茶の時間ってこれまたなんだかよくわからないことしてる人の話の時とでは、同じ聞かされるのでもどこかが違う。ちょびつとは聴く側の子どもたちも身構えずにすむだろうし、その分、こっちも話し

やすい空気をつくってもらえる気がするのだ。

ともの約束

一回目の集まりの時、参加した人たちと話しあいながら、この場での約束ごとをいくつか決めていった。その後も思いつくたびみんなでつけ足しては紙に書いていったので、今では約束、というより、はじめての人に、ここはこんな場所、と説明するとき役立つ、ともの時間のプリントみたいになった。そのプリントに書いてあるのは、例えばこんなことだ。

- ・ここで出た話はここだけのこと。
- ・感じたことをかっこつけずにそのまま言う。
- ・自分のきもちに気づいていく場、そのためにきもちを言葉にする練習をするところ。
- ・よかったところはすぐ言葉にして伝える。具体的に、シンプルに。
- ・自分のきもちも相手のきもちも大切に使う場。
- ・批判されない、否定されない、どんな意見もあり。
- ・伝えたいことを、相手を傷つけずに伝える。
- ・わからないことがあったらすぐ訊く。
- ・人の話を最後まで聴く。
- ・ワンマンショーや人の話の横どりをしない。
- ・言いたくない時はパスできる。
- ・ここは問題を解決する場ではなくて、そのための練習の場。
- ・練習だから失敗して当たり前。誰も笑ったりしないよ。

ともの時間に、誰か一人でもはじめて参加する人がいたら、先輩たちがかわるがわる、プリントをもとに、この場の説明をしてくれることになっている。最初のころ、顔もあげずに棒読みした人も、「おっと、ちょっと待った。もうここからすでに伝える練習は始まっているんだよ〜」と私に言われているうちに、今ではここに書いてないことまでその日のアドリブつきで言ったりするようになった。

たとえば、ここはきもちと言葉が対面する場所、

きちは、言葉をさがしている

とか、自分だけの問題とってたことが、実はみんなにも共通の課題だったと気づく場所、とか、月に一回、きもちをリセットするところ、自分の心を見つめる勇気を育てる場所、といったふうに。

これだけ聞いてると、なんかえらくカッコいい場所と誤解されそうだけど、現実にはむしろその逆。というのは、ともの時間の中では、自分や家族の、世間にはあまり見せたくない影の部分、どちらかといえばみっともないところを仲間の前にひらいていくことが、ある意味で欠かせないことだからだ。

自分をひらくことで、その人の生きてる現場が仲間たちにも想像できるようになり、それじゃあ毎日しんどかったよねえ、と共感もでき、それを経て、仲間たちからの経験や知恵のおすそ分けが可能になる。そうとわかってはいても、ひと前で自分をひらくってなかなか勇気が要ること。

クッキングハウスのSSTでメンバーさんから出される課題というのは、こうできたらいいな、こう言えたらいいな、という希望であると同時に、今の自分ができてないこと、しんどいこと、自分の弱みをみんなに知られちゃうこと、いわば弱さの情報公開。

それでも、次々に練習したい課題が出てくるのは、そこが安心できる場で、どんな課題を出しても仲間たちの応援がもらえるし、一緒に考えてくれる、という信頼がみんなの中にあるから。もちろん、それまでのクッキングハウスの活動を通じて、リーダーの松浦さんに対する信頼だって深いものがあるのだけれど。

そのころはまだできたてのともの時間で、しかも、家族の複雑な問題で悩み多そうな人たちから、それぞれの課題がすんなり出てくるはずもない。だいたい、課題、という言葉からして最初は違和感があるに決まっている。

それならば、まずまっ先にできることはなんだろう。ともの時間が、安全で安心な場所、という空気を、ともの仲間たちと毎回少しずつ育てていくしかないのだろうな。そう思っていたので、最初の数ヶ月は、何はさておき、場の空気をほぐす

ことを一番に心がけた。軽いゲーム感覚のいろいろなウォーミングアップを何度もした。深刻に苦しんでいる人ほど、こんなことしていったい何の役に立つ、それより早く問題解決のヒントを見せてよ、そのために来てるんだから、と、きっとじれったかったことだろう。

コミュニケーションはキャッチボール

ともの時間のごく初期にしたことのひとつが、「きもちボール」だ。私が両方の掌を丸くした中に、ふうーと息を吹き込んで、目には見えない風船=きもちボールをふくらませる。そのボールで何を始めるのか、ひとつも説明せず、無言で、そのボールを仲間の誰かに投げる。投げる前には、目と目で合図。いい？行くよ。え、私？そうそう、あなただよ、投げるから受けとってね、ほーら、行くよ〜、ほーん。お、うまい、見事なキャッチ。

こうして、仲間の手から手へ、言葉のないキャッチボールがしばしの間、続く。だんだん要領がのみこめてきて、大のおとなが見えないボールを投げては受けとめ、投げては受けとめ。時に変化球あり、直球あり、笑い声あり、かけ声あり。隣の人に、ふわり、そっとボールを手渡す人もあり。

ひと通りボールが行き渡ったあたりで、きもちボールの話をする。コミュニケーションって、きもちのキャッチボールなんだと思う。どの人も途中からは、ボールを投げる前に、相手が受けとれるかどうか、その気があるかどうか、用意できてるかできてないか、って、一回一回確かめながら、目と表情とからだで会話しながら、投げていたよね。

せっかく投げたボールが、ちゃんと受けとめてもらえなかったり、無視されたり、急に強く投げ返されたり、返してほしくて待っているのにあさっての方向に投げられちゃったりしたら、誰だって悲しい。でも現実にはしばしば、きもちはそのようなふうに使われている。

話しても聞いてもらえない。聞いてるふりして、聴こうとしない。聞き流される。話の先取りや横取り。ただ聞いてもらいたかっただけなのに、答

きもちは、言葉をさがしている

えや助言を押しつけられる。お説教や指導がはじまる。時には、尋問。いきなり怒りをぶつけられたりもする。

こんなことが家族の中、親子間でもうパターン化したら、きもちのキャッチボールはあんまりどころか、ちっとも楽しくない。やがて、どうせわかってももらえない、わかりっこないさ、と冷めたきもちになって、うざいしめんどくさいし、何聞かれても、別にいい、って言っとけばいいや、になるかもしれない。

きもちボールは、たったこれだけの遊びみただけで、実際にはからだを動かしながら、投げる側のきもち、受けとられないきもち、無視されるきもち、などをかなりリアルに体感できるゲームだと思う。

投げようって合図送ってるのに、あの人、なかなか気づいてくれなかった。

今のボールは、もっと丁寧にうけとめてほしいかったんだけどなあ。

あれ？私の投げ方も受けとり方も、みんなと比べてどうも乱暴な気がする。そういえばきのう息子にぶつけたひとつと、ちょっと乱暴すぎたかもしれない。

今のあの子には、どんなボールならいいんだろう。そもそも今さら、あの子ときもちのキャッチボールなんか、私にできるんだろうか。

などなど、自分のいつもとっているコミュニケーションのパターンに気づけたり、相手への想像力をふくらませたり、と、このきもちボールは、3つのともの時間がそれぞれ始まったころ、欠かすことのできない、シンプルで、それでいてたくさんを感じさせてくれる、助走プログラムだった。

と、今回はこのあたり、ともの時間の、ほんの入り口まで。続きはまた、次回。

— to be continued.

やくしまに暮らして

ネイチャーガイド 大野 睦

第二章 特別か個別か

■世界遺産だから特別なの？



屋久島が世界自然遺産登録された背景は第一章で記してありますが、では世界遺産とは特別なものなのだろうか。

もちろん、登録をされた理由や意味はあり、それらが失われてしまったり変わってしま

えば登録の抹消もあり得るが、しかしながら、世界遺産になったのだからこうしなければいけない、ではない。世界遺産になった屋久島の自然、またその意味をどう守って残してゆくのか、が今を生きる私たちの使命である。このような歴史背景の中でこうして守られてきた今があるから世界遺産なのだと、言い伝え残してゆくことこそが大切な役割なのである。

また世界遺産登録の際には課題というものもちゃんと与えられており、数年後にその課題に取り組んでいるのか、また変わってしまっていないか、ちゃんと守られているのか調査も行われている。

そこで守っていくのはあくまでもその国であり、そしてその場所に暮らす人々であり、伝え続ける心も残し後世に繋いでゆくことが必要なのである。



縄文杉をシンボルとし象徴的に扱っていると思われがちな屋久島の観光。もちろんそれも否めないが、あくまでもそれは入口であり、きっかけであると私は考えている。これだけはっきりとしたランドマークがある屋久島の観光。それをメリットとして最大限に活かしながらもその道の続きを示すことが出来るかどうかが私の使命。

縄文杉が世界遺産なのではない。様々な時代背景のもと生き残った縄文杉という一本の木が教えてくれる屋久島の森。縄文杉という一本の木で森は作れない。互いに支えられ守られて森はある。縄文杉に着生する一本の木も、先日倒れた翁杉も森の中では繋がっている。

■障害があるから特別なの？



私は右耳が聞こえない。だから学校の教室程度の部屋ではマイクなしでは聞こえないし右からの音や声は聞こえてこない。そうすると当然、時と場合に応じて周りの方々にその旨を伝え力を借りることになる。それは私にとって背が低いから高いところにあるものに手が届かないことと同じだと思っている。もちろん、届かないのは見てわかるけれど聞こえていないのは言わないとわかってもらえない。何度も聞き返し相手を怒らせることもあるし、気付かずに不愉快な思いをさせて迷惑をかけることだって多々ある。ただそれは私にとってあくまでも苦手なことなのだと思っているのである。それをちゃんと伝えられず嫌な思いをさせて申し訳ないことをしたと反省をする。聞こえないことが弱点なのではなく、その

ことをちゃんと伝えられないことが弱点。何十年もそんな日々を過ごしても成長していないのかもしれないが。

私の育った小学校は障害者が同級生と出来るだけ一緒に過ごし学べるようにすることにとっても積極的であり、また当時の私の担任は子供たちにどうすれば良いか考えさせ、話し合いをする時間を幾度となく与えてくれた。

今思えば20数年前のこの時間が今の自分の考え方に大きな影響を及ぼしている。一人ひとりの個性を大切にすることと特別視することが必ずしも同じではないということが自然に対しても人に対しても通じることであり、私にとって最も大切なことなのである。



大野 睦 BLOG やくしまに暮らして

<http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

お寺の社会性



－ 生臭坊主のつぶやき －

竹中尚文

はじめに

最近、大手スーパーが葬儀業に参入するに際して、お葬式のお布施の額を明示しようと言う話があった。お葬式のお布施は、何故あんなに高いのだという声を受けてのものだと思う。お葬式についての時給換算をすればお布施はべらぼうな値段だという声があつてのことだと思う。この動きにお寺は、戦々恐々とするばかりであった。

そもそも、お布施が坊さんの収入という考えに対して何も反論できない坊さんというのはどうだろう。坊さん自身がお布施を自分の個人的収入と考えているのだろう。たとえば、病院の手術費を時給換算して不満を述べる人はいないだろう。それは、手術費が執刀医の収入とは誰も考えないからだだろう。ところが坊さんはお葬式のお布施をそのままポケットに入れて、坊さんの個人的収入とすることが多いようだ。こうした状況でお葬式のお布施は高いと言う声となっていると思われる。

一方で、お布施に基準額を求めるのは払う側の都合でもある。時々、いったいどれだけの額のお布施を払えばよいのか尋ねる人がいる。そんな時、私は尋ねる人が経

済的に余裕のある人だろうと思う。経済的な余裕のない人は、いくらだと言われても払えないものは払えないのである。

今、お葬式の坊さんは必要ないという動きもある。お葬式に坊さんを頼みたくない気持ちも分からなくはない。それは坊さんが、お葬式の中で本当に必要な存在になり得ているかを問われているのである。さらに言えば、お寺や坊さんは社会的に必要な存在であるのかと言うことが問われている。私たち僧侶は、現代社会に於いてその存在意義が問われているように思う。一方で、何百年も続けてきた坊さんやお寺が、無くなるはずがないと言う人たちもいる。

私は社会の中で存在意義を無くした坊さんやお寺は消えゆく存在であると思っている。今、坊さんが自分たちの暮らす社会の中で、自分の存在意義を語れずにお布施のみを求めれば、社会的には消えてゆく存在であろう。

1. ある尼僧

今回、私は社会的存在としての僧侶やお寺というようなテーマを語るのにアメリカ人の僧侶の話をしたい。

私が、ジェニファー・リー(仮名)に出会

ったのは、アメリカ合衆国のバークレーにある仏教大学院の寮であった。北米大陸での仏教伝道に興味を持っていた私が暫く滞在させてもらった寮で、彼女は修士論文を書いていた。修士課程を修了すれば、日本に留学して得度をして僧侶になるという。

浄土真宗本願寺派がアメリカ開教を始めてから 100 年を超える。現代は、開教と言っても日本から開教使が渡ると言うのは少数派になっていて、アメリカ生まれの人が僧侶となっていくのが主流になっている。教団が北米に仏教大学院の修士課程を設立していて、そこで仏教や真宗についての教育を行う。加えて、日本語教育もする。修士課程修了後は日本に留学して、さらに僧侶としての仏教知識を学び、經典の読誦やいろいろな仏事作法を習うのである。そうして、得度式を経て僧侶になっていくのである。

少し余談になるが、このシステムで僧侶を養成することに、教団の経済的負担は小さくない。また本人としても個人的に時間と費用のコストは小さくない。アメリカで浄土真宗の僧侶になるには、修士のキャリアと二カ国語の習得は不可欠なのである。この状況で、僧職という人生の選択をする人は少ない。人生の投資とそのリターンを考えると、もう少し実利的な人生の選択をする人が多い。ここでも人材難である。

2. 高校を卒業して

話を戻そう。それから程なくして、彼女は日本に留学してきた。受け入れは、宗門系の龍大であった。半年か一年と言う比較的短い留学であった。それは、彼女の経

済状況が奨学金頼みのゆとりのない状態であったこともあるし、日本で仏教の研究を深めることより、早く得度をして僧侶になりたいと言うこともあった。

短い留学の間に、彼女を私たちの寺に招待した。普通の田舎寺で僧侶として現場を体験してもらいたいと言う目的であった。田舎の空気を吸いながら、ジェニファーがオクラホマ出身であること初めて言った。田舎の景色に懐かしさを感じたらしい。

彼女は、オクラホマ州の田舎で高校を卒業した。自分の家庭には、彼女が大学進学をするような経済的余裕なんてなかったし、かといって田舎町で就職先もなかった。だから高校を卒業すると直ぐに、彼女は海兵隊に入隊した。

海兵隊では沖縄を中心に 6 年を過ごした。この 6 年は相当にきつかったらしく、「これを越したのだから」と言う彼女の生きる自信になった。この期間に貯めたお金で彼女は大学に入学した。卒業後、仏教大学院の修士課程に入った。その頃、例の 9.11 テロがあって、アフガン戦争とイラク戦争と続いた。報道に登場するアメリカの兵士は、ほとんどがジェニファーのようにアメリカの聞いたことの無いような田舎町の出身者であった。彼女もこの時に海兵隊に在籍していれば、イラクで戦っていたかもしれないし、アブグレイブに居たかもしれない。そうならば、彼女は除隊して大学進学という人生の選択をできただろうか。どんな時に何処にいたと言うちょっとしたタイミングの違いで、人生は大きく異なることがある。

3. なぜ従軍僧なの

彼女は僧侶となって、再びアメリカ軍に戻るのが希望だという。いわゆる従軍僧になりたいと言う。ここで、私は Chaplain という言葉を従軍僧とした。このチャプレンという言葉は、従軍僧の他に教誡師、あるいは病院とかで心のケアに携わる宗教者をさす言葉でもある。キリスト教文化を背景に持つ言葉である。キリスト教の現世に対しての関わり方を反映する言葉である。日本では教誡師は仏教僧が多かったので、それは仏教的背景を持つ仕事である。私は、学生時代に仏教を学んだ。その時に教誡師になるための講座が開かれていたが、私は教誡師という言葉すら知らず、その講義を受けることはなかったことを悔やんでいる。

従軍僧については、日本の自衛隊にはこのような職種はない。だから、ジェニファーが従軍僧になりたいと言った時、私は従軍僧というものを理解していなかった。第二次世界大戦以前の日本軍には従軍僧は存在した。私が聞いた当時の様子では、兵士が死亡すると戦場でお葬式をする。その主な役割が従軍僧であったようだ。

ジェニファーはアメリカ軍史上初めての、仏教従軍僧である。彼女は、アジア系アメリカ人として仏教の話ができる従軍僧になりたいのだそうだ。彼女の話によれば、今のアメリカ軍はアジア系の人たちが増えているという。そんな人の助けになる仕事がしたいのだそうだ。

彼女は得度を済ませて僧侶となってアメリカに帰った。浄土真宗の北米教団とアメリカ軍は彼女の従軍僧になりたいと言う希望を聞き入れた。北米教団の上部組織である本願寺の議会でそのことが取り上

げられた。ある議員が、戦前の教団が戦争協力をしてきた歴史を振り返って、今また教団が従軍僧を養成し軍に送り込むことに、過去の反省が見られないと言う指摘があった。大切な意見である。平和を説く仏教の教団がかつての大戦で戦争遂行に協力したのだから、しっかりと反省をしなくてはならない。

今、彼女は従軍僧として海軍にいるそうだ。航海の中で、自らの命を絶つ兵士もいる。戦場に赴くのと、他者の命を奪うのである。人間の命を絶つことは、簡単に整理のつく話ではない。命を感じることの重み。彼女はその場に身を置いている。

戦争協力だと受け取る人もいるだろうが、そこに身を置いて僧侶の仕事をするのは、大切な事だと思う。仏教用語で人間世界を娑婆と言う。迷いの世界である。善悪の判断も出来ないところである。私も善悪、是非のはっきりしないところに身を置く僧侶でありたい。

時として、世界大戦中の日本のように戦争反対を唱えることも困難な状況がある。その中で、戦争反対を唱えることは尊いことである。山に籠もったり、寺の中で厳しい修行をする僧侶もいる。立派だと思う。私が得度をして僧侶になったとき、坊さんになるのに厳しい修行をしたいへんですねえ、と声を掛けられたものだ。頭をかきながら私は生臭坊主ですから、と答えたものだった。閉ざされた清浄な環境の中で僧侶としているより、娑婆世界と言う人間の世界に生きる僧侶でいたいと思った。

私は生臭坊主なのである。

執筆者一覧

おことわり

編集作業仕上げ直前になって、未着だったり、お願いし忘れていたり、どこかに紛れ込んでしまっている筆者近況があることに気づきました。発行日や編集作業日を考えると、ご連絡して待つ時間がありませんでした。

連載執筆者ばかりですので、プロフィールは前号のモノが用意できましたが、一部の方の執筆者一覧に不備があるのをお許し下さい。次号は必ず確認して、掲載させていただきます。（だん）

ニシカワ ユリ

いくつかの学校で、対人援助職養成に携わっている者です。先日、対人援助学会で人生初のポスター発表をいたしました。ポスター発表というのは非常に大変なものなだと身に染みましたが、それに見合うくらいに面白いものだとすることも解りました。発表を聞いて下さった方々、意見を下さった方々、本当にありがとうございました。ご意見ご感想のメール、お待ちしております。
y_n_oiw@yaho.co.jp

ムラモト クニコ

10月30日に女性ライフサイクル研究所20周年イベントを開催しました。開設当時の映像を見たり、全国から駆けつけてくれた初期の頃からの仲間たちと久しぶりに会い、また社会的起業家の志についての楽しい鼎談やオマケのピアノコンサートをしたりして、暖かく充実した幸せな1日でした。その一方、ぼやぼやしているうちに、あっという間に21年目がくるぞと気づき、そろそろ夜を明けさせなければ。

ダン シロウ

編集後記にたっぷり。

チバ アキオ

編集後記にたっぷり

タケナカ タカフミ

新登場。編集後記欄に紹介有り。

サトウ タツヤ

東京都立大学人文学部卒。博士（文学）。立命館大学文学部教授。日本質的心理学会事務局長、『パーソナリティ研究』・『Culture and Psychology』などの編集委員を務める。立命館大学の「生存学創成拠点」、「法と心理学研究拠点の創成」で研究活動に従事。専門は文化心理学・質的心理学・心理学史。医療・経済・教育など現実の社会問題と心理学の接点を扱う社会心理学研究を目指す。著書・論文多数。主著として単著の『日本における心理学の受容と展開』北大路書房(2002)、単編著『TEMではじめる質的研究』誠信書房(2009)など。

オカダ リュウスケ

広島で子どもの精神科34年。いろいろ兼務しているが、気持はずっと児童相談所にある。そこは精神医学の片隅に位置する児童精神医学のさらに辺境の地。何度も途中下車をしかけたが、結局、終着駅がぼんやり見えるところまで来た。駅を降りて雨が降っていなければ、今度はあてもなく歩いてみようと思う。

週刊誌が大手新聞に掲載する「まつりごとのあらさがし」の見出しに、毎週、いらだっている。多くの人が、買わずに読んだ気になって刷り込まれるんじゃないか、それが内閣支持率の低下に表れてるんじゃないか、それによって政治が目先のことと人気取りに四苦八苦してるんじゃないか、週刊誌はそれをあげつらってまた大手新聞社の広告の見出しにして、結局、短命内閣を量産しているんじゃないか・・・週刊誌のリードで、成熟を待たずに政治を虐待する日本。いま、かっこよくて勇ましくて見栄えのするのが出てきたら、一気にもってかれる気がする。

ウラタ マサオ

京都芸術大学で保育士養成科目の指導を行う傍ら、中学校のスクールソーシャルワーカーとして、教育現場へも出ています。アメリカなどでは長い歴史があるスクールソーシャルワーカーですが、日本での歴史は今しまったばかりです。本誌拙稿では、学校教育現場で外部の専門職が果たす役割や課題、可能性について綴っています。どうぞ、よろしくお願いたします。

ダン アソブ

採用支援の仕事で上海に行きました。中国で事業展開する某社の海外事業統括本部長へのインタビューが目的です。彼は日本以外の場所で働いて14年目になるそうです。立ち上げ期の話から尖閣問題の見立てまで、たくさん話を聞きましたが、その中で印象的だったのが「政府のサポートが皆無の中でこれだけ海外事業を頑張っているのは日本くらいだ」というものでした。

立命館アジア太平洋大学非常勤教師(キャリア教育)、アソブロック株式会社、有現会社 ea 代表、ホンブロック発行人。“環境に変化と刺激のものづくり”をモットーに幅広く活動している。東京を会場に「団二郎家族理解ワークショップ」を隔月開催中(偶数月第二土曜日)、ぜひ来てね。<http://danasobu.com>

ナカジマ ヒロミ

大阪梅田で、CON カウンセリングオフィス中島をしています。ご相談に来られる方の中で、最も多い年齢層は、高校生や大学生とその家族です。不登校、情緒不安定、うつ状態などの夫婦、家族面接をしています。

この時期話題になるのは、来年進級できるかどうか、高校生は出席日数が気になることです。当オフィスにカウンセリングを受けに来られていると学校によっては公欠として認められるため、面接状況の経過報告書を高校に提出しています。

カワサキ フミヒコ

子どもの虹情報研修センター研究部長。出来上がった2冊の新刊を、ためつすがめつ眺めています。「日本の児童相談」はインタビュー集。「子ども虐待ソーシャルワーク」は、これまでの実践と思索のいわば現時点での集大成。特に後者は、“ほんづくり”のプロセスも楽しみました。読みかけの方から早くも「臨場感あふれ、読みやすい。ほんとうにおもしろい」との感想が届きました。皆さんも是非手にとってみてください。

ツルヤ シュイチ

年末、師走、いつもながらどんどん仕事が降ってきます。「幼稚園の先生は、こどもが2時に帰った後なにしてんの？」なんて良く聞かれますが、だいたい4時迄は送迎や庭そうじ、そのあとミーティングで5時、それから部屋の掃除や保育準備などにあてられます。行事先はだいたい8時か9時頃まで電灯が点いています。行事は毎月何かしらあるから、電灯が点いていない日のほうが少ないですね。園長は、そんなみんなと競い合って平均残業時間を伸ばしております。

カワギシ ユリコ

臨床心理士 《かうんせりんぐるうむ かかし》主宰 千歳市教育委員会スクールカウンセラー、石狩市こども相談センター臨床心理士・家庭相談員アドバイザー、千歳市はじめ五市の子育て検討会スーパーバイザー、札幌学院大学臨床心理学科非常勤講師他。久しぶりに風邪をひいてしまった。早いほうがよいと思って内科に行った。「のどが痛い。」と訴えるが、見た目は何ともないといわれた。「そんな筈はない!こんなに痛いんだから・・・。」と思いつつ、とりあえず総合感冒薬と咳止め(咳は出ていないが・・・)を買ってきた。風邪が悪くなるのは決まって週末。いつもは土日にビタミンCを多めに摂って、コンケルかゼナを飲み、休むと月曜日にはほぼ完治。今回は+風邪薬だから絶対大丈夫!(笑)

キムラアキコ

今年も一年の振り返りをする時期になりました。地方業界紙の連載執筆に始まり、対人援助学マガジンの執筆、私の生活の中に、自分の仕事の実践を言語化して伝える、という新たなメニューが加わりました。マガジンの多彩な執筆者の方々の連載に刺激されながら、人の内面や行動と言葉をつなぐ(表現する)面白さと奥深さを実感しています。私の生活の中の、この新たなメニューがいつまでも続くように、日々の出会いや出来事に心の入口を大きく開き、表現力豊かな執筆家になりたいと思っています。(近況じゃなくて、来年の抱負になりました)

アラキ アキコ

大阪在住、福岡県生まれ。大阪の精神科と島根県の生殖医療施設の心理カウンセラーを兼務 立命館グローバル・イノベーション研究機構客員研究員（研究テーマ：不妊臨床と家族援助）生殖医療対人援助研究会&島根家族研究会主宰 現在、島根県内で家族援助者のネットワークづくりに奔走中。

ミズノ スウ

石川県在住。1983年より自宅で週一回「紅茶の時間」をはじめ。「ともの時間」など、コミュニケーションワークショップ水先案内人。

著書に、「雪の手みやげ」「ありがとうのパッチワーク」紅茶3部作として「まわれ、かざぐるま」「出逢いのタペストリー」「きもちは、言葉をさがしている」、共著に「ほめ言葉のシャワー」ほか。「紅茶なきもち」

<http://kimochi-tea.cocolog-nifty.com/blog/>

オオノ ムツミ

有限会社ネイティブビジョン 代表取締役

mutsumi@native-vision.com

鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦799

屋久島観光センター 2F

TEL.0997-42-2013 FAX.0997-42-2916

<http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

<http://www.native-vision.com/>

フジ ノブコ

立命館大学大学院応用人間科学研究科教授、専門は臨床心理学、コミュニティ心理学、集団精神療法。大学の心理・教育相談センターの他、精神科クリニック、保健所でも臨床に携わっている。来年の3月立命館大学で開催する、日本集団精神療法学会第28回大会の準備で忙しい日々を過ごしている。

ナカムラ タダシ

私は立命館大学の教員です。学部は産業社会学部、大学院は応用人間科学研究科です。社会病理学、臨床社会学、社会臨床学を専攻しています。犯罪、非行、虐待、ドメスティック・バイオレンス等の加害者の脱暴力支援についていくつか現場で実践を重ねています。

さらに、暴力とも重なりますが、薬物、ギャンブルというアディクションにも関心があります。こうした逸脱行動を半ば不可避的にうみだしてしまう社会の様態（だから社会臨床）への尽きない興味があります。その深淵をみつめるために奇想天外な想像力を喚起させてくれる映画、演劇、小説等に大いなる関心があります。

キタムラ シンヤ

グローバル教育研究所代表取締役。日本社会臨床学会、日本教育カウンセリング学会、対人援助学会会員。現在、立命館大学大学院応用人間科学研究科に所属。2000年、京都府亀岡市に自らの研究フィールドとして「グローバル教育研究所」を設立、同年、学びの共同体「アウラ学びの森」、2005年には、フリースクール・通信制高校サポート校「知誠館」を開校し、自らの理論研究と教育実践を通して21世紀の教育モデルの実現をめざす。また、2005年より京都府教育委員会、2009年より京都府庁青少年課の研究委託事業を受託し、教育に関わるプロジェクトを行政と共に企画実行している。

ハヤカシ カズオ

現在、児童相談所長。児童相談現場での勤務経験が20年を超えてしまいました。心理判定員として出会っていた小中学生の子どもがすでに親になり、子育てをしている年齢になっています。相談ケースの保護者として、再会することが何度かあり、複雑な心境の今日この頃です。

オノエ アケヨ

国内で最初の米国ドラマセラピー学会公認ドラマセラピストとして、ドラマセラピーのセッションやトレーニングを種々の場で行い、その普及や教育にいそむ。

ドラマセラピー教育・研究センター代表。2007年度より立命館大学大学院応用人間科学研究科教授も務める。治療セッションとしては、現在、アルコール・薬物・ギャンブルなどの依存症者の回復にむけて力を注いでいる。

あいかわらず 長い編集後記

編集長(ダン シロウ)

無事、すらすらと三号が発行されます。凄いモノですね。世に三号雑誌なんて、潰れる代名詞のように言いますが、そんな気配は全くありません。次の締め切りは2月25日(発行は3月15日の予定です)のっけからこれですから、編集作業が楽しいのです。

第三号締め切りの11月25日深夜、もうすぐ午前0時という時間帯に、続々と律儀な執筆者から添付メールの原稿が届いていました。藤さん、浦田さん、尾上さん、千葉さん。荒木さんの、「遅刻しそうです、送信は夜明け前になりそうです」のメールには「あなたは島崎藤村か！」と返信しました。既に届いている方も多く、相変わらず快調です。これらを私は岡山からの新幹線車中、iphoneで確認していました。

あの日は夕方に京都を出て岡山行きでした。月例研修会の4回目です。18時から22時まで市内会場で4時間プログラムを実施し終えた帰路でした。私も頑張っていて、皆さんも頑張っている。なんだか良いなあと思ってしまいました。

執筆者の一人村本さんは、書いた原稿の修正版を送ってきて、「編集長が直してくれたらいいのに。誤字くらいなもの」、「わたし書いた原稿は読まないでさっさと送るからね」と、仰天なことを言っていました。

編集長ですから読みますが、いわゆる『編

集者読み』はしません。『第一読者読み』の感じですが、自分で校正して送ってください。

今回も又一本新連載が登場です。死後の世界、死とどう向き合うかの世界から、僧侶の登場です。

姫路の田舎で住職をしている竹中尚文くんとは、彼がまだ龍谷大学の学部生だった頃からのつきあいですから、35年を超えます。出会いはお互い初めての海外旅行、「シルクロードの旅」でした。ソ連だった時代のウズベキスタン・タシケントでの朝、二人で散歩に出かけて迷い、乗ったタクシーに違うホテルに連れて行かれ、危うくツアーバスに置いて行かれるところでした。(ホテルが違っていたのは、我々の行き先告知が間違っていたので、ドライバーのせいではなかったのですが)

巡り巡って今、ここでこんな風にあることを、非常に楽しく思っているところです。多くの日本人が、とりあえず生活習慣としての仏教徒である状況で、お寺や僧侶ってどうなっているのでしょうか？

彼には第三号発刊直前の12月10日、京都キャンパスプラザで連続開催している**対人援助学会定例会**でゲストスピーカーとしても話してもらいました。この**例会は年間4回(次回は2月18日、そして5月20日予定)**開催しています。演題・演者は学会hpの告知でご確認ください。そして是非ご参加ください。オープン参加、参加費無料の企画です。

11月に京都(立命館大学)で開催した「第2回対人援助学会京都大会」のワークショップ、「対人援助学マガジンの可能性」は楽しかったです。特にどなたもお呼びしたわけではなかったのですが、会場に執筆

者7人ほどが集うことになりました。参加者の皆さんと話していただける機会になりました。これからはマガジンをどう利用するかは時期に入ってくると思います。

多様な対人援助分野が、いっそう活気づいて、健全な発展をするためにはそれぞれの職種内部視点の議論だけではだめだと思えます。例えば近接職種が「家族」というキーワードなら全てつながってしまうように、新たなネットワークデザインが組み上げられていかなければならないのだと思えます。

この雑誌の多様さが、専門細分化を走り続けすぎて、総合の場で機能不全になっているかに思える力を、再統合するヒントになればと思っています。思いがけない連携が、どのようなレベルであろうと、発生するきっかけになれば、この雑誌の存在意義は十分だと思えます。

記事に対するご意見、ご感想もですが、執筆者への様々なリクエストもお寄せください。

マガジンに対するご意見ご感想

danufufu@osk.3web.ne.jp

学会時に販売しました印刷版対人援助学マガジン(1号、2号、各1000円)が少数ですが編集部にあります。ご希望の方はメールでお知らせください。

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438

ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

編集員(チバアキオ)

先日の対人援助学会では、『対人援助学マガジン』の著者の先生方にご挨拶することができた。団編集長のワークショップでは、

『対人援助学マガジン』に連載中の著者4人で話す機会があった。みんながお互いに初対面だった。そこで『ポストモダンな学びのスケッチ』を連載中の北村真也先生がおっしゃったのは「みんな初対面だけど、そんな気がしないね。どこか底の方でつながっているというか...」その発言に、そこにいた4人ともがうなずいていた。秘かに私もそんな感じがしていた。けれども、同じような思いを他の著者の方にもあるということを知ったときには本当にうれしかった。対人援助学会の基調講演をしてくださった浜田寿美男先生、中村正先生のシンポジウム、対人援助学マガジンでご活躍の先生方、それらは、私にはつながっているようにしか思えない。

先日、知っている人が誰もいないシンポジウムに行った。初めは、市長のあいさつ、次に 学長のあいさつに、その次は 所長の代理のあいさつに...というくだりを本題が始まるまでに30分取ってあった。「前の方には、著名な先生に教授に、先生...」と紹介もあった。そんな人達だけが主人公ではないだろう！私はこういう研修、シンポジウムには参加しないように極力してきたのだと思った。この経験の対極にあったのが先日の「対人援助学会 第2回大会」の1日であった。時間は有効に使うためにさっと本題に入る。これが私のこれまで泳がせてもらってきた先生方の世界のリズムであり、スタイルだ。

年4回、『対人援助学マガジン』の紙面上で出会い、年に1度ぐらい実際にご挨拶できる。その1回も、その質はただの一回とは全く異なる。1年ぶりでも、話題はいきなりコンテンツから始まる。極端に言うと

初めてでもだ。「あれは、どんな感じなんですか?」「あそこ面白かったです。そのあたりもう少し教えてもらえませんか?」そんな深く人に会うことは、毎日一緒に働いていてもないのではないか。先生・学生関係でも、数年たてば、「サヨナラ」だ。この『対人援助学マガジン』の連載と大会などのリアル世界でもつながっていくことで、さらに深く出会っていられる。そして、この先も、いつでも質の高い出会いを作り出していくことができる。さらに、この『対人援助学マガジン』の可能性は、ネット上での技術的な革新もすぐに味方に行うことができるという潜在能力もある。まだまだ、いろんなことができそうです。

こないだの編集会議では、次回以降の新連載の話しもチラホラ。いつも編集作業の仕上げは、学会事務担当の川原義彦理事がしてくださっています。本当にありがとうございます。

対人援助学マガジン

No.3

第一巻第三号

2010年12月15日発行

<http://humanservices.jp/>

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町 56-1

立命館大学大学院応用人間科学研究科内

TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通 2-4-1

リファレンス内

TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

赤い表紙に似合うもの。そんな発想で自分のイラスト・データを探索していたら、思い出したのが、ずっと以前に産経新聞の一面に連載していた、記事とのコラボ漫画でした。新聞の一面に漫画が掲載されることは希で、ちょっと話題にもなって、結構長く続いた企画でした。

この時は、夏バテ防止の食べ物が話題になっていたのだと思います。細かいことは覚えていませんが、一ひねり必要なので、野菜の大喜利を描きました。唐辛子、ミョウガ、そしてニンニク。ヴェジタリアンとかオバタリアン(全然違いますが)、そんな言い方の流行っていた頃のことだったと思います。

数日前、あるアメリカ人と日本語で話していたのですが、ヴェジタリアンの話題になりました。私の知っている日本人には一人もいないと言ったら、彼女は友人、知人に数人いるといいます。

そして、生家がそうなので、生まれながらのヴェジタリアンや、動物を殺して食べるのが嫌だからヴェジタリアンになった人とか、いろいろ聞きました。よく分からないし、つつこみどころもいっぱい気分でしたが、まあ私にちんぷんかんぷんということにしておきました。

2010/12/15 団士郎